

てら どこ
寺 所 遺 跡

2019年3月

長野県飯田市教育委員会

序

私たちの住む飯田市は、中央アルプスと南アルプスに挟まれた伊那谷の南部に位置し、古くから交通の要所として栄えてきました。また、海拔400mの天竜川河畔から、海拔2000mの中央アルプス、海拔3000mの南アルプスまでの変化に富んだ地形と豊かな自然に恵まれています。そうした自然を生かし、小京都といわれる飯田城下町を中心に、まちの暮らし、里の暮らし、山の暮らしが営まれ、古代から伝わる伝統文化が息づいています。

近年、継続的に実施されている埋蔵文化財包蔵地の発掘調査によって、当地方の原始・古代史が次第に明らかになってきております。こうした結果、当地方における先人たちの活動は、古く3万年以上も前の旧石器時代にさかのぼることがわかつてきました。それ以降、当地方に暮らした人々の足跡を追つてみると、その生活域は現在の私たちが暮らす箇所と重なってくることが多いことも分かりました。そこからは、人間の営みの継続性を知ることができます、埋蔵文化財を残していくながら活用することの難しさも強く感じています。

埋蔵文化財は文字どおり地下に埋もれているため、なかなか身边に感じることが少ないと思います。しかし、埋蔵文化財は私たちの祖先の歩んできた足跡を示しており、当地方の歴史を雄弁に語ることができるものです。このような文化財は、一度壊してしまうと二度とは元に戻らないため、できる限り現状で保存することが最善といえます。しかし、現代に生きる私たちの暮らしに欠かせない開発事業との間では、発掘調査を実施して記録に残して保存することで後世に伝えることもやむを得ないものです。

今回発掘調査を実施した寺所遺跡は、松尾地区の天竜川氾濫原を望む低位段丘上に立地しています。昭和40年代に学術発掘調査が実施されており、出土土器から弥生時代中期前葉の寺所式土器が設定され、天竜川の氾濫原に近い段丘上を利用した水田による稻作を本格的に導入した時期と考えられています。

今回の発掘調査報告書には、平成5年に寺所地区コミュニティー防災センターに先立ち発掘調査を実施したものと、平成22年に新井地区コミュニティー消防センター敷地に防火貯水槽を設置するために事前に発掘調査を実施したものを収録しました。特に、前者は発掘調査が実施されてから四半世紀近くも経て記録保存として十分な責務を果たしていない状況で、飯田市教育委員会としての責任を痛感しています。調査結果は本文で述べられているとおりですが、今後、本書が広く活用されるとともに、当地方の皆様に歴史や文化財がより身近に感じられるように普及活動を行うことが私どもの使命とも考えます。

最後になりましたが、発掘調査に際し多大なるご理解とご協力をいただきました地元松尾寺所・新井地区の皆様方をはじめ、本調査・報告書刊行に関係された皆様に、深く感謝を申し上げます。

平成31年3月

飯田市教育委員会

教育長 代田昭久

例　　言

1. 本報告書は、寺所地区コミュニティー施設建設に先立ち実施された飯田市松尾寺所5748番地、及び防火貯水槽設置に先立ち実施された飯田市松尾新井6133番1所在の埋蔵文化財包蔵地「寺所遺跡」の緊急発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、飯田市教育委員会が実施した。
3. 調査は飯田市松尾寺所5748番地については平成5年度、飯田市松尾新井6133番1については平成22年度に現地調査を実施し、前者は平成6年度に基本的な整理作業、両者の最終的な整理作業を平成29・30年度に実施して発掘調査報告書を刊行した。
4. 本調査における発掘調査位置は、飯田市松尾寺所5748番地については飯田市埋蔵文化財基準メッシュ図の区画L C 85-17-8に位置し、グリット設定は株式会社ジャステックに委託した。飯田市松尾新井6133番1については、飯田市新埋蔵文化財基準メッシュ図区画M C 85-7-40に位置し、グリット設定は有限会社M2クリエーションに委託した。
5. 寺所遺跡の発掘調査及び整理作業には、略号に地番を付してTR D5748・TR D6133-1を用いた。また、遺構には略号として、竪穴建物-S B、墳丘墓-S M、溝-S Dを用いた。
6. 寺所遺跡は5次にわたる調査が実施されている。年次順に以下とする。なお、調査の概要については第Ⅱ章第4節で記述する。
昭和43年試掘調査：第Ⅰ次調査　昭和46年発掘調査：第Ⅱ次調査　平成5年度調査：第Ⅲ次調査
平成8年度調査：第Ⅳ次調査　平成22年度調査：第Ⅴ次調査
7. 土層観察については、小山正忠・竹原秀夫 2005『新版 標準土色帖』の表示に基づいて記録した。
8. 遺構図の数字は、検出面・床面からの深さ（単位cm）を示している。
9. 遺構写真は発掘調査担当者が、遺物写真は山下誠一が撮影した。
10. 本書の執筆は諭谷恵美子・羽生俊郎の助言により山下誠一が行い、馬場保之・下平博行が総括した。
11. 本書に関する出土品及び諸記録は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館・飯田市上郷考古博物館で保管している。

目 次

本文目次

序	
例言	
第Ⅰ章 経過	1
第1節 第Ⅲ次調査	1
(1) 調査に至る経過	1
(2) 調査の経過	1
① 発掘調査	1
② 基本的整理作業	1
(3) 整理作業及び発掘調査報告書刊行	1
第2節 第Ⅴ次調査	2
(1) 調査に至る経過	2
(2) 調査の経過	2
① 発掘調査	2
② 基本的整理作業	2
(3) 整理作業及び発掘調査報告書刊行	2
第3節 調査組織	2
(1) 調査及び整理作業	2
(2) 事務局	3
第Ⅱ章 遺跡の環境	4
第1節 自然環境	4
第2節 歴史環境	5
第3節 寺所遺跡の立地	6
第4節 寺所遺跡の発掘調査と概要	7
第Ⅲ章 第Ⅲ次調査結果	11
第1節 調査区の設定	11
第2節 基本層序	12
第3節 遺構	12
(1) 壇穴建物	12
① SB07	12
② SB08	12
③ SB09	13
④ SB10	14

(2) 土坑・小柱穴等	14
① BE35P4・BE35P7	14
第4節 遺物	15
(1) 遺物の出土状況について	15
(2) 弥生時代中期中葉の土器について	19
① 寺所式土器をめぐる学史について	19
② 出土土器について	19
③ 出土土器の分類について	19
④ 出土土器の概要について	20
⑤ 出土土器の様相について	21
(3) 弥生時代中期の石器について	23
① 出土した石器について	23
② 石器の型式分類について	23
③ 出土石器の概要について	23
(4) 弥生時代後期・古墳時代中期・平安時代の遺物について	24
① 弥生時代後期	24
② 古墳時代中期	24
③ 平安時代	24
第IV章 第V次調査結果	56
第1節 調査区の設定	56
第2節 基本順序	56
第3節 遺構と遺物	56
(1) 積穴建物	56
① SB15	56
(2) 墳丘墓	57
① SM02	57
(3) 溝	59
① SD14	59
② SD15	59
(4) 遺物	60
① 土器	60
② 石器	60
第V章 まとめ	66
第1節 弥生時代	66
(1) 土器・石器について	66
① 弥生時代中期中葉の土器について	66
② 弥生時代中期中葉の石器について	68

(2) 集落について	68
① 弥生時代中期の集落について	68
② 弥生時代後期の集落について	69
第2節 古墳時代・平安時代	69
(1) 古墳時代中期後葉の集落・墓域について	69
(2) 平安時代の集落について	70
引用・参考文献	71
報告書抄録	89

挿 図 目 次

挿図1 遺跡の位置図	8
挿図2 調査位置及び周辺遺跡図	9・10
挿図3 第Ⅲ次調査遺構全体図	11
挿図4 基本層序	12
挿図5 SB07	12
挿図6 SB08	13
挿図7 SB09	13
挿図8 SB10	14
挿図9 BE35P4・BE35P7	15
挿図10 グリット出土遺物の出土分布	16
挿図11 土坑・小柱穴等	17・18
挿図12 SB07・SB08・SB09・SB10出土土器	25
挿図13 土坑・小柱穴等、BE35P4・BE35P7及び周辺グリット出土土器	26
挿図14 BE35P4・BE35P7及び周辺グリット出土土器その1	27
挿図15 BE35P4・BE35P7及び周辺グリット出土土器その2	28
挿図16 BE35P4・BE35P7及び周辺グリット出土土器その3	29
挿図17 BE35P4・BE35P7及び周辺グリット出土土器その4	30
挿図18 BE35P4・BE35P7及び周辺グリット、SB09及び重複グリット出土土器	31
挿図19 SB09及び重複グリット出土土器その1	32
挿図20 SB09及び重複グリット出土土器その2	33
挿図21 SB09及び重複グリット出土土器その3	34
挿図22 SB09及び重複グリット出土土器その4	35
挿図23 SB09及び重複グリット出土土器その5	36
挿図24 SB09及び重複グリット出土土器その6	37
挿図25 SB09及び重複グリット出土土器その7	38

挿図26	SB09及び重複グリット出土土器その8	39
挿図27	SB09及び重複グリット、その他グリット等出土土器	40
挿図28	その他グリット出土土器その1	41
挿図29	その他グリット出土土器その2	42
挿図30	その他グリット、A・B・Cトレンチ出土土器	43
挿図31	Cトレンチ、包含層出土土器	44
挿図32	包含層出土土器	45
挿図33	包含層出土土器、小柱穴等出土石器	46
挿図34	SB09及び重複グリット出土石器その1	47
挿図35	SB09及び重複グリット出土石器その2	48
挿図36	BE35P4・BE35P7及び周辺グリット出土石器	49
挿図37	BE35P4・BE35P7及び周辺グリット、その他グリット出土石器	50
挿図38	その他グリット、包含層出土石器	51
挿図39	包含層出土石器	52
挿図40	第V次調査遺構全体図及び第IV次・第V次調査遺構全体図	55
挿図41	基本層序	56
挿図42	SB15	57
挿図43	SM02及び推定復元図	58
挿図44	SD14・SD15	59
挿図45	SB15出土土器その1	61
挿図46	SB15出土土器その2	62
挿図47	SB15・SM02出土土器	63
挿図48	SB15・SM02出土石器	64

表 目 次

第1表	第III次調査出土石器観察表その1	53
第2表	第III次調査出土石器観察表その2	54
第3表	第V次調査出土石器観察表	65

図 版 目 次

図版1	S B07 S B07遺物出土状態 S B07遺物出土状態(部分)	73
図版2	S B07・S B08 S B09 S B09炉址	74
図版3	S B09遺物出土状態 S B10 S B10遺物出土状態(部分)	75
図版4	土坑・小柱穴等(中央部) 土坑・小柱穴等(南西部) BE35P4・BE35P7	76
図版5	調査区全景(北西から) 調査区全景(南東から) 調査区全景(北東から)	77

図版6	SB07・08・10出土土器、BE35P4・BE35P7及び周辺グリット出土壺a1・a2・b・c	78
図版7	BE35P4・BE35P7及び周辺グリット出土甕a1・a2・b、 SB09及び重複グリット出土壺a1・a2・b・c	79
図版8	SB09及び重複グリット出土壺d、甕a1・a2・b1・b2	80
図版9	SB09及び重複グリット出土人面付土器（正・裏面）、 その他グリット等出土壺a1・a2・b、甕a1・a2	81
図版10	その他グリット等出土甕b1・b2、Cトレンチ出土壺a・甕b2、 包含層等出土壺a1、甕a2・b	82
図版11	BE35P4・BE35P7及び周辺グリット出土石器 SB09及び重複グリット出土石器 その他グリット等出土石器	83
図版12	SB15全景（南西から） SM02全景（北東から）	84
図版13	SM02周溝土層 SD14全景（北東から） SD15全景（北東から）	85
図版14	調査区全景（北から） 調査区全景（南から）	86
図版15	SB15出土壺 SB15出土甕 SB15出土甕	87
図版16	SB15出土甕 SB15出土石器 SM02出土石器	88

第Ⅰ章 経過

第1節 第Ⅲ次調査

(1) 調査に至る経過

飯田市は松尾寺所地区から要望のあった老朽化した地区の集会施設（新井地区コミュニティー消防センター）を国の補助金を利用して新築することを計画した。当該地は埋蔵文化財包蔵地寺所遺跡に該当し、遺跡に影響が及ぶことが考えられた。そこで、飯田市・寺所区・飯田市教育委員会の3者による協議を実施し、試掘調査を実施して本調査の可否を判断することとなった。なお、調査にかかる費用については、飯田市教育委員会が負担することとなった。

試掘調査は平成5年9月9日～9月13日に実施した。建物が建設される箇所にA・B・Cトレーナーを設定して遺跡の状況を確認した。その結果、遺構・遺物が確認され、建物が建設される部分を対象として本調査が必要と判断された。

(2) 調査の経過

① 発掘調査

現地調査は平成5年9月16日～10月1日に実施した。9月9日に重機により調査区を拡張し、13日より調査員・作業員による発掘調査を開始した。当初から包含層からの弥生土器の出土が多く、また竪穴建物・土坑等の遺構も検出され、順次掘り下げ調査を進めた。並行して写真撮影・図面作成作業を済ませ、9月29日に現地説明会を実施し、10月1日には現地における全ての作業が終了した。その後、飯田市考古資料館において、図面・写真類の基礎的な整理を行った。

② 基本的整理作業

基本的整理作業については、平成6年度に飯田市上郷考古博物館で実施した。遺物の洗浄・注記・接合・復元作業を実施し、土器の拓本作業も実施した。当初は平成6年度で発掘調査報告書を刊行する予定であったが、他事業での業務が多くて多くの作業が実施できずに積み残す結果となってしまった。

(3) 整理作業及び発掘調査報告書刊行

整理作業と発掘調査報告書刊行については平成29・30年度で実施することとなり、飯田市考古資料館で作業を実施した。出土遺物は、遺物実測・拓本作業を行った。遺物実測図等はトレースを行い、遺物図版とした。遺構実測図については遺構別図版等を作成するために第2原図を作成し、トレースを実施して遺構図版とした。遺構・遺物について写真図版を作成した。その後、原稿を執筆して本報告書刊行となった。

第2節 第V次調査

(1) 調査に至る経過

飯田市は、平成22年度で新井地区コミュニティー消防センターの敷地内に防災貯水槽の設置を計画した。当該地は寺所遺跡の範囲内に該当するため、平成22年9月2日付飯田市長名で文化財保護法第94条の通知が提出された。現地は平成8年度に新井地区コミュニティー消防センター建築に先立ち発掘調査が実施され、竪穴建物や墳丘墓が調査されていた。その北東側隣接地で未調査箇所があるため、遺構・遺物が検出される可能性が高かった。そこで、飯田市交通防災課・新井地区・飯田市教育委員会による3者協議を実施し、防火貯水槽設置箇所を対象として発掘調査を実施することとなった。

(2) 調査の経過

① 発掘調査

現地調査は平成22年9月27日～10月27日に実施した。9月27日に重機により調査区を拡張し、翌28日より調査員・作業員による発掘調査を開始した。隣接地で調査した墳丘墓や新たな竪穴建物が検出され、順次掘り下げ調査を進めた。並行して写真撮影・図面作成作業を済ませ、10月27日には現地における全ての作業が終了した。その後、飯田市考古資料館において、図面写真類の基礎的な整理を行った。

② 基本的整理作業

基本的な整理作業は平成22年度に飯田市考古資料館で実施した。遺物の洗浄・注記・接合・復元作業を実施し、一部の弥生中期土器については拓本作業も実施した。当初は平成23年度で整理作業を実施して発掘調査報告書刊行する予定であったが、他事業での業務が多く、遺物実測・写真撮影作業、遺構の第2原図の作成・トレース・版組等が実施できずに積み残す結果となってしまった。

(3) 整理作業及び発掘調査報告書刊行

整理作業と発掘調査報告書刊行については平成29・30年度で実施することとなり、飯田市考古資料館で作業を実施した。出土遺物は、遺物実測・拓本作業を行った。遺物実測図などはトレースを行い、遺物図版とした。遺構実測図については遺構別図版などを作成するために第2原図を作成し、トレースを実施して遺構図版とした。遺構・遺物について写真図版を作成した。平成30年度で遺物写真撮影および写真図版作成を実施し、その後原稿を執筆して本報告書刊行となった。

第3節 調査組織

(1) 調査及び整理作業

平成5・6年度

調査主体者 飯田市教育委員会（教育長 小林恭之助）

調査担当者 澤谷恵美子（5） 福澤 好晃

調査員 小林 正春 馬場 保之 吉川 豊 佐々木嘉和 佐合 英治

吉川 金利 下平 博行 山下 誠一（6）

作業員 地元協力者

平成22年度

調査主体者 飯田市教育委員会（教育長 伊澤 宏爾）

調査担当者 羽生 俊郎

調査員 濵谷恵美子 下平 博行 坂井 勇雄

作業員 地元協力者

平成29・30年度

調査主体者 飯田市教育委員会（教育長 代田 昭久）

整理担当者 濱谷恵美子 羽生 俊郎 山下 誠一

調査員 木下 正史（29）春日 宇光（30）佐々木佑里香 福井 優希

作業員 伊東 裕子 木下由紀子 関島真由美 竹本 常子 中田 恵

松本 勝子 宮内真理子 森藤美知子 森山 律子 吉川 悅子

（2）事務局

飯田市教育委員会

平成5・6年度

教育次長 松下 勉人

社会教育課長 安野 節（5） 横田 穆（6）

社会教育課 文化係長 原田 吉樹（5） 小林 正春（6）

社会教育課 文化係 吉川 豊 山下 誠一（6） 馬場 保之 濱谷恵美子（5）

吉川 金利 福澤 好晃 下平 博行 伊藤 尚志（6）

平成22年度

教育次長 関島 隆夫

生涯学習・スポーツ課長 松下 敬

生涯学習・スポーツ課文化財保護係長 馬場 保之

生涯学習・スポーツ課文化財保護係 宮澤 貴子 濱谷恵美子 下平 博行 坂井 勇雄

羽生 俊郎

平成29・30年度

教育次長 三浦 伸一

文化財担当課長 馬場 保之

文化財保護係長 下平 博行

文化財保護係 木下 正史（29）羽生 俊郎 村山 博則（30）宮澤 圭（29）

春日 宇光（30）佐々木佑里香 福井 優希 山下 誠一

生涯学習・スポーツ課 文化財活用係 濱谷恵美子

*氏名後の（ ）内数字は、当該年度のうちに異動のあった者の在籍年度を記している。

第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 自然環境

飯田市は長野県南部を並走する木曽山脈（中央アルプス）と、赤石山脈（南アルプス）の前山である伊那山地にはさまれた伊那谷の南端、飯田盆地に位置する。また、平成17年10月1日に上村・南信濃村の2村と合併し、赤石山脈と伊那山地にはさまれた遠山谷も含まれることとなった。

伊那谷は南北に約100kmと長く、中央には諏訪湖を源とする天竜川が南流し、その両岸には国内でも有数な段丘地形が形成されている。北は諏訪地方や松本平の玄関口の塩尻市、南は天竜川と秋葉街道を介して遠州地方に、西は神坂峠や矢作川伝いに美濃地方・三河地方に通じている。こうしたことから、後二者に係る飯田・下伊那地方は長野県の南の玄関口といえる特徴を備えている。

伊那谷の基盤地質は領家帯に属する花崗岩・片麻岩である。一方、伊那谷の東、伊那山地と赤石山脈の間の遠山谷には中央構造線が走っており、赤石山脈は三波帶・戸台構造帶・秩父帯・四十万帯で構成される。この秩父帯・四十万帯から産する硬砂岩・緑色岩・チャート等の堆積岩は、三峰川・小渋川を通して天竜川まで流れ出て、その河床に広く分布している。こうした石材は、旧石器時代以来石器の材料として長く利用されている。

伊那谷の形成は、約250年前に天竜川が流れ出たころから始まる。伊那谷独自の段丘地形は、赤石・木曽の両山脈が隆起するに伴い、沖積地との間に形成された逆断層によるものである。この段丘は下伊那の地質解説によると（下伊那地質誌編纂委員会1976）、高位面、高位段丘・古期扇状地、中位段丘・中期扇状地、低位段丘I・新期扇状地、低位段丘IIの5つに大きく編年されている。

気候からみると、飯田市の年間平均気温は12.8°Cとなり、1月の平均気温は0.8°C、8月の平均気温が25.1°Cと寒暖の差が激しく、内陸性の気候を示している。一方、降水量の面からみれば年間約1600mm、梅雨と台風の季節である6・7・9月には200mmを上回り、太平洋岸式気候に属するともいえる。こうした地理的・気候的条件により、飯田・下伊那地方には暖地性から亜高山帯まで多種多様な動植物がみられる。植物の水平分布からみると暖地性と温帶性の接点にあたり、特に照葉樹林が存在することは県下の他地域と大きく異なっている。

寺所遺跡の所在する飯田市松尾地区は、飯田市街地から南東に2~5kmに位置する。東は天竜川を挟み下久堅地区に、北は飯田松川で上郷地区と、南は毛賀沢川により画されて竜丘地区となり、西は約70mと比較的段差の大きな段丘となって中位段丘上の伊賀良・鼎地区と、また飯田松川の氾濫原と低位段丘上の鼎地区とも接する。地区的東端を天竜川が南流し、鷲流峡の狭窄部より北西側にあたるため飯田松川合流点まで広々とした氾濫原を形成する。地区の大半を占める平坦部は氾濫原を含めて5~6の段丘面で形成されており、低位段丘IIと低位段丘Iと大別でき、標高は380~430mである。それぞれの段丘面の広さは一樣でないが、いずれも南北方向に段丘崖の存在を確認できる。しかし、伊賀良地区からの小河川が何本かあり、それにより小規模な扇状地が形成された部分もあり、そこでは段丘崖の把握は困難となる。前述した大きな段丘崖上は八幡原をはじめとする安定したローム層に覆われた中位段丘上で、標高は440~490mを測る。

第2節 歴史環境

旧石器時代の飯田市は、山本地区の竹佐中原遺跡や石子原遺跡において、後期旧石器時代初頭からそれより遡ると推定される石器群が出土しているのを嚆矢とする。年代は3万年～5万年前と推定されているが、科学的根拠に欠けて異論も存在する。その他の資料は断片的で、旧石器時代の様相は不明な点が多い。

松尾地区は、天竜川・飯田松川の氾濫原と段丘崖を除いた多くが埋蔵文化財包蔵地に該当し、特に古墳の多いことは特筆され、前方後円墳7基・前方後方墳2基・帆立貝形古墳1基・円墳57基・方墳1基を数える。寺所遺跡が立地する松尾地区にかかる歴史環境を、考古学的事実から通観する。

旧石器時代については、八幡原遺跡で彫器が出土しており（飯田市教委1992a）、この時代の痕跡を確認することができる。

縄文時代になると、各所で遺跡が確認されるようになる。上溝遺跡で草創期の有舌尖頭器が出土し（下伊那誌編纂会1991）、寺所遺跡から早期の押型文土器が確認されており（飯田市教委1999）、天竜川に近い低位段丘上における縄文人の生活の一端を知ることができる。前期では、八幡原遺跡から前期後半の竪穴建物・土坑などが調査されている（飯田市教委1992a）。中期になると妙前遺跡から後葉の集落跡が調査されており（飯田市教委2001a）、低位段丘上に立地する該期集落の一つと把握される。後期・晚期については、具体的な生活の様子を物語る資料は今のところ得られていない。

弥生時代になると、前期については造構・遺物は確認されていない。中期では、寺所遺跡から出土した遺物から中期前葉に位置づく「寺所式土器」が設定されており（佐藤1982）、さらに後葉の集落跡も確認されている（飯田市教委1999a）。後期になると、低位段丘上の各所に遺跡が広がる。田園遺跡（飯田市教委1993a・1999b）・松尾城遺跡（飯田市教委1999b）・妙前遺跡（飯田市教委2001a）・清水遺跡（飯田市教委1976・1991a）等から竪穴建物や方形周溝墓が調査され、集落域の様相を知ることができる。この時期になると集落域が中位段丘上にも進出し、松尾北の原遺跡から集落跡が調査されている（飯田市教委1996）。

古墳時代になると、前期では弥生時代から継続する集落が清水遺跡（飯田市教委1976）・松尾城遺跡（飯田市教委1991b）で調査されている。中期中葉から後葉にかけて、下位段丘面の座光寺・上郷・松尾・竜丘・川路地区に前方後円墳を始めとする古墳が築造される。それに伴い、馬具や馬匹埋葬土坑が多く、集落数も激増する。列島や東アジアを含めた情勢の中で、馬匹生産にかかわってヤマト政権との深いつながりを持った結果と考えられる。松尾地区でも物見塚古墳（飯田市教委1992b）・寺所遺跡（飯田市教委1999a）・松尾北の原遺跡（飯田市教委2012）から馬匹埋葬土坑等が確認されており、妙前遺跡（飯田市教委2001a）・田園遺跡（飯田市教委1999b）・久井遺跡（飯田市教委1993b）から該期の集落跡が調査されている。松尾地区では削平・煙滅したものも含めて68基の古墳が築造されており、飯田市内では座光寺・竜丘地区とともに古墳が集中する地域である（飯田市教委2012）。また、前期から中期にかけて弥生時代から継続する墓制として周溝墓があり、八幡原遺跡（飯田市教委1992b）・寺所遺跡（飯田市教委1999a）・松尾城遺跡（飯田市教委1991b）・田園遺跡（飯田市教委1993a・1999b）で調査されている。いずれの遺跡からも貼石をもつ例が確認されており、当地方の概期墓制の一端を知ることができる。

奈良時代から平安時代では、座光寺に所在する恒川遺跡群が伊那郡衙跡であることが長年の調査で確

定され、正倉城等については恒川官衙遺跡として国史跡に指定されている。松尾地区では、久井遺跡で該期の掘立柱建物の一部と考えられる遺構が検出されている（1993b）。集落については、妙前遺跡（飯田市教委2001a）・田圃遺跡（飯田市教委1999b）・清水遺跡（飯田市教委1976・1991b）・八幡原遺跡（飯田市教委1992a）から8世紀から10世紀の竪穴建物が調査されており、その一端を知ることができる。また、奈良・平安時代には古瓦や瓦塔片が出土した御射山廃寺が存在し（飯田市教委1978）、このことから、新たな権力の象徴としての寺院の建立がなされ、当地区が重要な位置を占めていたことが伺われる。

中世には、鎌倉時代には鳩ヶ嶺八幡宮が創建され、八幡町はその門前町として発展した。現在も鬱蒼とした社叢に囲まれ、地域住民からは八幡さまとして親しまれている。本尊は「木造菅田別尊坐像」で正応元（1288）年の銘があり、重要文化財に指定されている。地区の南西部毛賀沢川の北岸の段丘上に松尾城があり、信濃守護職の小笠原氏の本拠であった。南側対岸の鈴岡城も小笠原一族の居城であったが、信濃国守護職を小笠原一族で争った。現在は、松尾城跡・鈴岡城跡とも県史跡に指定され、松尾鈴岡公園として整備されて地域住民に親しまれている。また、松尾城の北東部に隣接する南の原遺跡では、掘立柱建物や堀跡等が調査され、陶磁器類・茶白等の遺物が出土しており、松尾小笠原氏と深い係わりがある居館跡と考えられる。この他、地区的北側には発掘調査が実施された上の城跡があり、土壙・堀跡等が確認されたが、築造・廃絶の時期や城主等については不明の点が多い。また、同城跡と重なる松尾北の原遺跡からは、中世から近代に至るまでの墳墓群が調査されている（飯田市教委1996）。

江戸時代では、地区に重要な街道が2本通っていた。その内1本は秋葉街道で、武田信玄の遠州侵攻の際に整備されたとする説がある。もう一本は遠州街道で、中馬道として江戸時代に発達した。この2本の街道の分岐点は鳩ヶ嶺八幡宮の前であり、現在でも道標（飯田指定文化財）が立っており、地区が交通の要所であることを示している。

幕末から明治時代初期にかけて、毛賀地区の毛賀沢川に北面する段丘崖に橘山窯跡が築造される。昭和24年に個人による窯本体の発掘調査が実施され、平成16年に急傾斜地崩壊対策工事に先立ち灰原が確認された。様相が不明であった近世陶器生産の実態の一部が明らかとなった（飯田市教委2005）。

このように、松尾地区は良好な環境に恵まれて、古くより栄えた地区といえる。

第3節 寺所遺跡の立地

寺所遺跡の立地について簡単に触れる。

寺所遺跡は松尾寺所・新井地区にまたがる250×1,150mの広い範囲をしめ、天竜川の最下段の低位段丘IIa1上に立地する。北・東側は飯田松川の氾濫原となり、遺跡範囲の北部は飯田松川の自然堤防となり、北西側は小さな段丘崖となって低位段丘IIa2に続く。この段丘崖下は、飯田松川の自然堤防の影響が及んでいる北部を除いて湿地帯が帶状に発達する。南西側は同一段丘上の明遺跡が隣接し、北西側の段丘上には妙前遺跡が立地する。東側の天竜川の氾濫原には、松川の自然堤防上に新井遺跡・発句遺跡が立地する。

第4節 寺所遺跡の発掘調査と概要

寺所遺跡の発掘調査とその概要について簡単に触れる。

寺所遺跡の発見は昭和33年にさかのぼる。飯田市松尾寺所地区において、故大澤和夫氏が農協稚蚕飼育桑園の桑抜根中に多くの弥生土器を採集して遺跡であることが確認された。この時採集された土器は、神村透氏によって報告され、続水神平式土器に類似する鉢(甕)の文様から、弥生時代前期の林里式土器と弥生時代中期の阿島式土器の間をつなぐ土器と位置づけられた。(神村1967b)。

昭和43年に、遺跡中央部付近を対象として(挿図1-A)、下伊那教育会・下伊那考古学会により試掘調査が実施された。L字型のトレンチが設定され、溝址2条と古墳時代から弥生時代の遺物が層位別に出土し、寺所式土器は地表面から110~130cm下の最下層の生活面(包含層)から得られた。当該地は湿地帯と乾燥帯の境界箇所であり、西側に位置する溝址Iが湿地帯、東側の溝址IIは乾燥していた。これを第Ⅰ次調査とする。

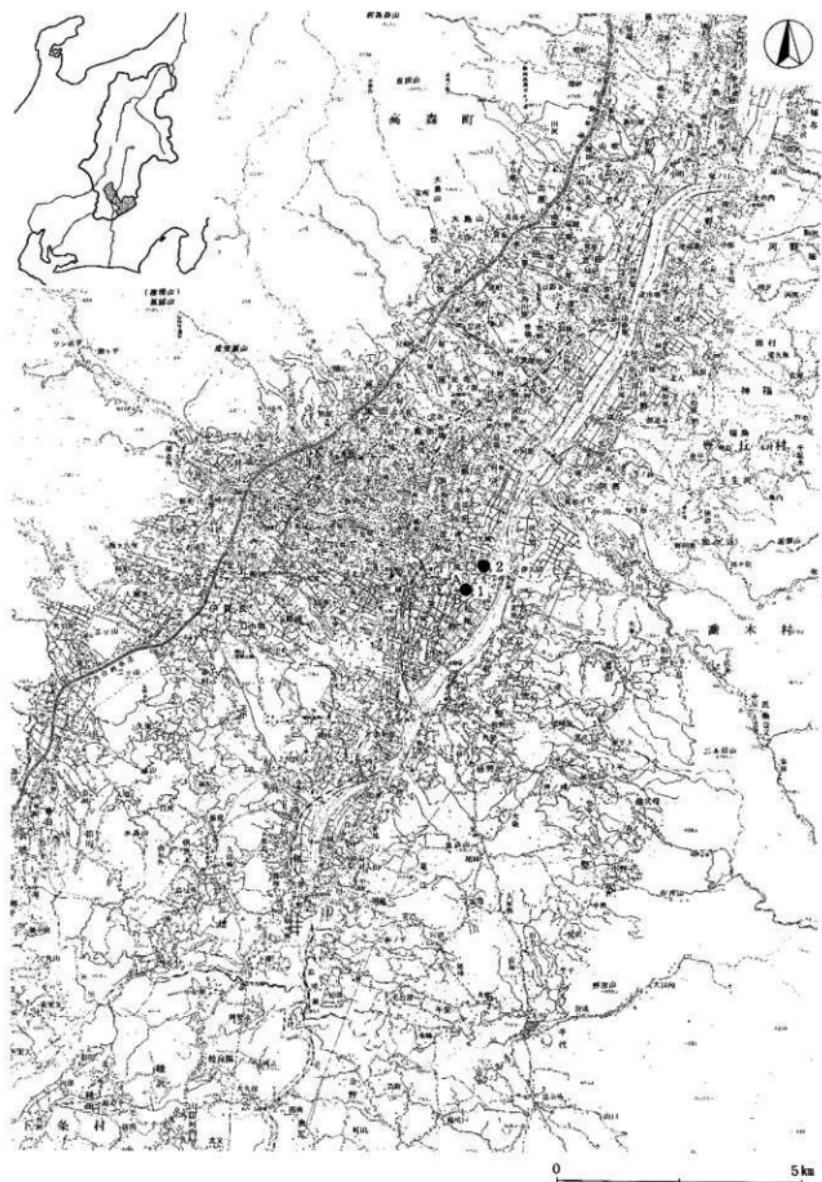
昭和46年に、第Ⅰ次調査地点から東側に70m離れた位置で(挿図1-B)、養魚池が作られることとなり、飯田市教育委員会により発掘調査が実施された。平安時代の竪穴建物5軒・石積土坑2基と弥生時代中期寺所式期の竪穴建物1軒・溝址1条を検出し、寺所式土器が比較的多く出土した。ただし、平安時代の遺構については部分的な調査に終わっている。

第Ⅰ次・第Ⅱ次調査から出土した土器が前記採集資料も一部加えて故佐藤魁信氏によって報告され、伊那谷に弥生文化が定着する前の変革期の時期と把握し、岡谷市庄の畑遺跡から出土した土器から設定された「庄の畑式土器」(藤森他1966)に並行する「寺所式土器」が設定された(佐藤1982)。

平成5年に、第Ⅱ次調査位置から北東側に50m程離れた段丘端部に近い飯田市松尾寺所5748番地が、寺所地区コミュニティー消防センター建設に先立ち飯田市教育委員会により発掘調査が実施された。これを第Ⅲ次調査として、その結果については本発掘調査報告書に収録した。

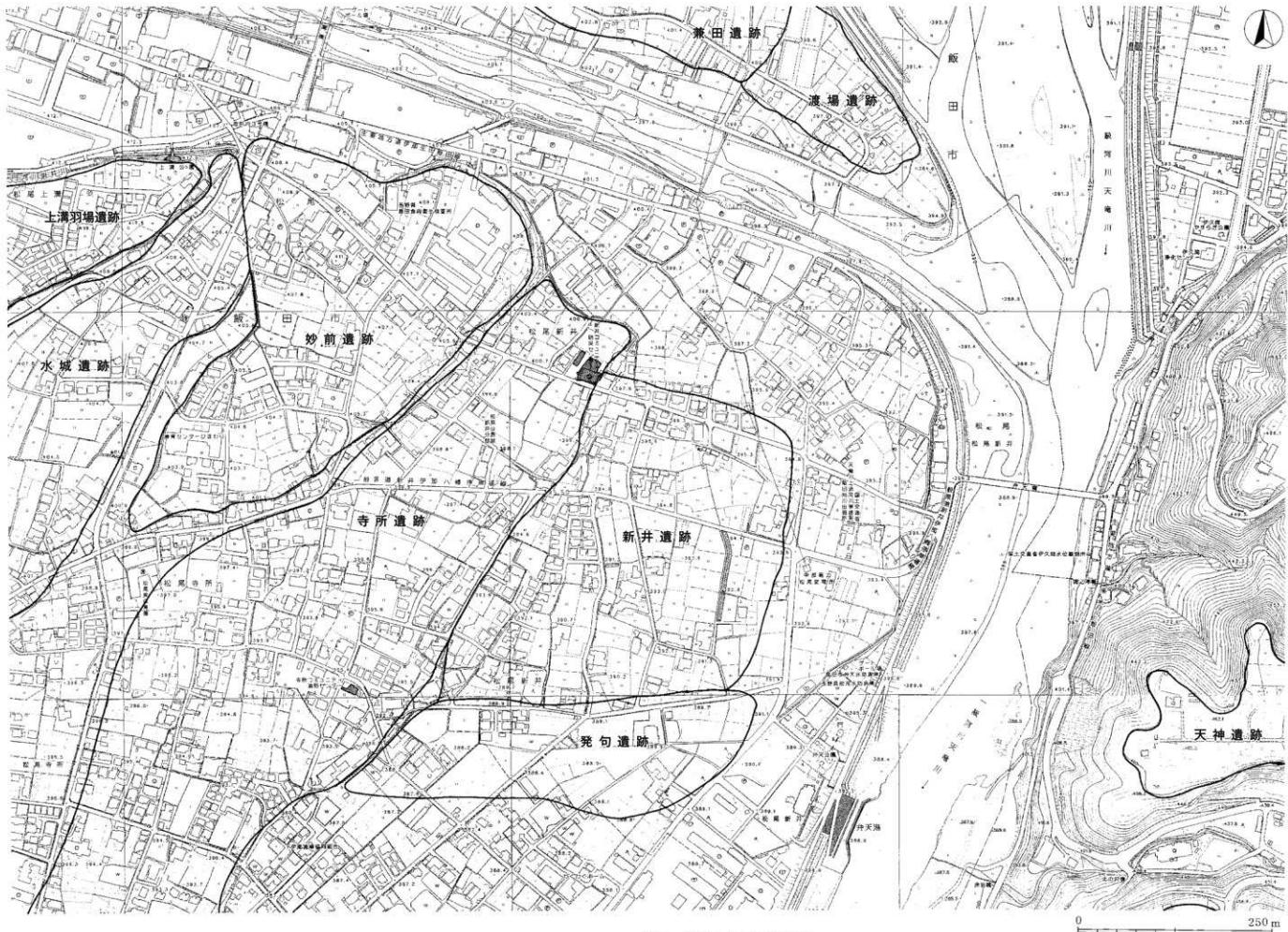
平成8年度に、遺跡北東端部の飯田市松尾新井6132番地1他で新井地区コミュニティー消防センター建設が計画され、飯田市教育委員会により事前に発掘調査が実施された。縄文時代早期の土坑・遺物や弥生時代中期後半の竪穴建物4軒や古墳時代中期後半の墳丘墓5基・馬匹の埋葬土坑1基と墳丘墓周溝に埋葬された馬匹4頭分が検出された(飯田市教委1999)。弥生時代中期後葉でも古い段階の集落と古墳時代中期後葉の馬の埋葬を伴う墓域として注目された。これを第Ⅳ次調査とする。

平成22年度に、第Ⅳ次調査地点の北西隣接地の飯田市松尾新井6133番地1他が、耐震防火水槽設置に先立ち飯田市教育委員会により発掘調査が実施された。これを第Ⅴ次調査として、その結果については本発掘調査報告書に収録した。



1. 第III次調査地点 2. 第V次調査地点 A. 第I次調査地点 B. 第II次調査地点

挿図1 遺跡の位置図



挿図2 調査位置及び周辺遺跡図

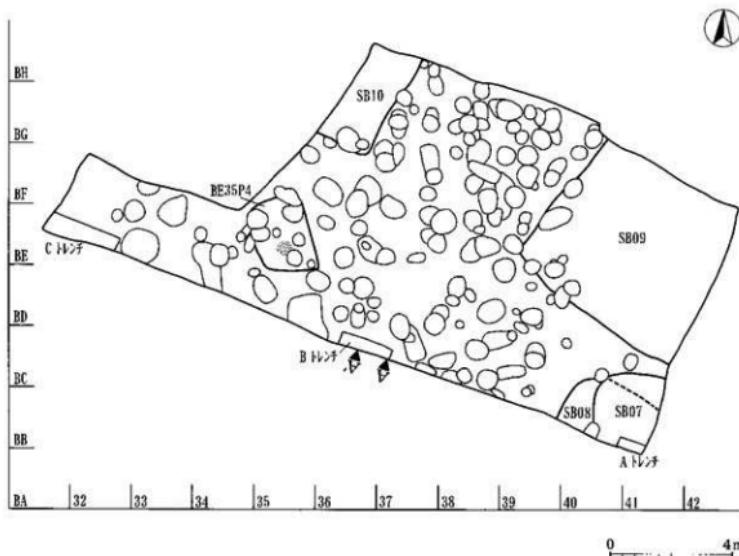
第Ⅲ章 第Ⅲ次調査結果

第1節 調査区の設定

発掘調査位置は、平成15年度まで飯田教育委員会が使っていた日本測地系を用いた飯田市埋蔵文化財基準メッシュ図（飯田市教委1994）による区画、L C 85 17-8に位置する。なお、平成16年度から世界測地系を使った飯田市新埋蔵文化財基準メッシュ図に移行している。

寺所地区コミュニティー施設が建設される箇所は、寺所遺跡の中央部東寄りで、第Ⅱ次調査箇所から50m程北東側に離れた位置となる。東側80m程で天竜川氾濫原への段丘崖となり、段丘端部に近い箇所といえる。寺所地区コミュニティー消防センター建設予定地全体を拡幅して調査区とした。

調査した遺構は、堅穴建物4軒・土坑4基・小柱穴等多数で、調査面積は総計で150m²となる。



挿図3 第Ⅲ次調査遺構全体図

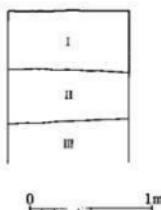
第2節 基本層序

調査区の基本層序については、南西壁のA-A'で示した箇所を選定して挿図4で示した。地表面からの土層は以下による。

- I層：耕土（表土）
- II層：黒褐色砂質土
- III層：黄褐色砂質土

遺構確認面はIII層上面で、比較的容易に検出できた。I層とII層の間に砂のブロックが混じる黒褐色砂質土が認められる箇所もあった。II層全面に弥生時代中期の遺物が含まれており、古墳時代以降の遺物もII層上層を主体として出土した。

A 394.00 A'



挿図4 基本層序

第3節 遺構

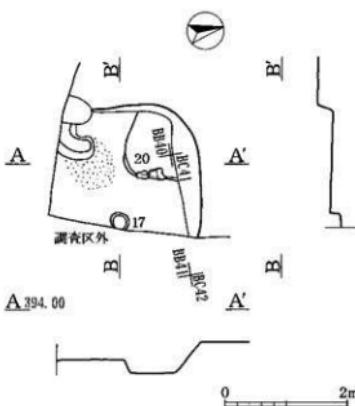
(1) 竪穴建物

① SB07 (挿図5・12)

BB41を中心にして検出し、BB40P1に切られ、弥生時代後期のSB08を切る。東・南側が用地外となり、北西隅と北・西壁の一部を調査した。規模不明の竪穴建物で、主軸方向はN81°Wを示す。壁高は25~31cmを測り、緩やかな壁面をなす。床面は検出された範囲ではたたき状に硬く良好であった。主柱穴は不明で、北西隅直下に120×56cmの長方形で深さ22cm、東用地外壁際に直径28cmで深さ16cmの穴がある。カマドは西壁に位置し、右袖の一部が確認された。焚口部・煙道・左袖等は調査区外にかかるて詳細は不明である。右袖東側の床面上に焼土・炭が認められた。

出土遺物は多くないが、土師器甕(12-1・2)、須恵器蓋(12-3・4)、糸切り杯(12-5~8)がある。

出土遺物から平安時代初頭(9世紀前葉)に位置づけられる。



挿図5 SB07

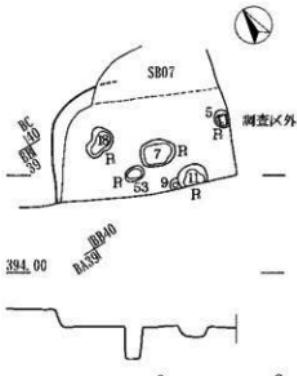
② SB08 (挿図6・12)

BB41を中心にして検出し、平安時代のSB07とBC41P1に切られる。南側が調査区外で、北隅と北西壁の一部を調査した。規模不明の竪穴建物で、主軸方向はN34°Eを示す。壁高は27~32cmを測り、緩やかな壁面をなす。床面は検出された範囲ではたたき状に硬く良好である。主柱穴はP1のみ検出し、

ほかの主柱穴は用地外にかかる不明である。炉址は北東側主柱穴の間に位置する地床炉で、南側半分は調査区外となるが、直径44cmの円形に床面を浅く掘りくぼめ、内部には炭がわずかに認められた。

出土遺物は底部と口縁部が欠ける弥生土器壺(12-9)がある。

出土遺物から弥生時代後期後葉に位置づけられる。

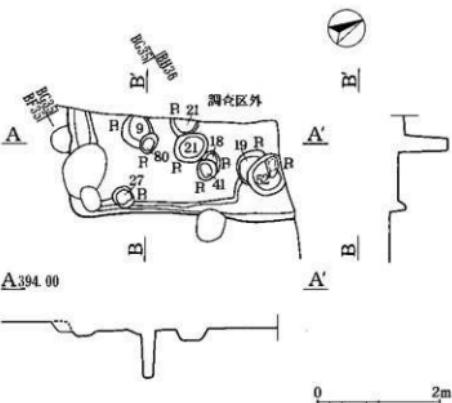


④ SB10 (挿図 8・12)

B G36を中心にして検出し、B E36P 2・B G37P 4と重複する。北西側・北東側が調査区外となって、南西・南東壁の一部を調査した。規模不明の竪穴建物で、主軸方向も不明である。壁面は11~15cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。検出した壁面下ほぼ全面に周溝が確認され、幅10~30cm・深さ6~16cmを測る。床面は検出した全面でややしまりがある程度であった。主柱穴はP 1のみ検出し、そのほかの穴の役割は特定できなかった。

出土遺物は少なく、土器師甕(12~11)・鉢(12~12)が出土した。

出土遺物から古墳時代中期後葉に位置づけられる。



挿図 8 SB10

(2) 土坑・小柱穴等 (挿図11)

調査区全体からS K03~05の土坑3基と小柱穴等が大量に検出された。ただし、両者の区別は大きさや形状等により厳密に分けられてはおらず、総体とすると土坑状・柱穴状の穴が多い。検出面は基盤の黄褐色砂質土上面で、比較的容易に検出できた。形態は円形・稍円形のものがほとんどを占めるが不定形のものもあり、重複も著しい。深さは8~71cmと様々であるが、比較的深くしっかり掘られたものが多い。埋土についても様々であるが、黒色土・黒褐色土・明黒色土・暗褐色土・灰色土等で、砂が入っているものも少数確認された。B D36P 1は底面ほぼ全面に焼土が認められ、後述するB E35P 4・B E35P 7との関連も考えられる。S B08~10の竪穴建物と重複する小柱穴等があり、検出状況から竪穴建物を切ると考えられる。分布状況をみると、竪穴建物がない中央部に多く、南東部・南西部に少ない傾向は認められる。

出土遺物は弥生時代中期中葉の土器・石器がほとんどで、遺物が出土しなかったものもある。小柱穴等で出土したものについては、土器・石器別にまとめて提示した。

出土遺物からみれば弥生時代中期中葉に位置づくが、竪穴建物と重複する箇所の切り合い関係から判断すると弥生時代後期以降となる。しかし、個々の遺構の時期については不明であり、どの様な役割があったかについても不明である。

個々の記述は省略して、特徴的なものについては取り上げて記述する。

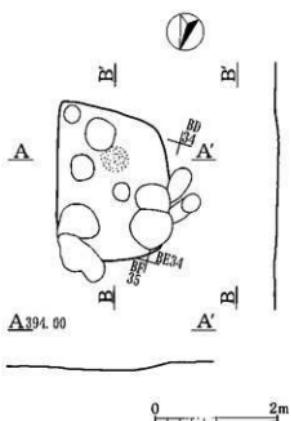
① BE35P4・BE35P7 (挿図9)

B E35を中心にして検出し、他の小柱穴等と重複するが、全体を調査した。2.6×1.8mのやや歪んだ長方形を呈し、主軸方向はN17°Wを示す。総体として10cm程度の浅い皿状に窪み、明確な壁面は確認

できなかった。重複する穴は小柱穴等として把握されており、遺構に付属する可能性は少ない。ただし、BE35P7は小柱穴等として把握されたが、床面上に直径48cmの円形で焼土がみられたもので、地床炉であった可能性も考えられる。床面はたたき状に硬い箇所は認められなかった。

出土遺物はBE35P4から甕破片1点(16-44)と打製石器1点(37-6)が出土した。しかし、遺構のあるB E35を中心にして、周辺のBD34・BD35・BD36・BE 34・BE36・BF35・BF36から土器(13-37~49、14-1~29、15-1~36、16-1~56、17-1~49、18-1~3)・石器(36-1~16、37-1~9)が集中して出土した。

以上の状況から、弥生時代中期中葉の竪穴建物である可能性が高いと考えられる。

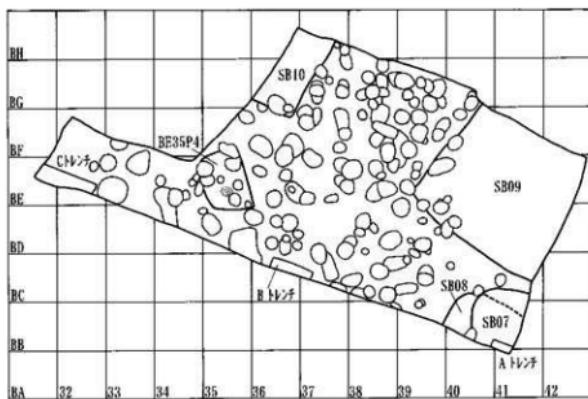


挿図9 BE35P4・BE35P7

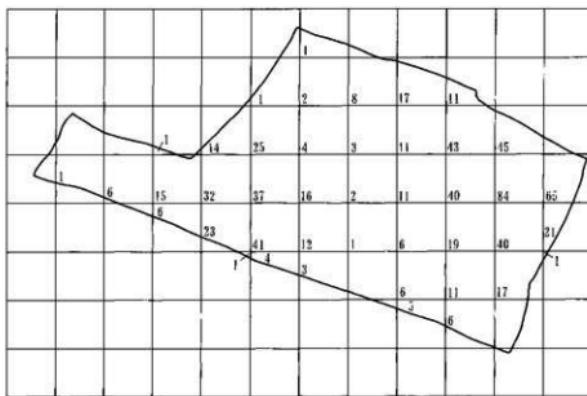
第4節 遺物

(1) 遺物の出土状況について(挿図10)

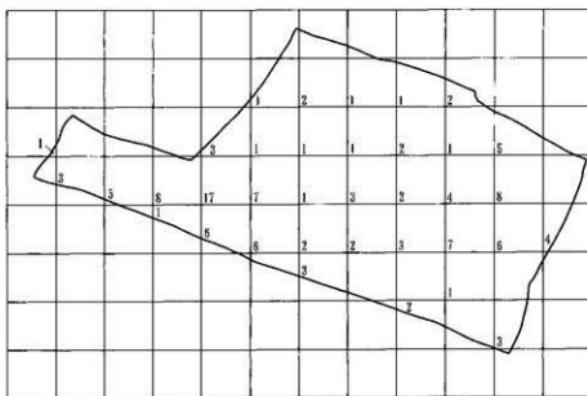
弥生時代中期の土器と石器が多量に出土した。出土状態は表土下のII層から、なかでも遺構検出面の黄褐色砂質土層上の20cm位の範囲に多い傾向が認められた。グリット出土遺物の出土点数を土器と石器別に挿図10で示したが、BD34・BD35・BD36・BE34・BE35・BE36・BF35・BF36に集中することが分かる。この箇所の中心にはBE35P4・BE35P7があり、前節で竪穴建物であった可能性を指摘した。遺構では、SB09からまとまった資料が出土しており、この遺構と重なるBC41・BD40・BD41・BD42・BE39・BE40・BE41・BE42・BF40・BF41からも大量に出土している。また、土坑や小柱穴等の穴から出土したものはあるが、SB09以外のほとんどが包含層から得られたものである。SB09の時期は前節で述べたように弥生時代後期に位置づき、弥生時代中期とは異なる。比較的大きな竪穴建物があるので、竪穴が埋まる過程で周辺の遺物が土とともにに入ったものと把握される。しかし、竪穴周辺のグリット出土遺物に比べても圧倒的に多く、SB09に切られた箇所に概期の竪穴建物があつた可能性も考えられる。そこで、土器と石器を分け、土坑及び小柱穴等で把握された遺物を示し、次にBE35P4・BE35P7周辺の遺物集中箇所、SB09及び重複グリット出土の順で一括提示する。それ以外のグリット(BB39・BB40・BC35・BC36・BC37・BC38・BC39・BC40・BD34・BD37・BD38・BD39・BE32・BE33・BE37・BE38・BF37・BF38・BF39・BG35・BG36・BG37・BG38・BG39・BG40・BH37)及び弥生時代後期(SB08)・古墳時代中期(SB07)・平安時代(SB10)の竪穴建物の埋土中にも少量含まれている分についても一括提示した。試掘調査で設定したトレチから出土した資料についてもまとめて提示する。遺構やグリットで把握できなかった包含層出土資料については、最後に一括提示する。



土器

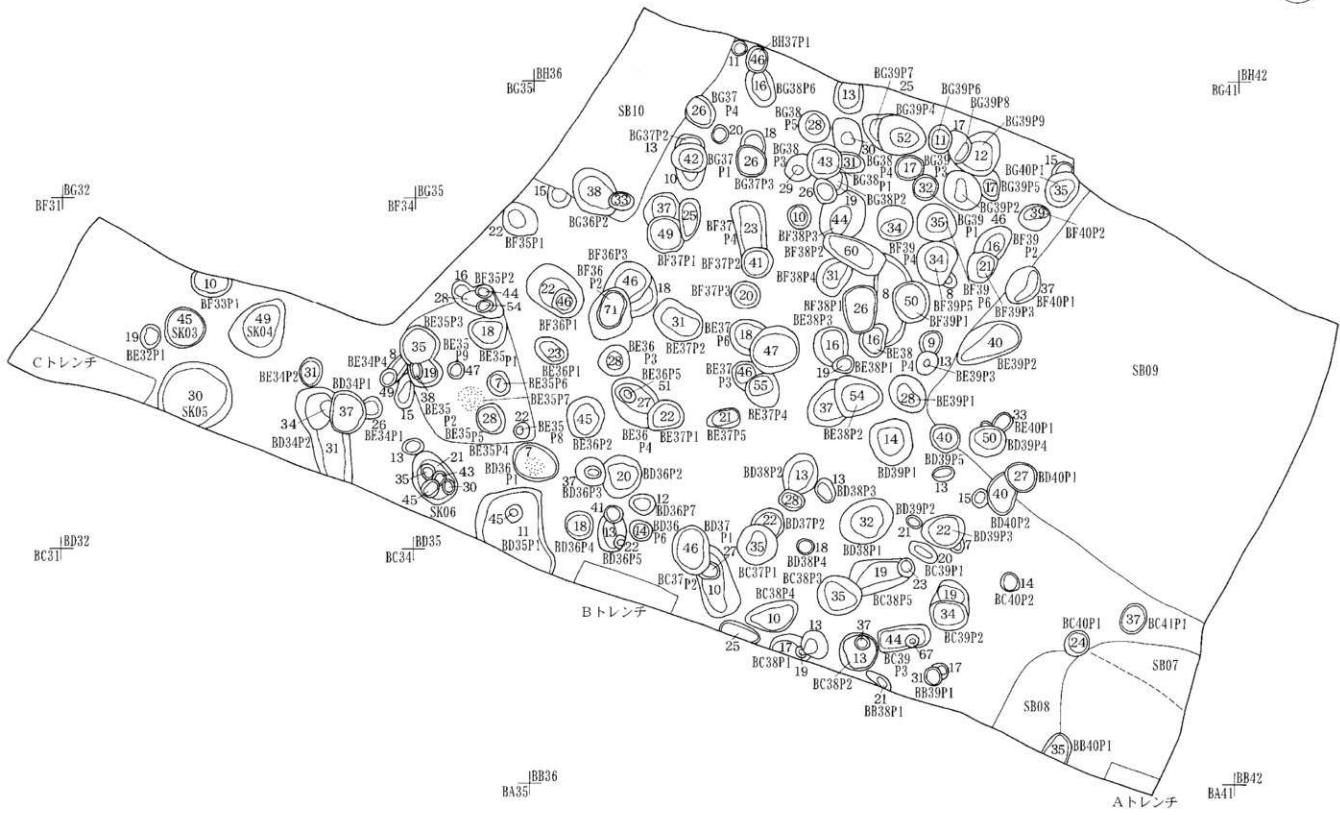


石器



0 5m

挿図10 グリット出土遺物の出土分布



挿図11 土坑・小柱穴等

（2）弥生時代中期中葉の土器について

① 寺所式土器をめぐる学史について

第Ⅲ次調査で「寺所式土器」が出土した。寺所式土器に係わる学史について簡単に触れる。

寺所式土器は、昭和35年に故大澤和夫氏によって採集された資料を基にして型式設定されたといわれているが、文献によって紹介されたものではない。その後、この資料が神村透氏によって正式に報告された（神村1967b）。昭和43年に第Ⅰ次調査、昭和46年に第Ⅱ次調査を実施し、その結果について故佐藤甕信氏によって報告され、寺所式土器が型式設定された（佐藤1982）。

② 出土土器について

今次調査での最大の成果は、弥生時代中期の「寺所式土器」が大量に出土したこと、これまで得られた資料に比べると圧倒的に多い。ただし、破片資料が主体であり、完形に復元できるものは1点もないという制約もある。上記で示したように、土坑・小柱穴等、グリットの集中箇所から出土した資料、SB09とそこに重なるグリット出土資料、その他のグリット出土資料、グリット・造構外出土資料の順に提示した。また、古墳時代・平安時代等の明確に他時期と判断できるものを除いて一括して提示した。資料化にあたっては、出土資料全点を確認し、小破片のものを除いて図化・拓影で示す資料として選択した。これまで提示された資料が少ない時期もあるので、できる限り図化・拓影で示すことに努めた。

③ 出土土器の分類について

出土土器には壺と甕があり、阿島式土器が出土した井戸下遺跡を参考にして（飯田市教委2001）以下の様に形態分類した。

壺

壺a

太くて深い沈線文（以下太沈線文）・沈線文・刺突文・縄文・条痕文等で施文される細頸壺。

胴下部から底部にかけては条痕文で調整される。文様構成で細分するが、赤色塗彩はほとんどない。

a 1：太沈線文・沈線文・刺突文・縄文等で施文される細頸壺。文様構成・胎土から大半が嶺田式の搬入品と考えられる。

a 2：条痕文を沈線文で区画し、そのほかに縄文が施文される細頸壺。平沢式土器・平沢式壺と呼称される壺とその類似品を一括する（植田2017）。

壺b

櫛描文・ヘラ描文が施文されてその間に無文帯に付加沈線研磨技法がみられる細頸壺。文様構成・胎土から瓜郷式土器の搬入品と考えられる。

壺c

沈線文・刺突文・縄文・条痕文で施文される小型壺。赤彩の有無で細分する。大半が嶺田式土器の搬入品と考えられる。

c 1：赤彩されるものを一括する。

c 2：赤彩されないものを一括する。ひさご形を呈するものが多い。

壺d

壺a・b・c以外のものを一括する。口縁部形態で細分した。条痕文系土器の岩滑式土器・続水神平式土器・古井堤式土器・丸子式土器に類似する。

d 1 : 口縁部が大きく外反する広口壺で頸部は太頸となる。

d 2 : 口縁部が外反して直立もしくは内傾する受口壺で頸部は太頸となる。

d 3 : 口縁部が外反してゆるく直立する袋状口縁壺。

甕

甕 a

口縁部が大きく外反する深鉢形を呈し、縦位・横位・斜位・羽状の条痕文が施文される。条痕文の施文原体により細分した。口縁部の形態や施文方法は多様性に富む。在地品と考えられる。

a 1 : 半截竹管による条痕文が施文されるもの。

a 2 : 櫛状工具（まれに貝殻）による条痕文が施文されるもの。

甕 b

口縁部が大きく外反する深鉢形を呈し、櫛状工具・ヘラ状工具・竹管・貝殻による横線文・波状文・刺突文・円弧文・連続山形文・条痕文が施文されるもの。突帯の有無で細分した。

b 1 : 口縁部直下に押圧もしくは刻み突帯があるもの。

b 2 : 押圧もしくは刻み突帯かないもの。

④ 出土土器の概要について

土坑・小柱穴等出土土器

土坑3では壺a (13-1)・甕a 2 (13-2)、土坑4では壺a (13-3)、土坑5では甕a 2 (13-4)、土坑6では壺a (13-5)がある。小柱穴等では、BC39P 2で壺a (13-6)、BC39P 3で甕a 1 (13-7)、BC41P 1で甕a 1 (13-8)、BD35P 1で壺a (13-9・10)・甕a 2 (13-11)、BD36P 2で壺b (13-12)、BD36P 3で壺a 2 (13-13)、BD36P 5で壺a 2 (13-14)・甕a 1 (13-15)・甕a 2 (13-16)、BD36P 5で甕a 2 (13-17)、BE36P 2で甕a 1 (13-18)、BE36P 3で壺a 1 (13-19)、BE36P 5で壺c 2 (13-20)、BE37P 1で壺a 2 (13-21)・甕a 1 (13-22)、BE37P 5で甕a 1 (13-23)、BE39P 3で甕a 2 (13-24)、BF35P 3で壺a (13-25)、BF36P 1で壺a 2 (13-26)、BF38P 2で壺a 1 (13-27・28)・壺c 2 (13-29)・甕a 2 (13-30)、BG37P 1で壺a 1 (13-31)、BG38P 3で壺a 1 (13-32)、BG39P 2で甕a 1 (13-33)、BG39P 4で甕a 1 (13-34)、BG39P 8で甕a 1 (13-35)、BH37P 1で壺a (13-36)が出土した。

BE35P4・BE35P7及び周辺グリット

壺a 1 (13-37~49、14-1~5)・壺a 2 (14-6~12)・壺a (14-13~29)・壺b (15-1~7)・壺c 2 (15-8・9)・壺d 1 (15-12)・壺d 2 (15-10・11)、甕a 1 (15-15~36、16-1~46)・甕a 2 (16-47~56、17-1~26)・甕a (17-27~31)・甕b 1 (17-32~36)・甕b 2 (17-37~49)・甕c (18-1)が出土した。他に、北原式土器の壺 (15-13・14)、嶺田式土器の甕 (18-2)と庄の畠式土器の甕 (18-3)がある。

S809及び重複グリット

壺a 1 (18-4~45、19-1~8)・壺a 2 (19-9~29)・壺a (19-30~48、20-1~20)・壺b (20-21~36)・壺c 1 (20-37)・壺c 2 (20-38~46)・壺d 1 (20-47~55、21-1~6)・壺d 2 (21-7~9)・壺d 3 (21-10~12)、甕a 1 (21-16~32、22-1~43、23-1~59、24-1~36)・甕a 2 (24-37~59、25-1~53)・甕a (25-54・55、26-1~12)・甕b 1 (26-13~32)・甕b 2

(26-33~42、27-1~21)、北原式土器の壺(21-13~15)が出土した。他に、人面付土器(27-23)があり、弥生時代の人物造形品を網羅した設楽博己氏の論考の人面付土器Aに該当する(設楽他2017)。

その他のグリット及びSB07・08・10

壺a 1 (27-24~44)・壺a 2 (27-45~50、28-1~6)・壺a (28-7~15)・壺b (28-16~23)・壺c 1 (28-24)・壺d 1 (28-25~27)・壺d 3 (28-28)、甕a 1 (28-31~50、29-1~31)・甕a 2 (29-32~46、30-1~10)・甕b 1 (30-11~15)・甕b 2 (31-16~23)、鉢(31-24)が出土した。他に、庄の烟式土器の壺(28-29)、弥生時代中期後葉の北原式土器の壺(28-30)が出土した。

B・Cトレンチ

Bトレンチでは、甕a 2 (30-25)・甕b 2 (30-26)が出土した。Cトレンチでは、壺a 1 (30-27)・壺a (30-28~31)・甕b 2 (30-32~34、31-1)が出土した。

包含層等

壺a 1 (31-2~25)・壺a 2 (31-26~28)・壺a (31-32~42)・壺c 2 (31-43)・壺d 1 (31-44)・壺d 2 (31-45)、甕a 1 (31-46~53、32-1~19)・甕a 2 (32-20~37)・甕a (32-38)・甕b 1 (32-39~43)・甕b 2 (32-44~47、33-1~3)が出土した。他に、縄文時代中期後葉に位置づく縄文土器深鉢(33-5)、北原式土器の壺(33-4)が出土した。

⑤ 出土土器の様相について

器種は壺・甕があり、前者はa・b・c・dの4種類、後者はa・bの2種類に分類した。

壺aは口縁部が短く外反する細頸壺で、太沈線文・沈線文・刺突文・縄文・条痕文等で施文される。文様構成によりa 1・a 2の2種類に分類した。

壺a 1は口縁部が縄文(13-37、18-4・5、27-24~28、30-27、31-2・3・5)、沈線文(13-38、18-6)、刺突文(13-39、31-4・6)で施文され、口唇部は1点を除いて(13-39)無文となる。頸部は沈線文(18-5・7・8、27-30、31-2~4)・連続刺突文(18-4)・竹管による縦位の条痕文(13-40・41、18-7)・刻み突帯文(27-29)、胴上部から中央部には沈線文・刺突文・縄文により重三角文・重四角文・連弧文・連続山形文・重円文・円文等が施文される。

壺a 2は胴下部から底部を欠くが全体形がほぼ分かる個体が出土した(14-6)。細い頸部から口縁部が短く外反し、口唇部は縄文が施文される。頸部から胴部に沈線文で区画された条痕文が3段、その間は縄文を地文とした連続山形沈線文が施文される。胴中央部は大きな沈線の山形文で区画された条痕文と円文が施文され、その間は縄文を地文とした三角文と重山形文で埋められる。胴下部は条痕文で調整される。胴中央部は沈線で区画された連弧文となるものも(14-7・10、19-20・22・24・25)がみられる。

壺a 1・a 2共胎土は黒味を帯びた堆積岩の丸い砂粒を含み、東遠江の嶺田式土器の搬入品と把握される(鈴木前掲)。条痕文が施文される胴下部の破片でも、胎土の違いにより壺・甕の区別は容易にできた。ただし、わずかに胎土に白っぽい石英・長石粒を含む地元で作られた個体が認められた(13-41、14-2・4、18-14・20・21・26・27・43、19-5・7・17・19、27-25・28・34・44、30-27、31-5・22)。なお、壺a 1で赤彩される個体はきわめて少なく、3点のみである(13-31、27-36、31-24)。

壺bは沈線文で区画された中に櫛描横線文が施文され、それを縦のヘラ描文・櫛描文で切る。その間の無文帯はヘラ磨きされる(15-1・2・5~7、20-21~34、28-17~23)。色調は黒っぽい灰色で、他の壺と明確に区分できる。こうした特徴から、壺bは三河の瓜郷式土器の搬入品といえる。

壺cは小型壺で赤彩の有無で、c 1・c 2に細分した。赤彩される壺c 1は少なく(20-37, 28-24)、大半がc 2となる。胴部の文様は、ヘラ状工具による横線文・上下の連弧文を付し、その中を半截竹管による刺突文で埋めて連弧文の起点にはボタン状突起文を付け(20-37・42・44・45, 28-24)、胴下部に隆帯・縹文で施文されるものもある(20-40)。胴部に縹文を施文された隆帯をT字状に付してその中を条痕文で埋め、その上部に摺り消し気味の条痕文で埋めた4単位の弧文が施文されものもある(15-9)。他に、半截竹管による浅い刺突文と横線文・連弧文が施文されるものもある(20-41・46)。大半の個体は胎土に黒味を帯びた堆積岩の丸い砂粒を含み、壺aと同様に東遠江の嶺田式土器の搬入品と把握される。ただし、胎土に白っぽい石英・長石粒を含む地元で作られた個体が認められた(13-20, 15-8, 20-41・44)。

壺dは口縁部の形態から広口壺(d 1)・受口壺(d 2)・袋状口縁壺(d 3)に細分した。SB08とそれと重複グリットからの出土が多い(20-47~55, 21-1~12)。壺d 1は口縁端部を面取りして縹文や櫛状工具による押引文・条痕文が施文され(20-48~51)、口縁端部が丸く仕上げられて小突起をもち、その直下に縹文・押圧突帯文が施文されるものもある(20-47)。頸部から胴上部は櫛状工具による横・縱・斜めの条痕文(20-52・55, 21-2・4~6)、頸部に跳ね上げ文(20-53)が施文され、胴下部は深い羽状条痕文で仕上げられる(21-1・3)。壺d 2は口縁部の屈曲部に押圧突帯があり、櫛状工具による条痕文が施文されるものや(21-10・11)、ヘラ状工具による格子状・斜めの文様が施されるものがある(21-8)。壺d 3は口縁部に櫛状工具による浅い条痕文が施文される(21-10・12)。

甕aは深鉢形を呈して条痕文が施文される甕で、施文原体の違いによりa 1・a 2に細分した。口唇部は面取りされ、端部に刻目を施文するものが多く、面取り面に半截竹管・櫛状工具による押引文が施文されるものもある。後者の中には、押し引きが長くなるものもみられる(15-16)。口縁部から胴部はほぼ全面条痕文で施文され、全体に浅いものが多い。焼成は堅く焼き締まり、きわめて良好なものが多い。施文原体で細分したが、半截竹管か櫛状工具かの見分けがつけづらく、間違った判断をしてしまつたものもあることは考えられる。条痕文は縱位・横位・斜位・羽状があり、斜位が最も多く、羽状は少ない。櫛状工具の施文では、羽状の短線文が施文されるもの(24-37, 29-33)、斜位の短線文が施文されるもの(25-5, 29-37)が認められる。ほとんどすべてが胎土に白っぽい石英・長石粒を含み、在地で作られたものであるが、嶺田式土器の搬入品が2点(18-2, 22-17)確認された。他に、深い条痕文が施文される先行する時期に位置づく続水神平式土器の甕(21-21)も出土した。

甕bは口縁部から胴部に横線文・波状文等の文様が施文される甕で、口唇部直下の突帯の有無で細分した。口唇部は面取りされ、端部は刻目が施文される。胴下部は条痕文で施文される。甕b 1は口唇部直下に横線文(まれに波状文)・刻み突帯文・横線文や横線文をヘラ状工具による連続山形文で切るもの順で施文がもの多い(17-35, 26-13・15・20~26, 32-39・40)。口唇部直下がわずかに無文帯となって刻み目突帯文となるもの(17-32, 26-14, 30-11)、口唇部直下に縦の刻み目突帯文が施文されるもの(26-16・17, 30-12~14)、波状口縁となるもの(17-36・37, 26-16・17, 30-11・13)がある。甕b 2は口唇部直下に横線文・半截竹管による円弧文・ヘラによる刺突文が順に施文され(17-43~46, 26-33・34・36・37・40・42, 27-2・15・18, 32-44~47)、横線文はヘラ状工具の連続山形文で切られるものもある(17-42・43, 26-38・39・41, 27-1・3・4・8・10・17, 31-1, 33-1・3)。櫛状工具による円弧文・刺突文・連続山形文が施文されるものある(27-5~7・11, 33-2)。

口縁部が短く外反する甕は（18-1）、瓜郷式土器の搬入品と考えられる。

分類に合せてそれぞれの組成がどのようにになっているかを分析してみる。図版で示した個体について、図化資料・拓影資料を関係なく1点と数えて総数を示す。

壺と甕の比率は、壺335点・甕595点で、壺36%・甕64%と甕の方が多い。壺の比率は、壺a 247点・壺b 31点・壺c 16点・壺d 32点・その他（北原式）7点で、壺aが全体の74%を占めて圧倒的に多い。壺aの比率は、a 1 : 118点・a 2 : 43点とa 1の方がが多い。甕の比率は、甕a 492点・甕b 99点・その他4点で、甕aが全体の83%を占めてこれも圧倒的に多い。甕aの比率は、a 1 : 304点・a 2 : 167点とa 1の方がが多い。甕bの比率は、b 1 : 34点・b 2 : 65点とb 2の方が多い。以上の状況から、壺aと甕aを主体とし、壺b・壺c・甕bが組成すると把握される。

（3）弥生時代中期の石器について

① 出土した石器について

弥生時代中期の石器が大量に出土している。出土状態は土器と同様であり、土器と同様に一括性を重視して提示した。ただし、時間的な制約があり、図化資料については全点確認して選択して提示し、それ以外については図化資料も含めて一覧表で示した。なお、黒曜石や一部チャートを使った石器・剥片が大量に出土している。全点確認して打製石鏃等を図化資料・一覧表掲載資料として選択し、剥片については一覧表にも掲載しなかった。

② 石器の型式分類について

弥生時代の石器については、筆者が弥生時代全体をとおして分析したことがあり（山下2005）、これを踏襲して機能により以下に分類した。

耕起具：打製石斧類を一括し、長さが15cmを超えるものをA類、15cm以下のものをB類とする。

収穫具：石庖丁類・有肩扇状形石器類・横刃型石器に分け、石庖丁類は横刃型石器・抉入打製石庖丁・磨製石庖丁・有肩扇状形石器類は有肩扇状形石器・有抉石器・有柄石器に細分する。なお、磨製石庖丁には未成品があるが、区別しなかった。

工具：磨製石斧類・石錐類・砥石・敲打器に分け、磨製石斧類は大型の両刃である太型始刃石斧とその範疇に入らない大型のものを一括してA類、扁平片刃石斧や扁平両刃石斧・ノミ形石斧を一括してB類、縄文時代の系譜を引く磨製石斧と考えられる乳棒状磨製石斧・定角磨製石斧・ノミ形磨製石斧をC類、石錐類は打製石錐と磨製石錐に細分する。

調理具：石皿・磨石・凹石・台石に分ける。

狩猟具・武器：打製石鏃・磨製石鏃・打製石槍に分け、磨製石鏃は完成品と未完成品に細分した。

③ 出土石器の概要について

土坑・小柱穴等

B D35 P 1 から打製石斧a（33-13）・打製石斧b（33-14）・磨石（33-15）、B D36 P 1 から打製石鏃（33-17）、B E36 P 2 から抉入打製石庖丁（33-16）、B G39 P 2 から打製石鏃（33-18）が出土した。

B E35 P 4・B E35 P 7 及び周辺グリット

打製石斧A（36-1・2）・打製石斧B（36-3～6）・横刃型石庖丁（36-7～11）・抉入打製石庖丁（36-12）・横刃型石器（36-13）・磨製石斧B（36-14）・磨石（36-15）・敲打器（36-16）・打製石鏃

(37-1～6)・磨製石鏃未成品(37-8)・打製石槍(37-7)・打製石錘(37-9)が出土した。

SB09及び重複グリット

打製石斧a(34-1～5)・横刃型石庖丁(34-6～8)・抉入打製石庖丁(34-9・10)・磨製石庖丁(34-11)・有肩扇状形石器(34-12・13)・横刃型石器(34-14、35-1)・磨製石斧B(35-2・3)・磨製石斧未成品(35-4・5)・磨石(35-6・7)・凹石(35-8)・打製石錘(35-9)・打製石鏃(35-10～14)・打製石匙(35-15)が出土した。

その他のグリット及びSB07・08・10

打製石斧A(37-10～12)・打製石斧B(37-13～18)・抉入打製石庖丁(37-19)・有肩扇状形石器(37-20)・有柄石器(37-21)・横刃型石器(38-1～3)・磨製石斧未成品(38-4～6)・打製石鏃(38-8～11)が出土した。

包含層等

打製石斧B(38-12)・有肩扇状形石器(38-13)・横刃型石器(38-14、39-1)・磨製石斧B(39-2)・打製石鏃(39-3～5)が出土した。

土器と同様に一括性を重視して提示したが、図化資料ばかりでなく、一覧表で示した資料も含めて、出土石器の総体としてその組成を示す。

打製石斧A44点・打製石斧B25点・横刃型石庖丁9点・抉入打製石庖丁5点・磨製石庖丁1点・有肩扇状形石器4点・有柄石器1点・横刃型石器12点・磨製石斧B4点・磨製石斧未成品5点・敲打器2点・磨石4点・凹石1点・打製石鏃48点・磨製石鏃未成品1点・打製石錘2点・その他2点となる。

(4) 弥生時代後期・古墳時代中期・平安時代の遺物について

① 弥生時代後期

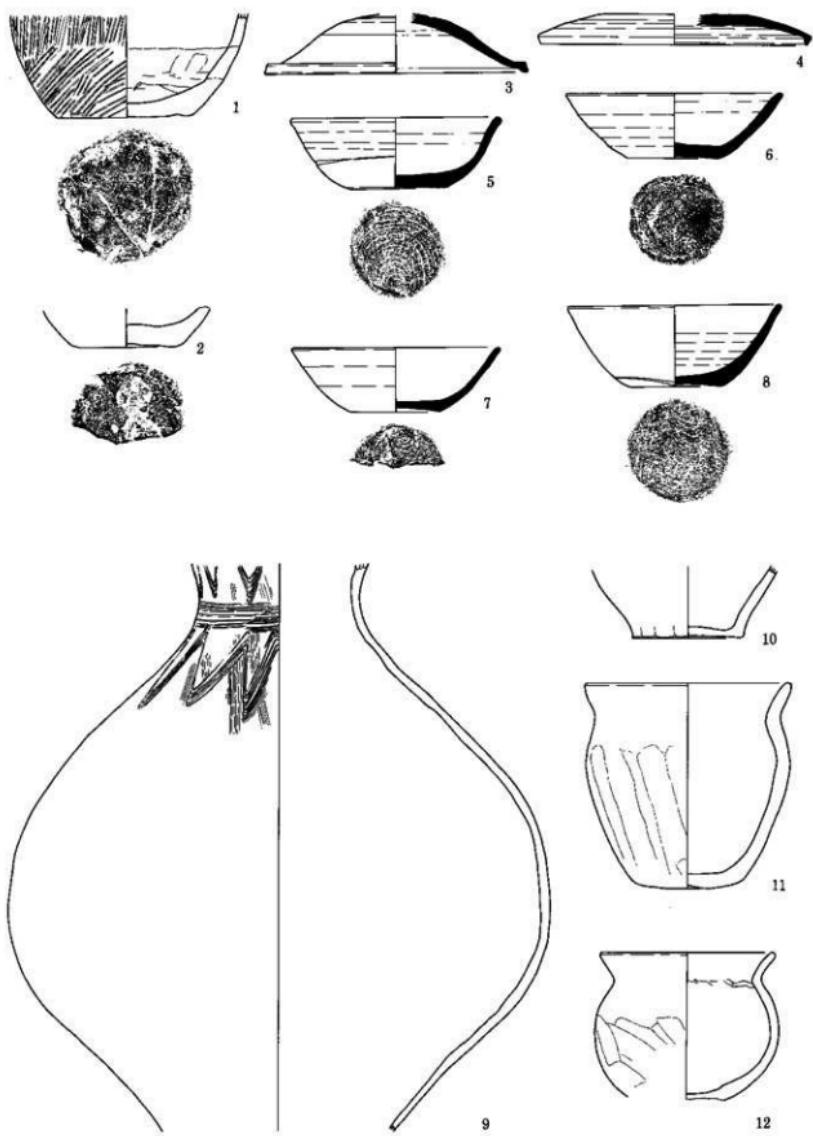
S B08から壺(12-9)が出土した。頸部から胴下部が残り、頸部から胴上部に櫛描の横線文と波状文が施文される。文様構成から弥生時代後期後半から終末に位置づく。なお、S B09から出土した甕底部(12-10)については、同時期と把握される。

② 古墳時代中期

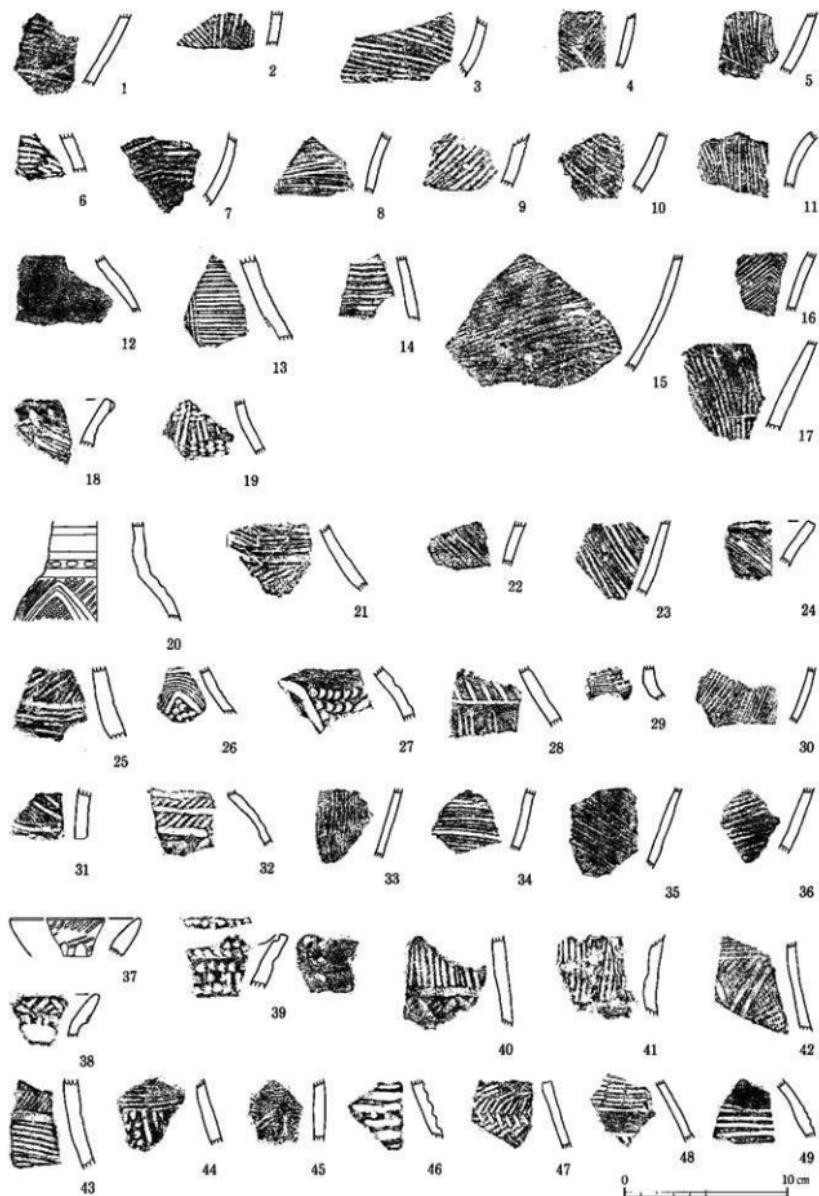
SB10から鉢(12-12)が出土した。短く外反する口縁部と丸い胴部の形態で、底部は一部破損しているが丸底となる。胴部の調整はヘラケズリをナデで消しているが、一部でヘラケズリ痕を確認できる。他に、SB09とBD41から口縁部が外反して平底の底部となる鉢(12-11)、Bトレーニチから口縁部がわずかに直立して底部が丸底となる壺(33-11)、BD41から口縁部がわずかに短く外反してヘラケズリによる上げ底気味の平底となる壺(33-12)が出土した。いずれも古墳時代中期後葉に位置づく。壺の底部の4点(33-6～9)も同時期と把握される。

③ 平安時代

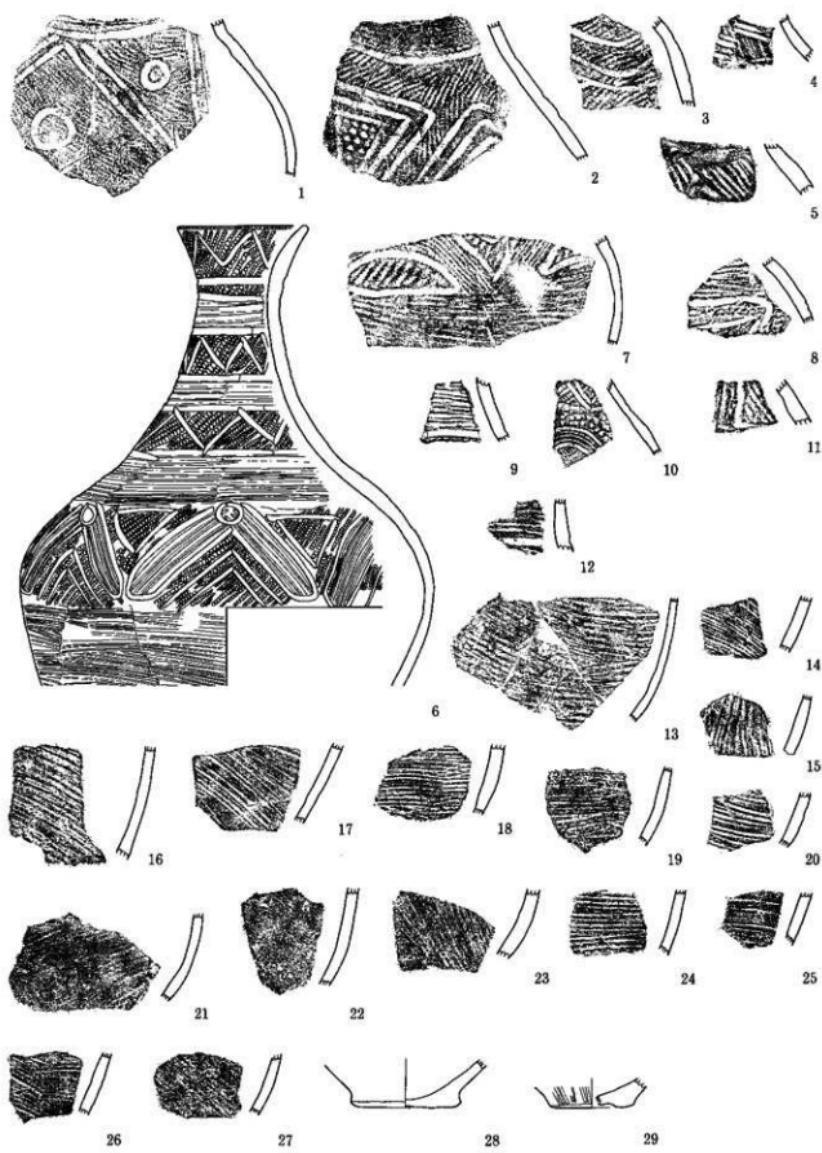
SB07から、ハケ調整される土師器底部(12-1)、須恵器高台杯蓋(12-3・4)・糸切り杯(12-5～7)が出土した。須恵器の形態から平安時代初頭(8世紀末～9世紀初頭)に位置づく。他に、Bトレーニチから出土した丸底気味の平底となりハケ調整される甕(33-10)も同時期と把握される。



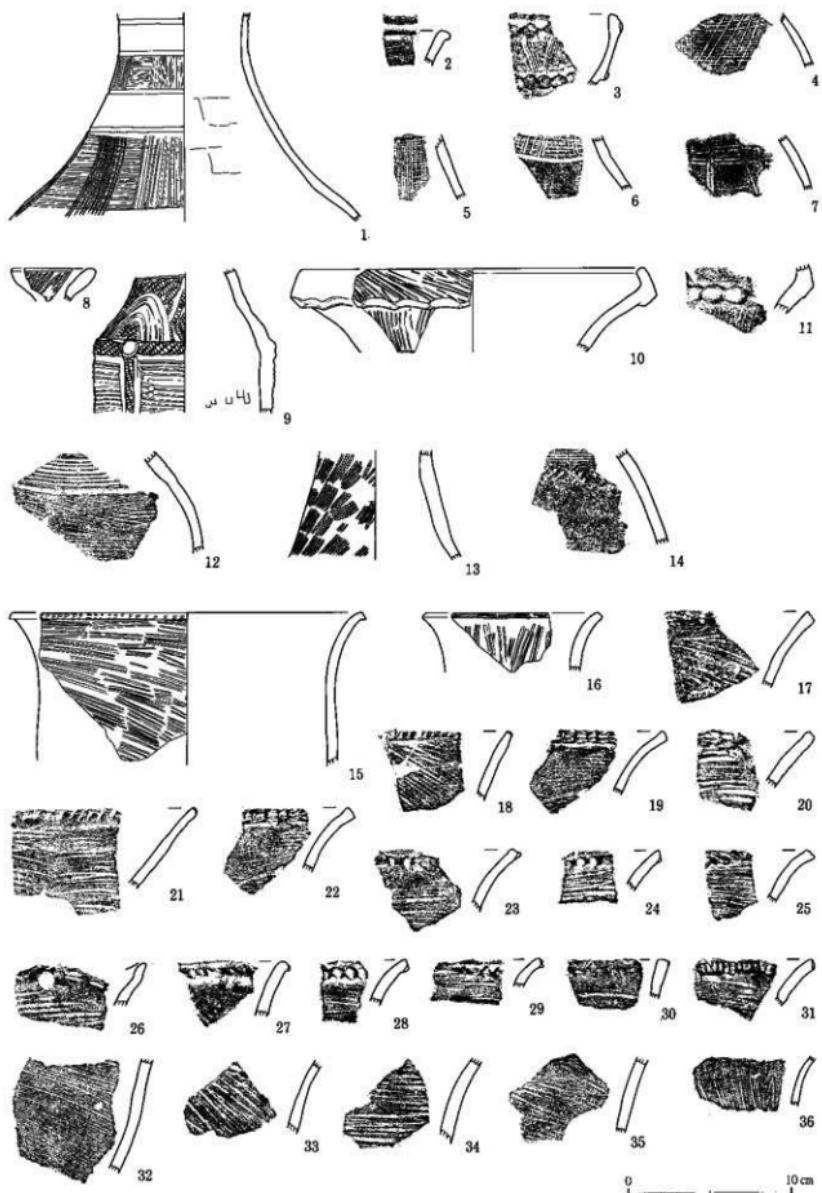
挿図12 SB07・SB08・SB09・SB10出土土器



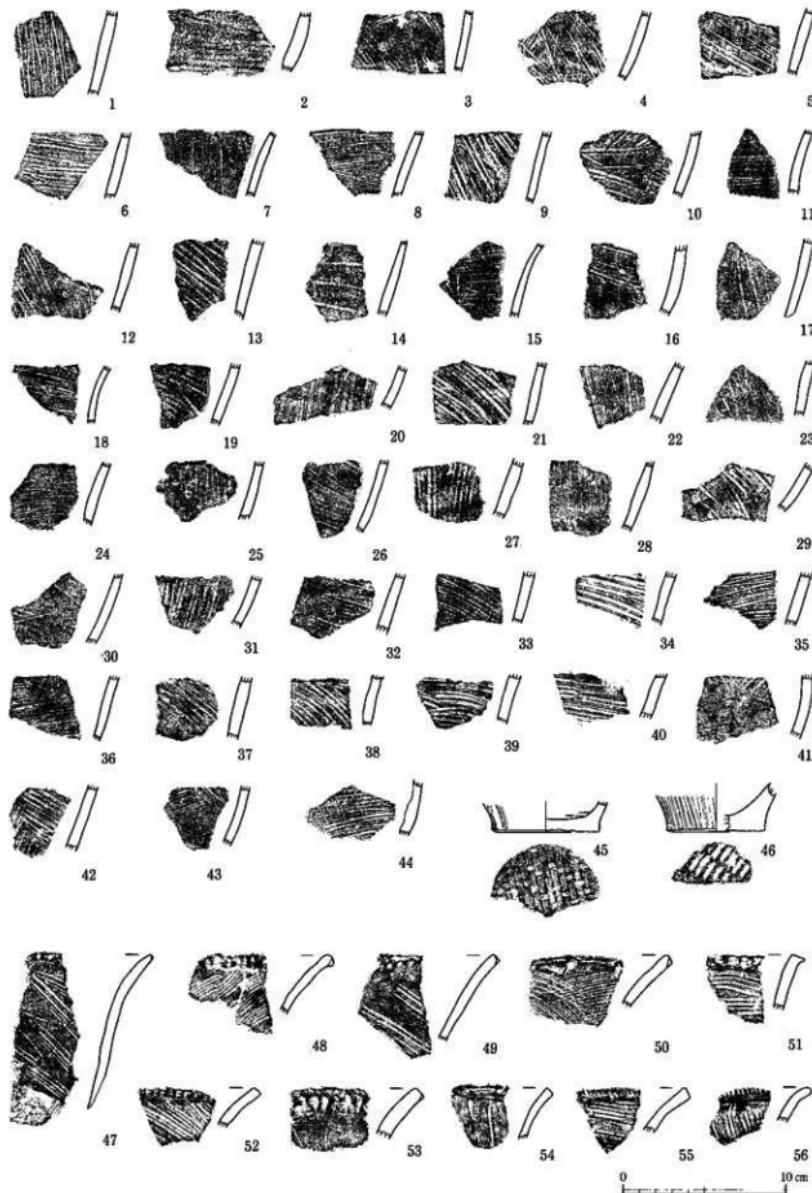
挿図13 土坑・小柱穴等、BE35P4・BE35P7及び周辺グリット出土土器



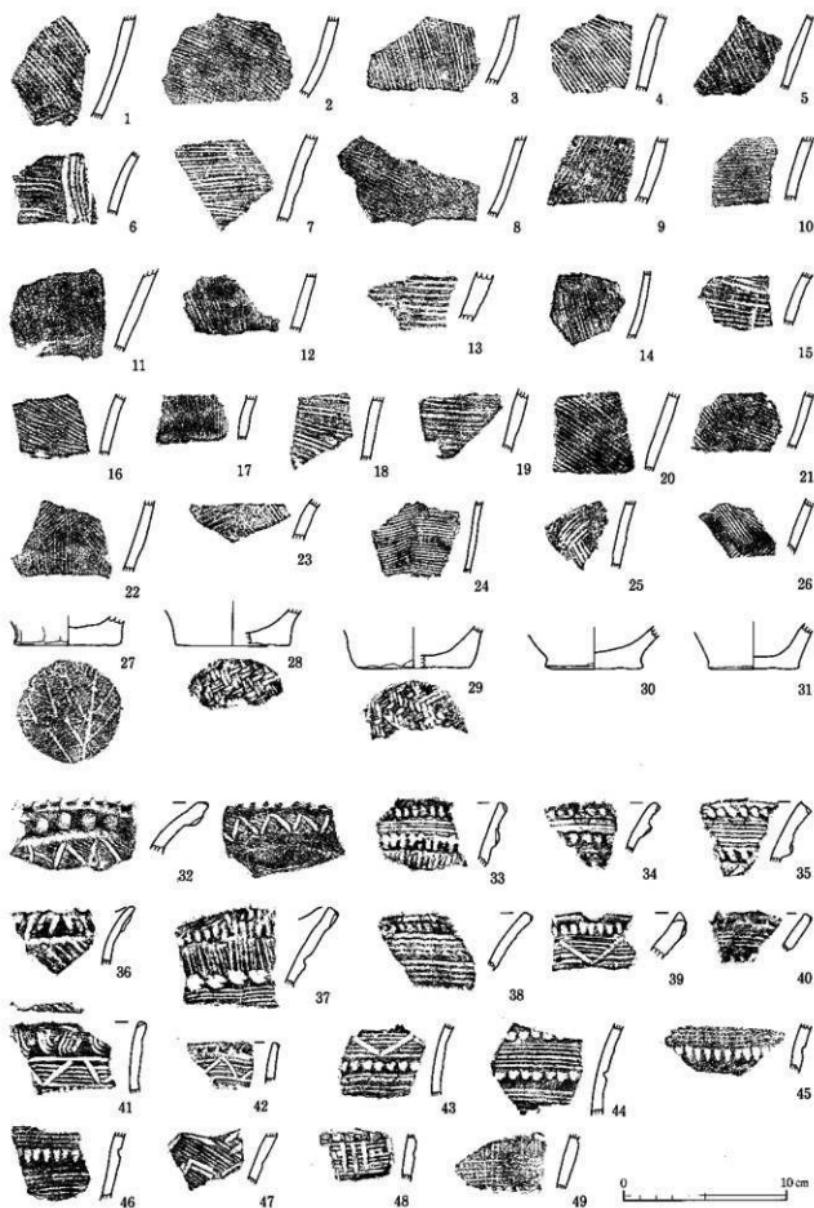
挿図14 BE35P4・BE35P7及び周辺グリット出土土器その1



挿図15 BE35P4・BE35P7及び周辺グリット出土土器その2



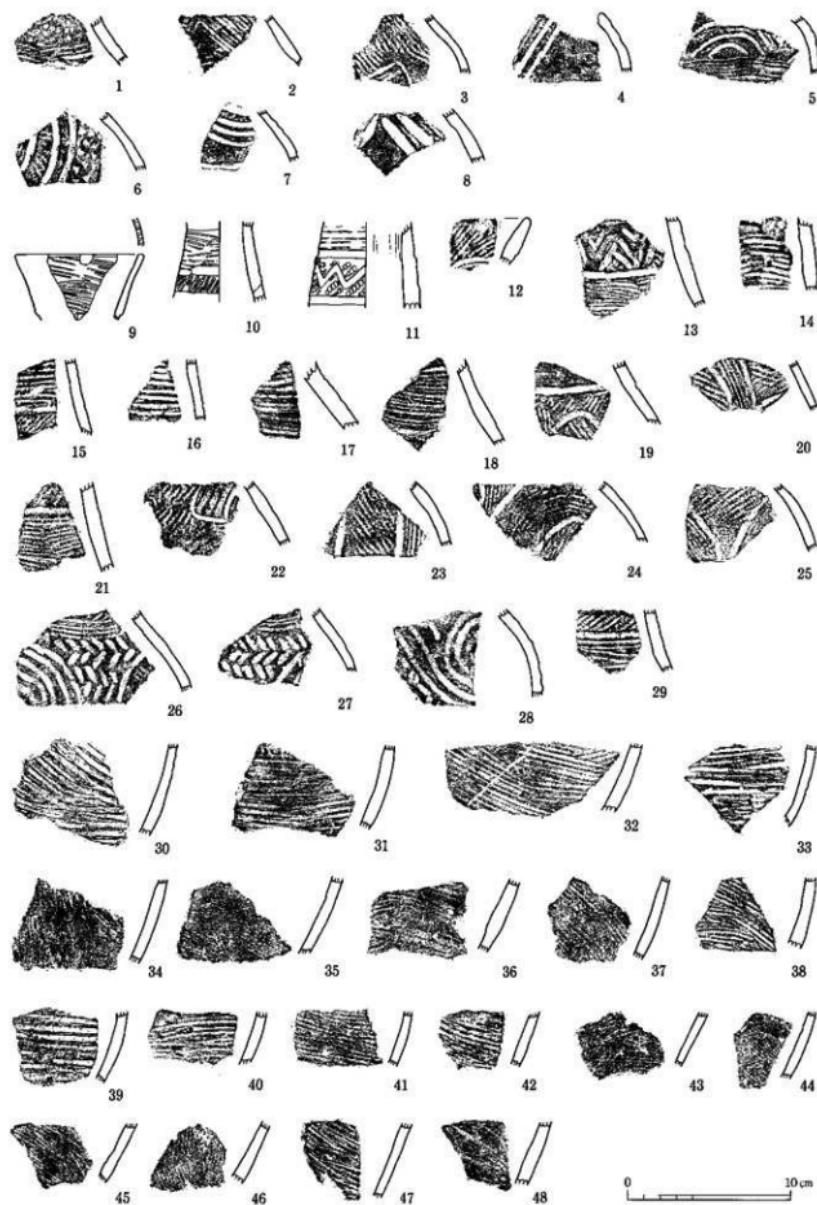
擲図16 BE 35 P 4・BE 35 P 7及び周辺グリット出土土器その3



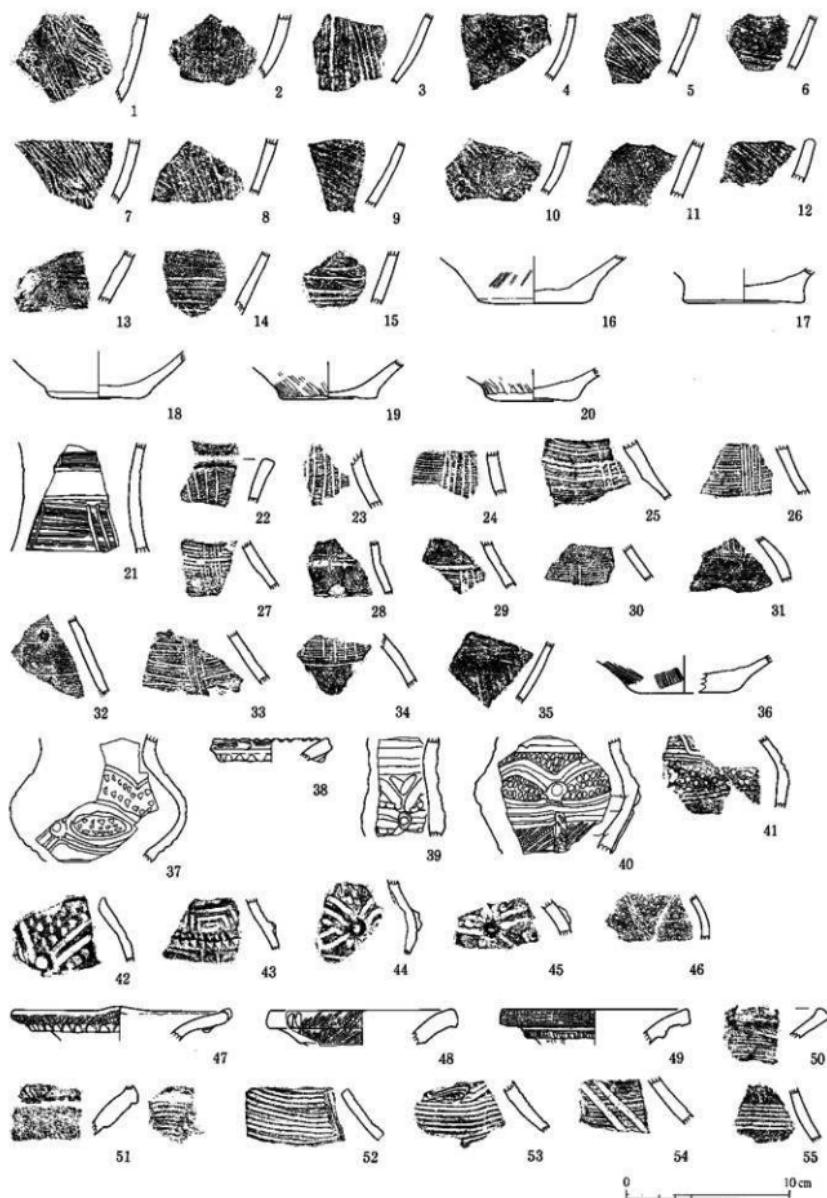
擲図17 BE35P4・BE35P7及び周辺グリット出土土器その4



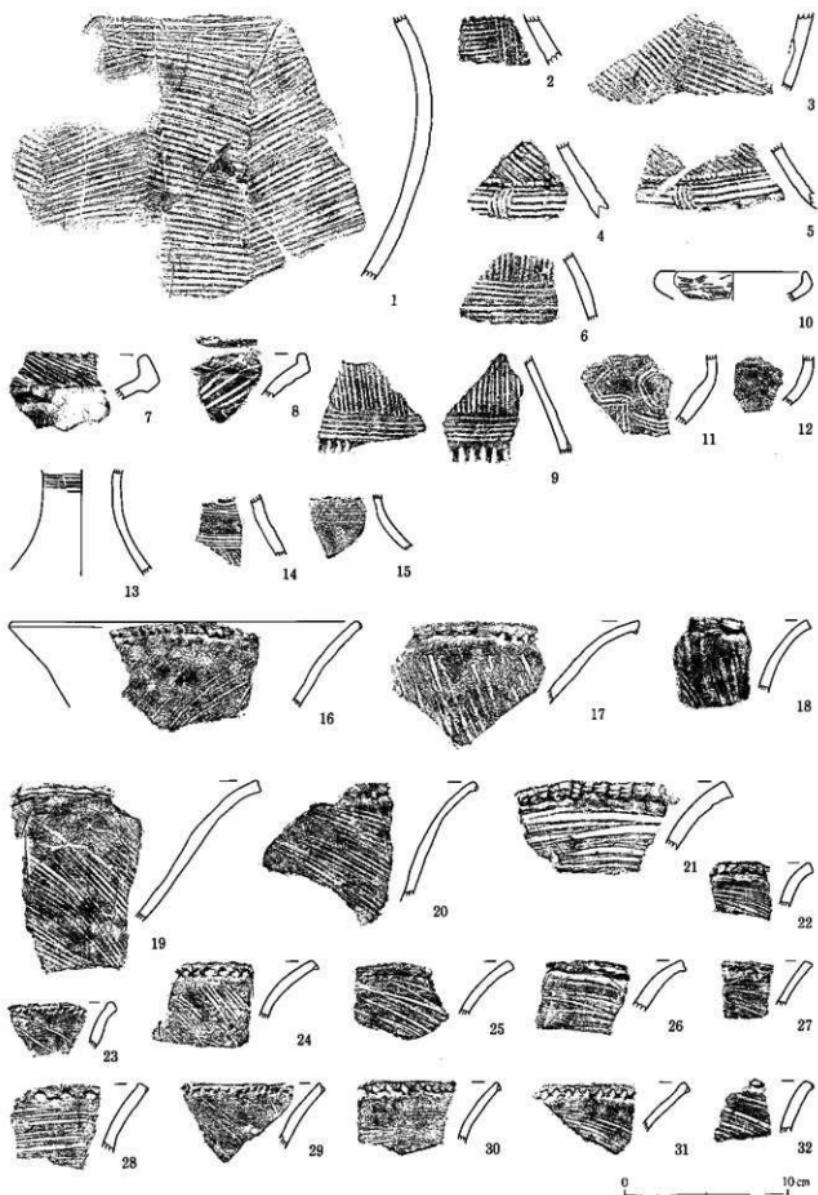
挿図18 BE35P4・BE35P7及び周辺グリット、SB09及び重複グリット出土土器



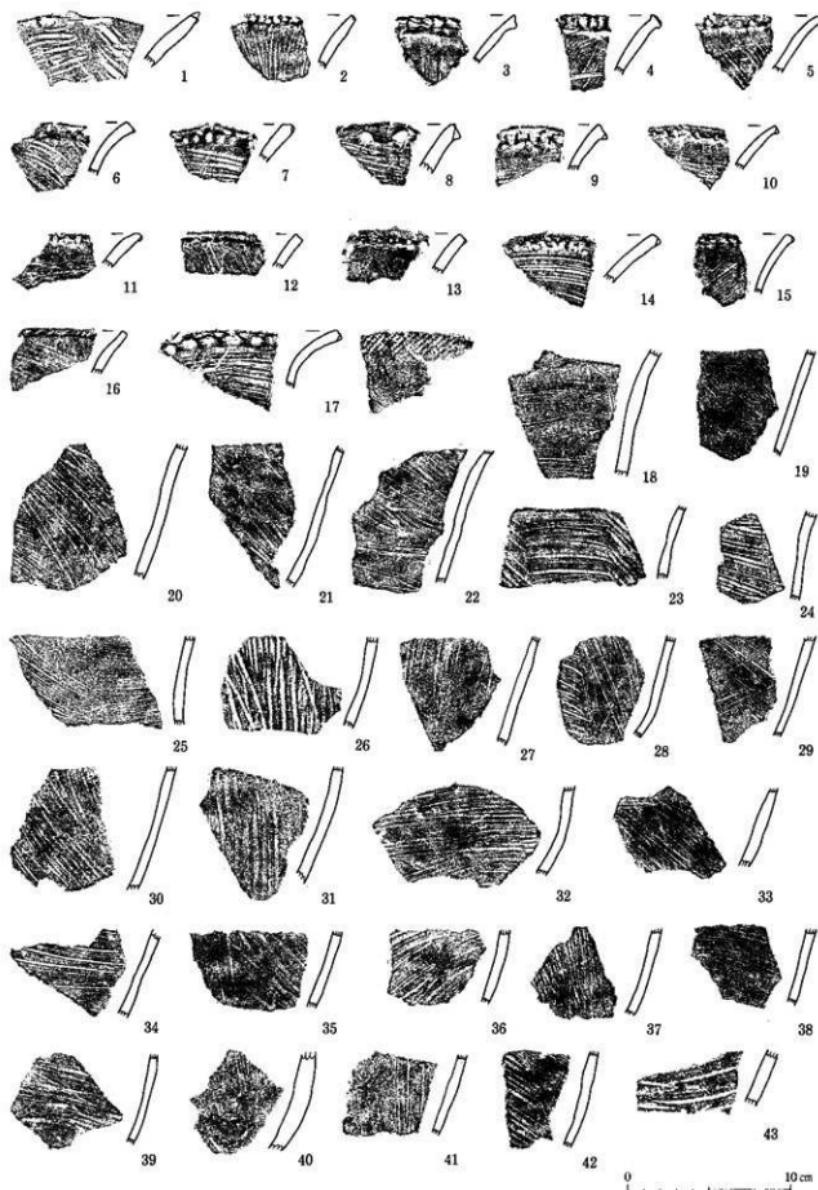
挿図19 SB09及び重複グリット出土土器その1



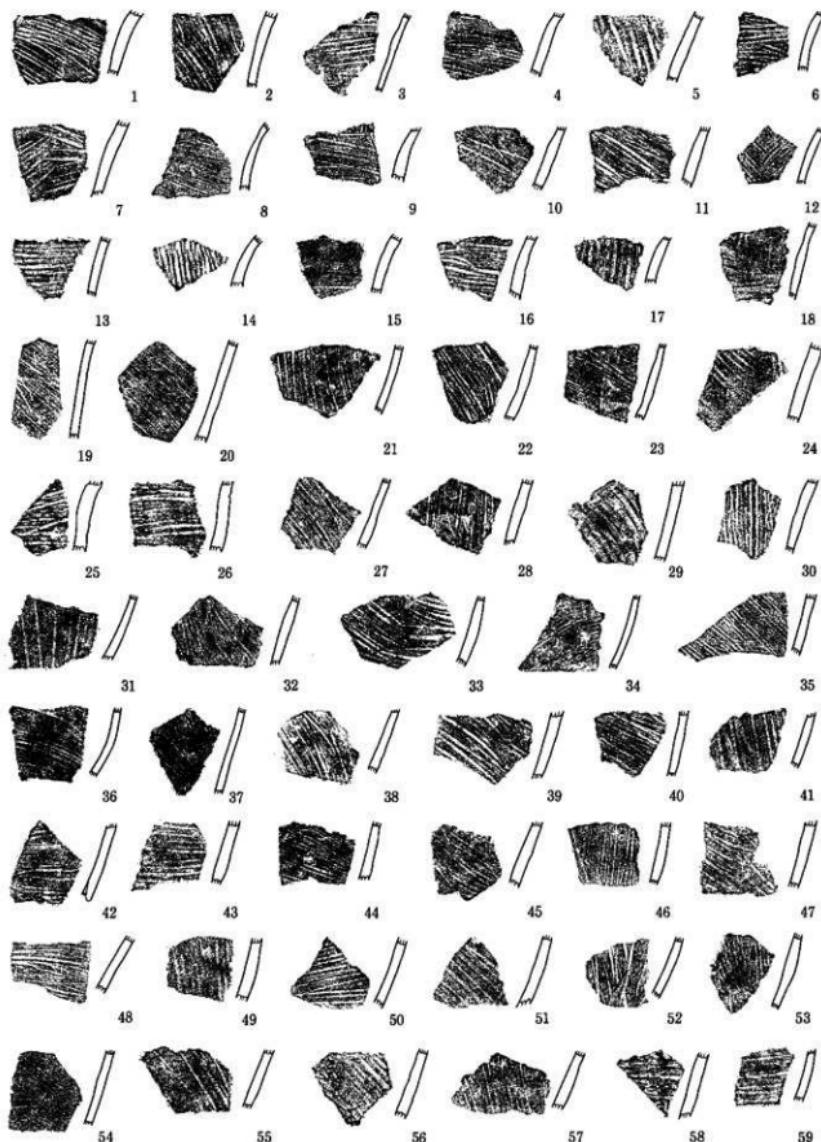
挿図20 SB09及び重複グリット出土土器その2



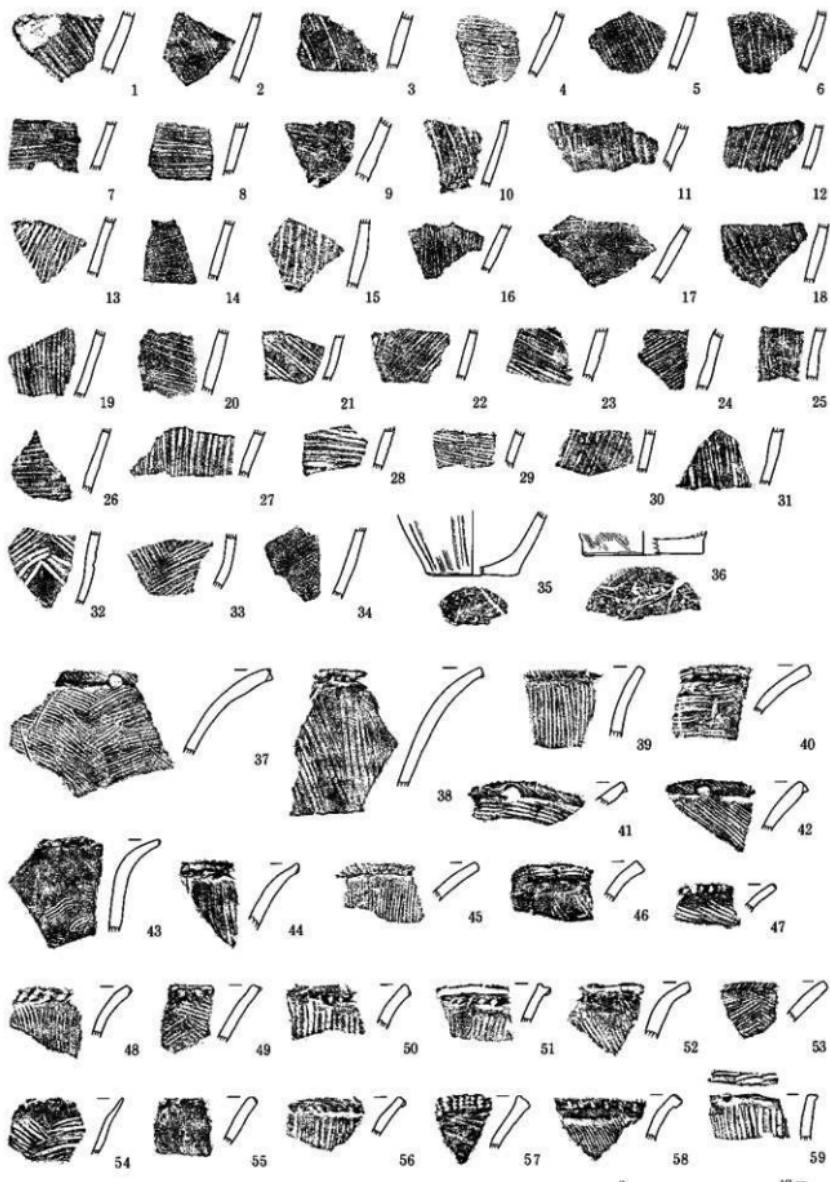
挿図21 SB09及び重複グリット出土土器その3



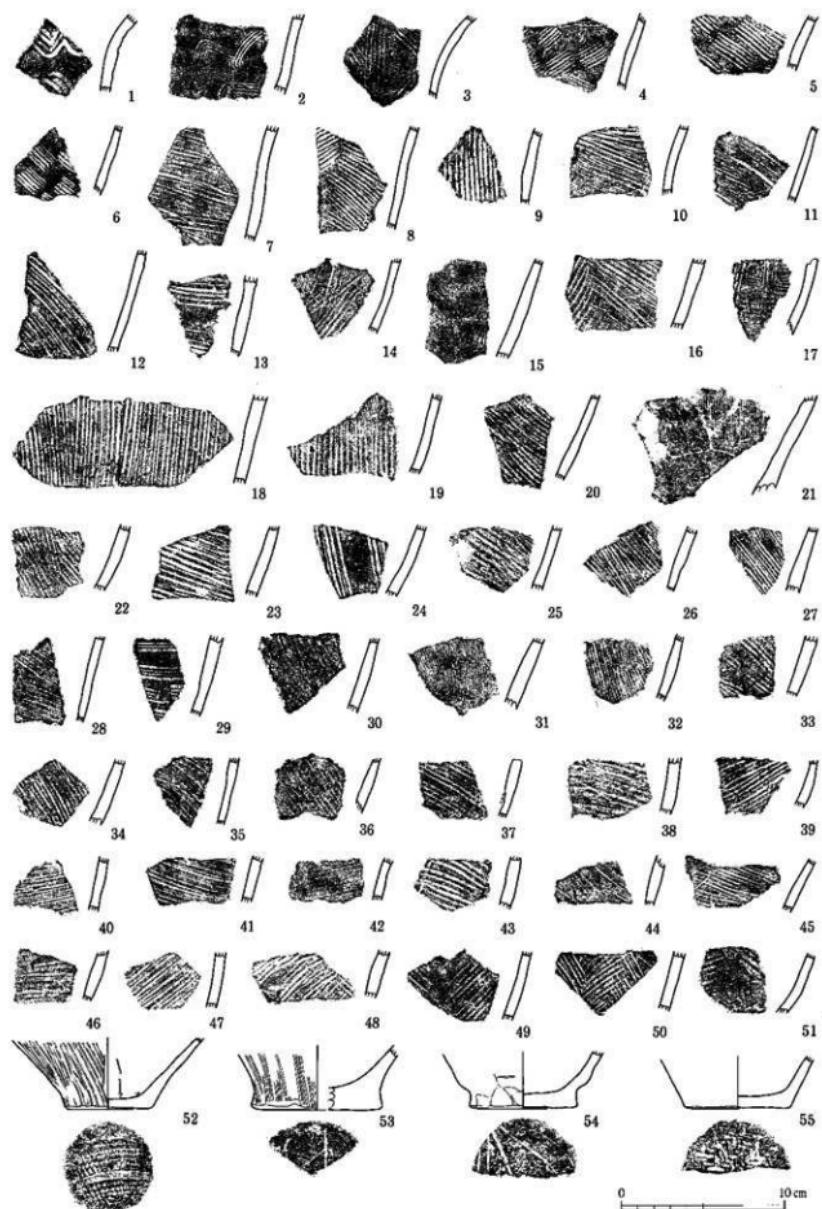
挿図22 SB09及び重複グリット出土土器その4



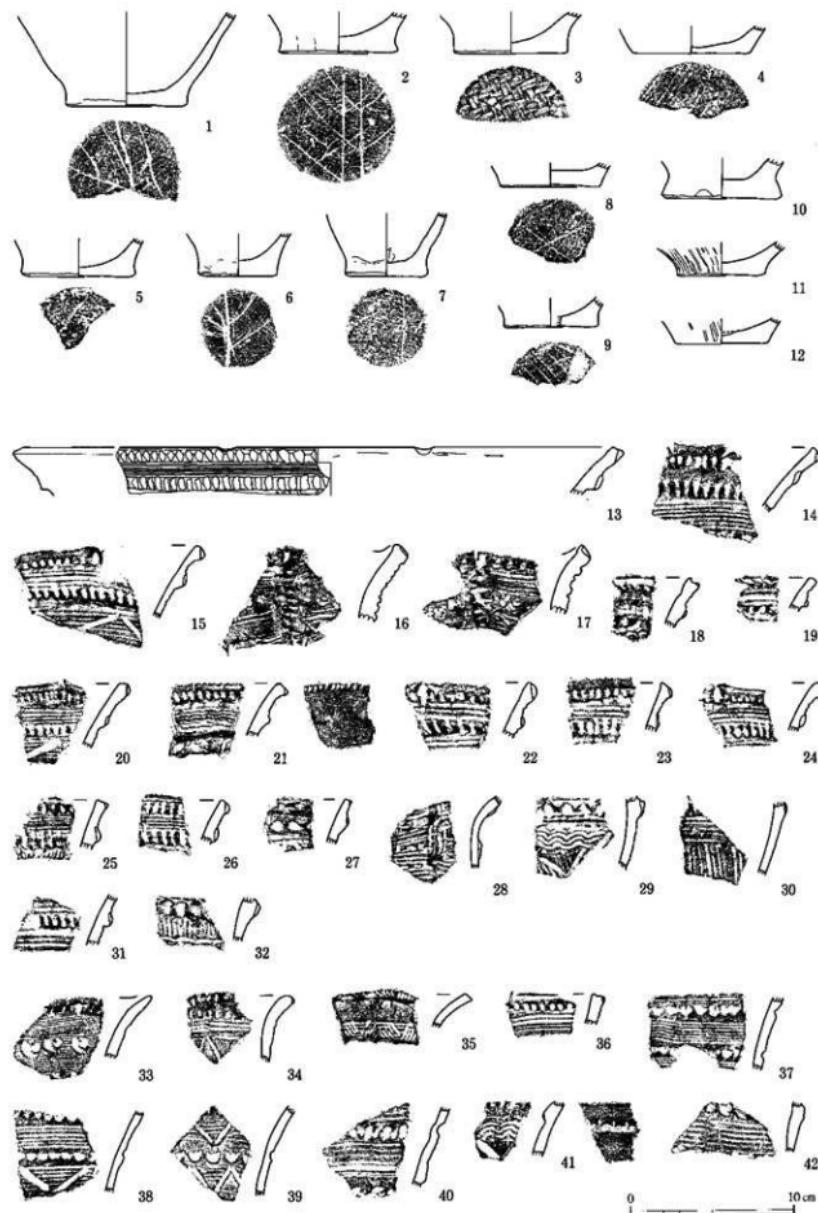
挿図23 SB09及び重複グリット出土土器その5



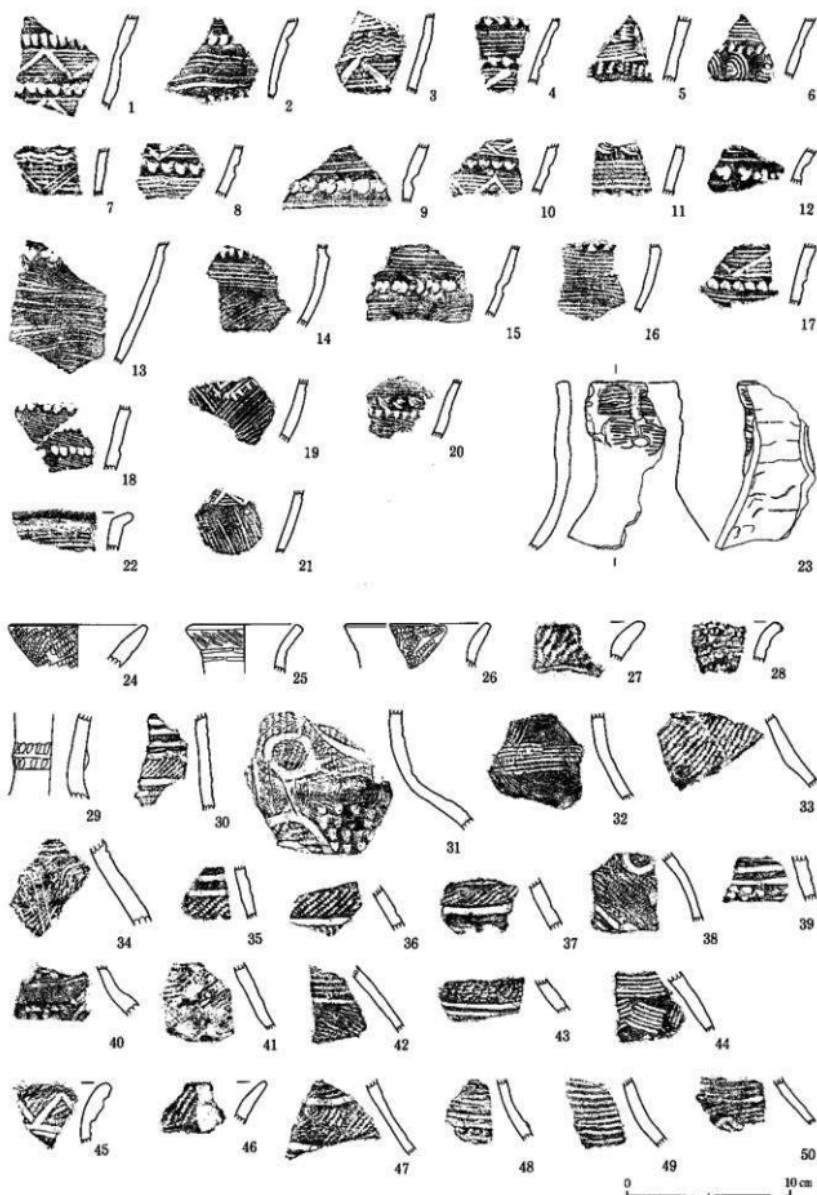
挿図24 SB09及び重複グリット出土土器その6



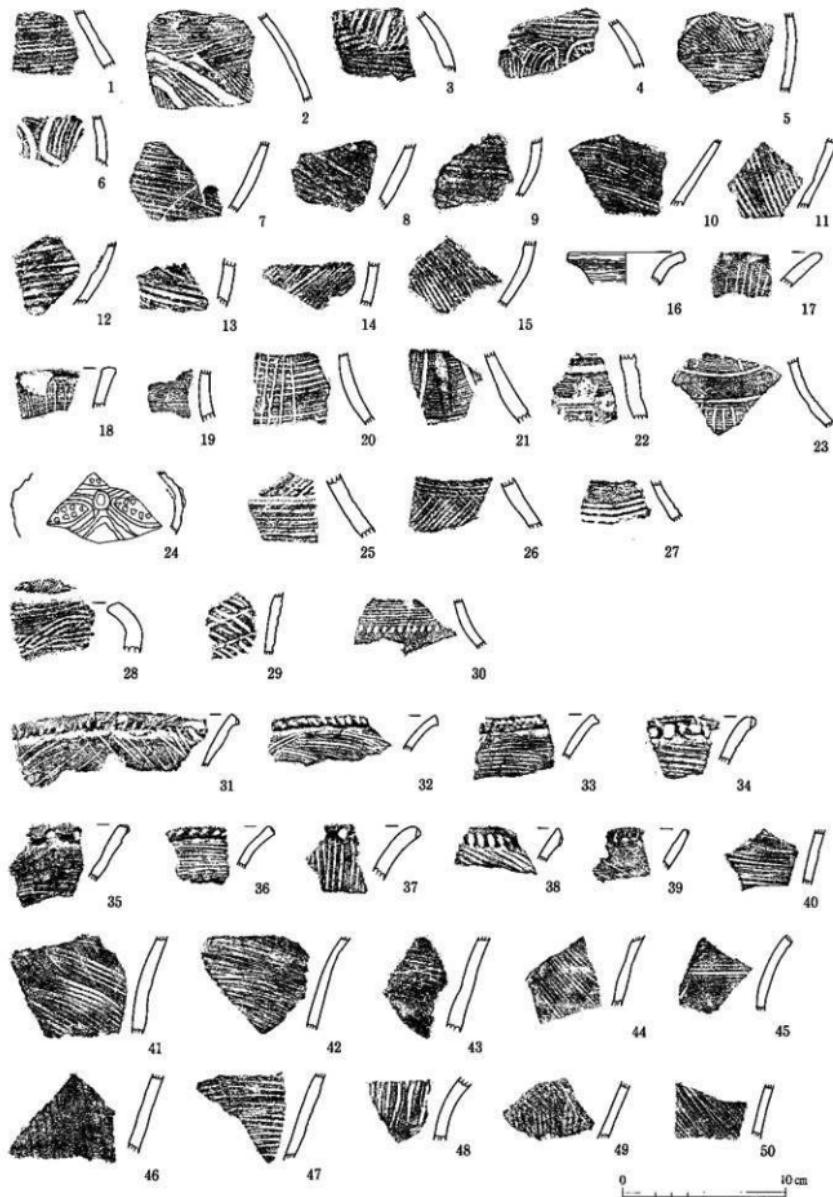
挿図25 SB09及び重複グリット出土土器その7



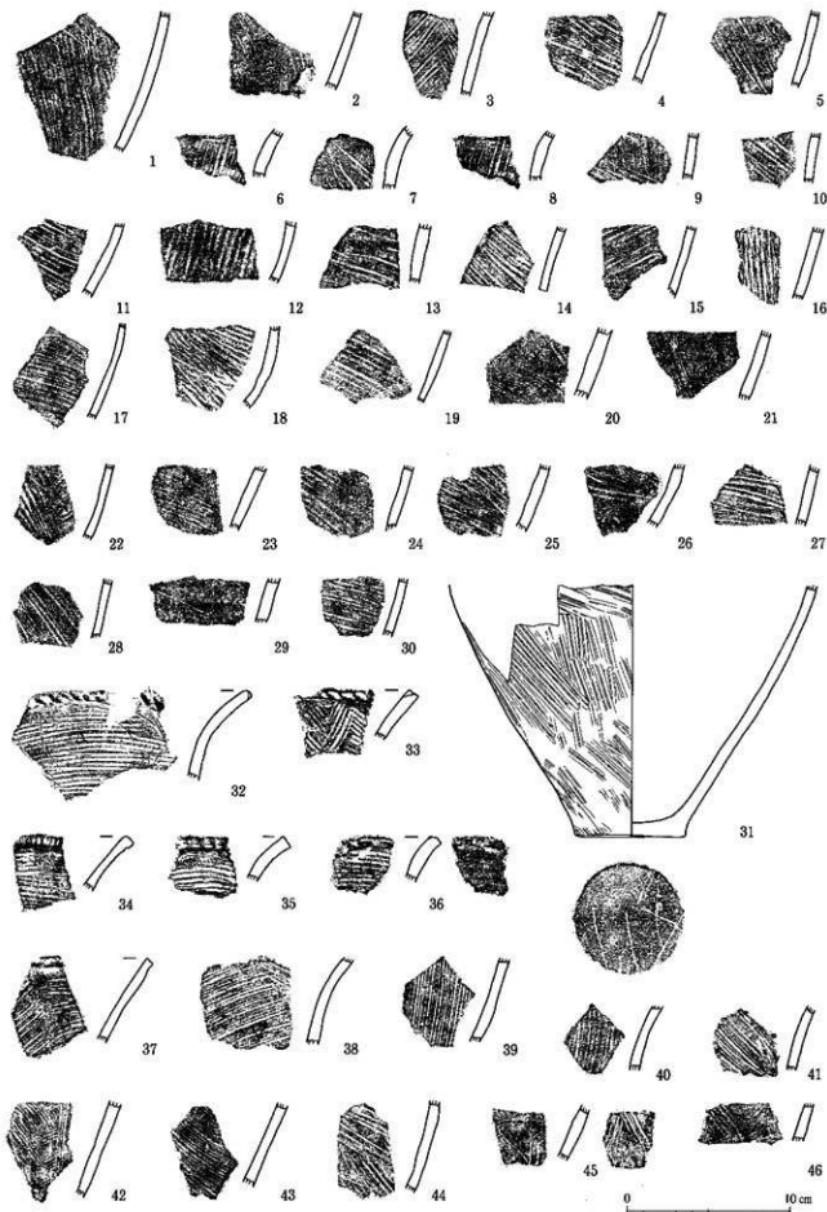
挿図26 SB09及び重複グリット出土土器その8



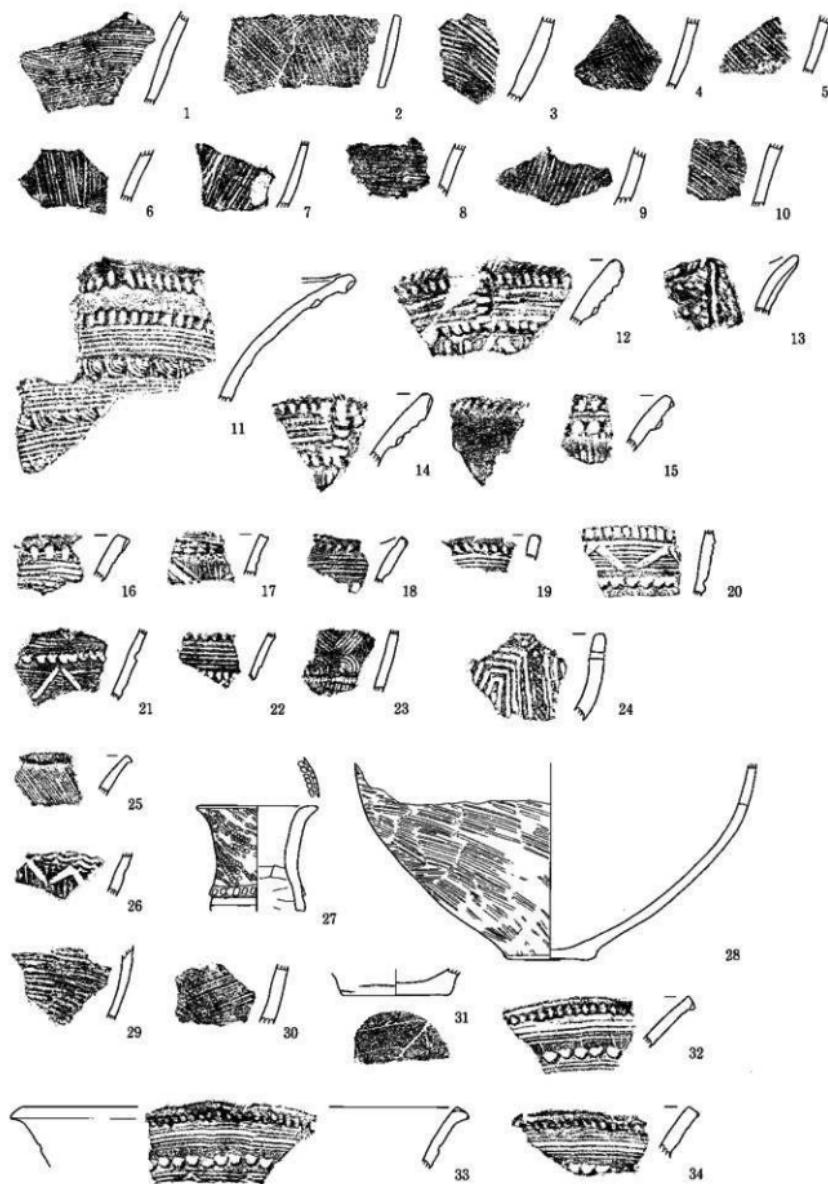
挿図27 SB09及び重複グリット、その他グリット等出土土器



挿図28 その他グリット出土土器その1



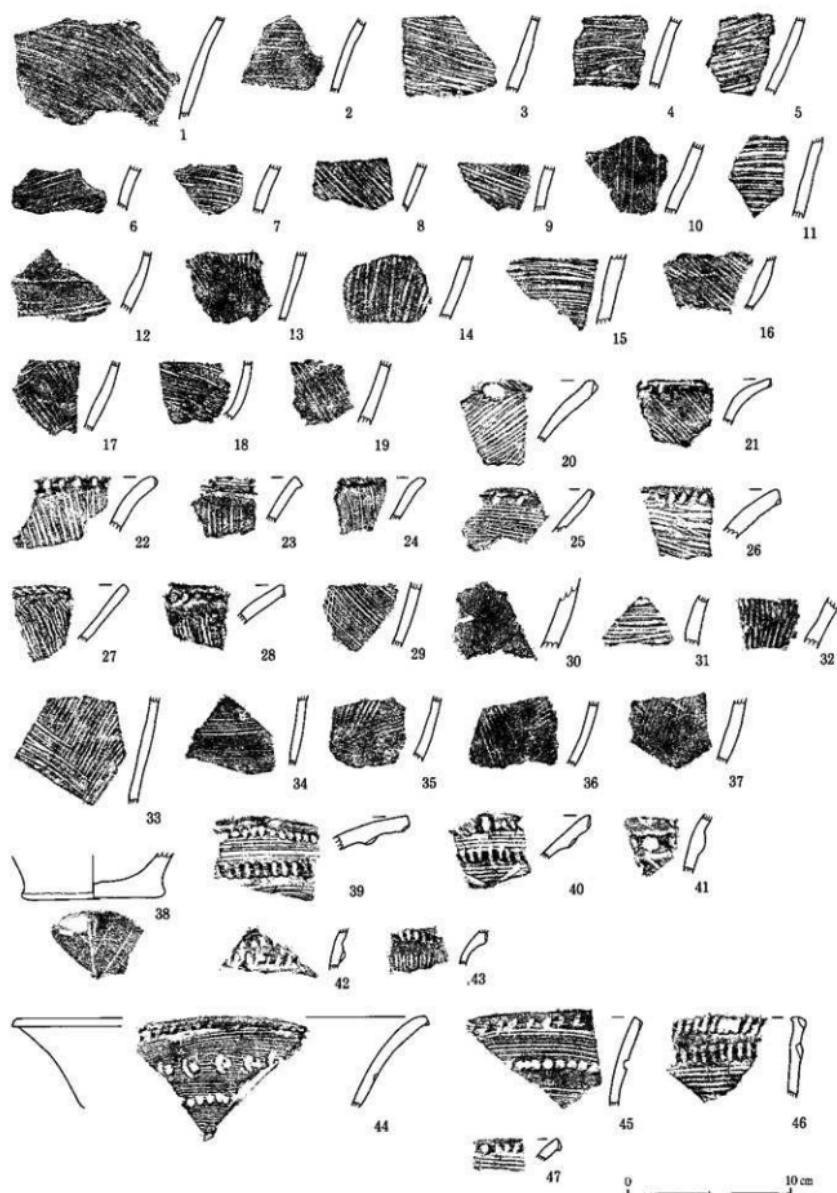
挿図29 その他グリット出土土器その2



挿図30 その他グリット、A・B・Cトレンチ出土土器



挿図31 C トレンチ、包含層出土土器



挿図32 包含層出土土器

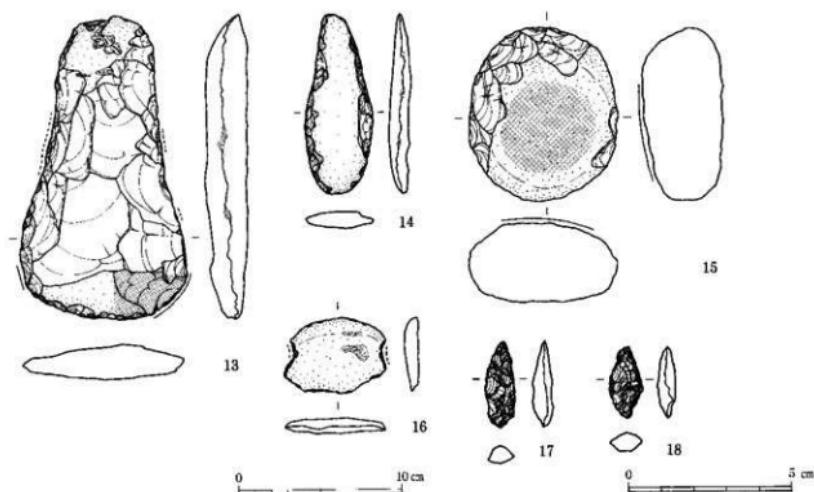
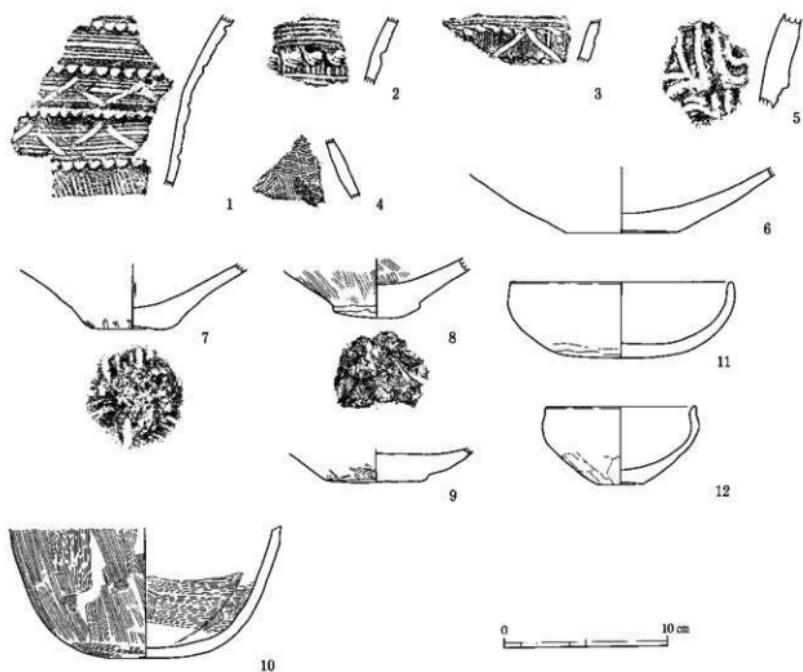
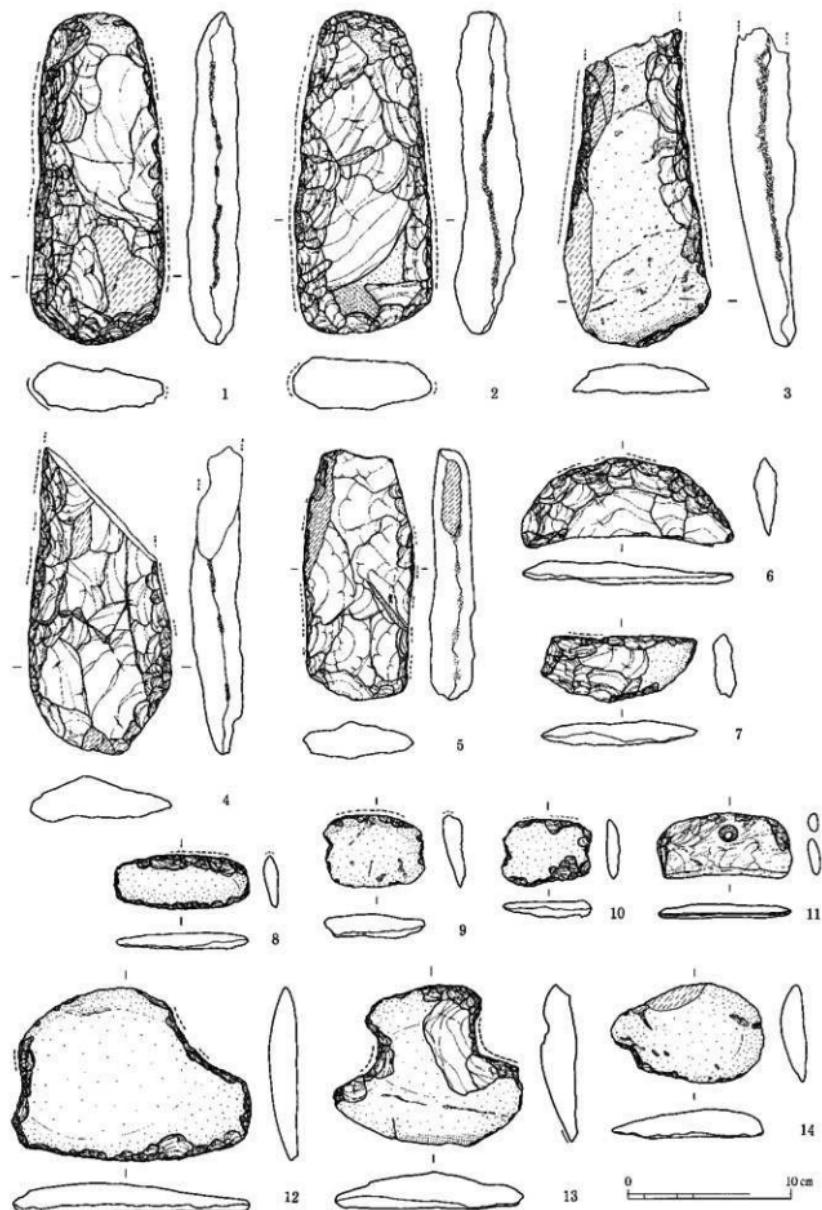
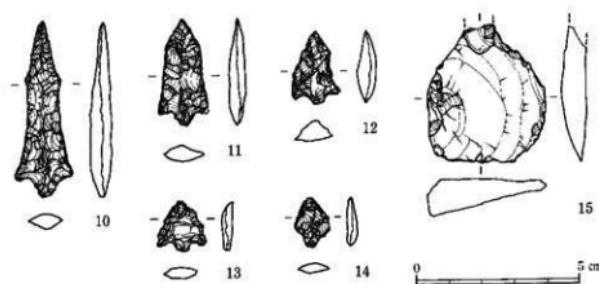
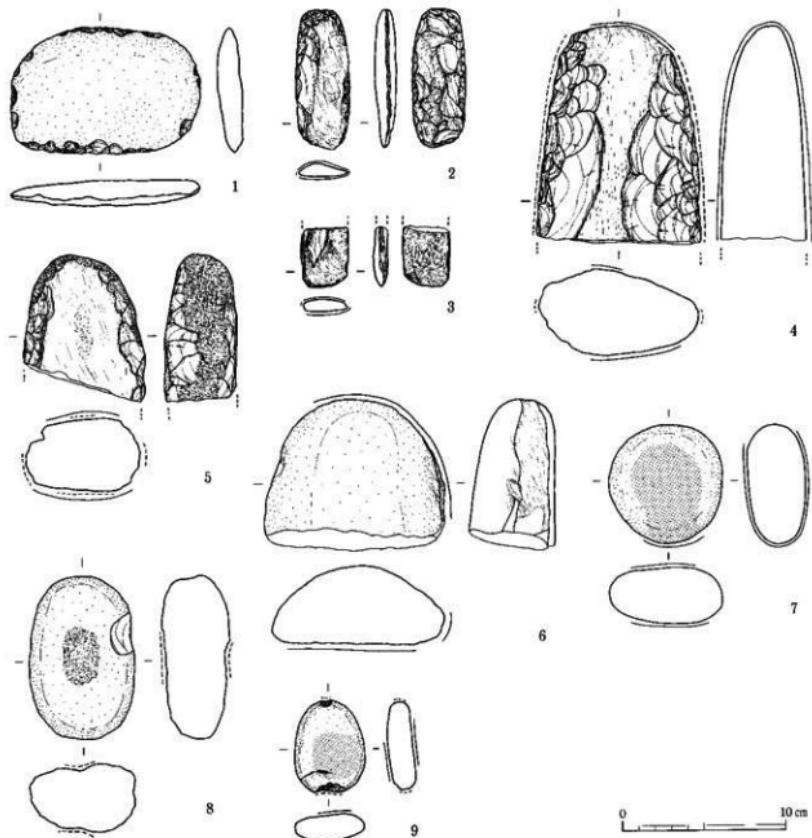


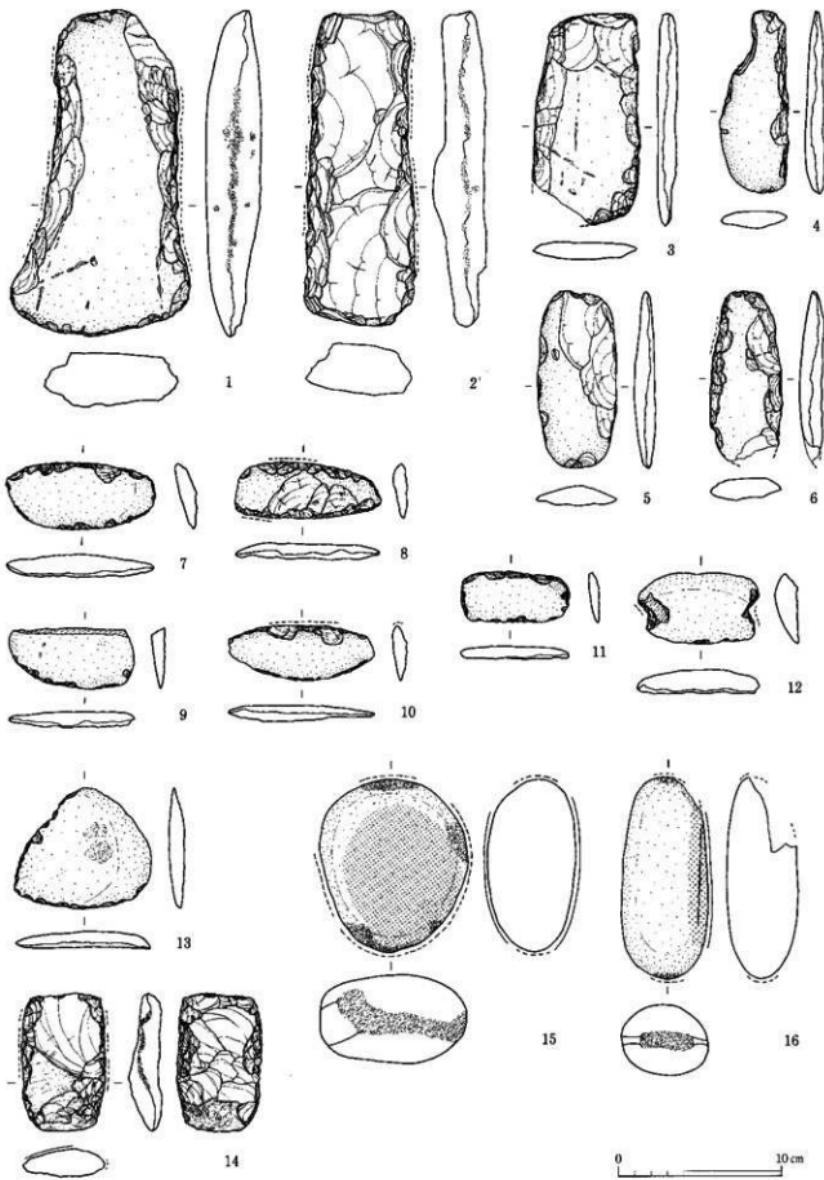
插图33 包含层出土土器、小柱穴等出土石器



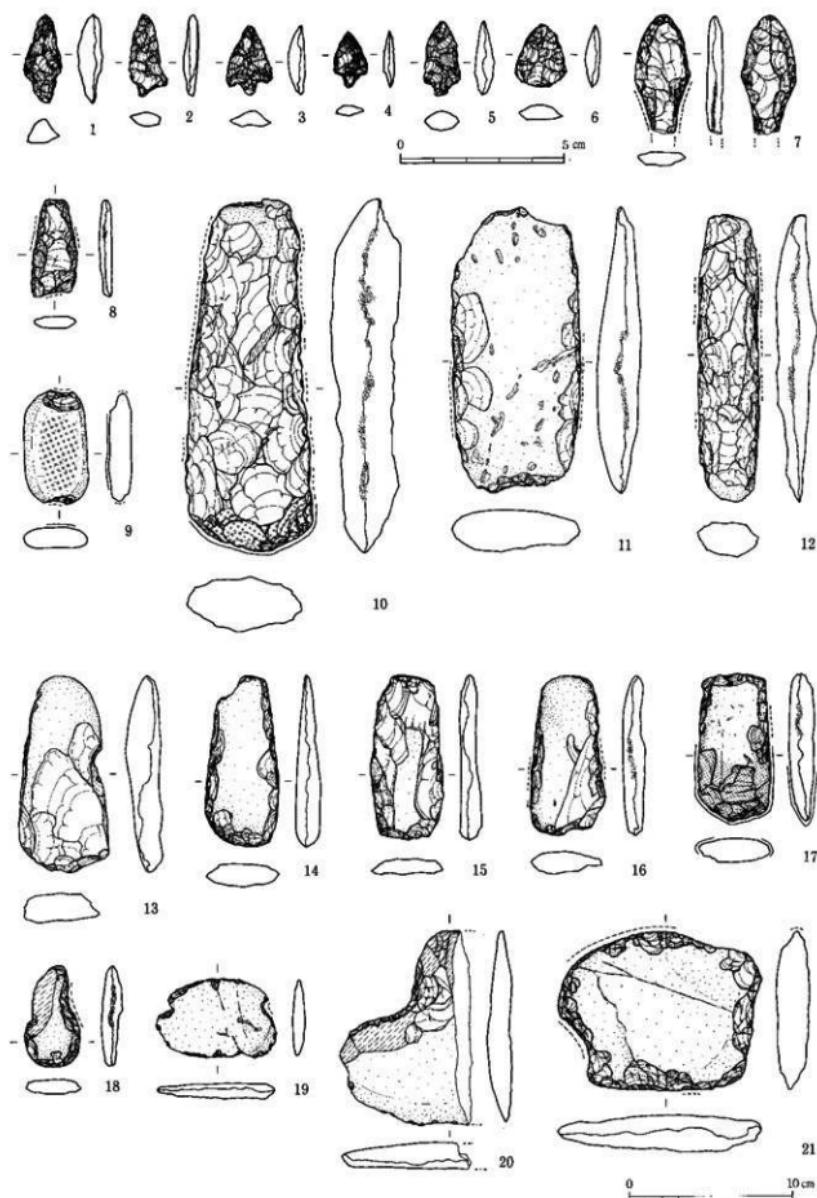
挿図34 SB09及び重複グリット出土石器その1



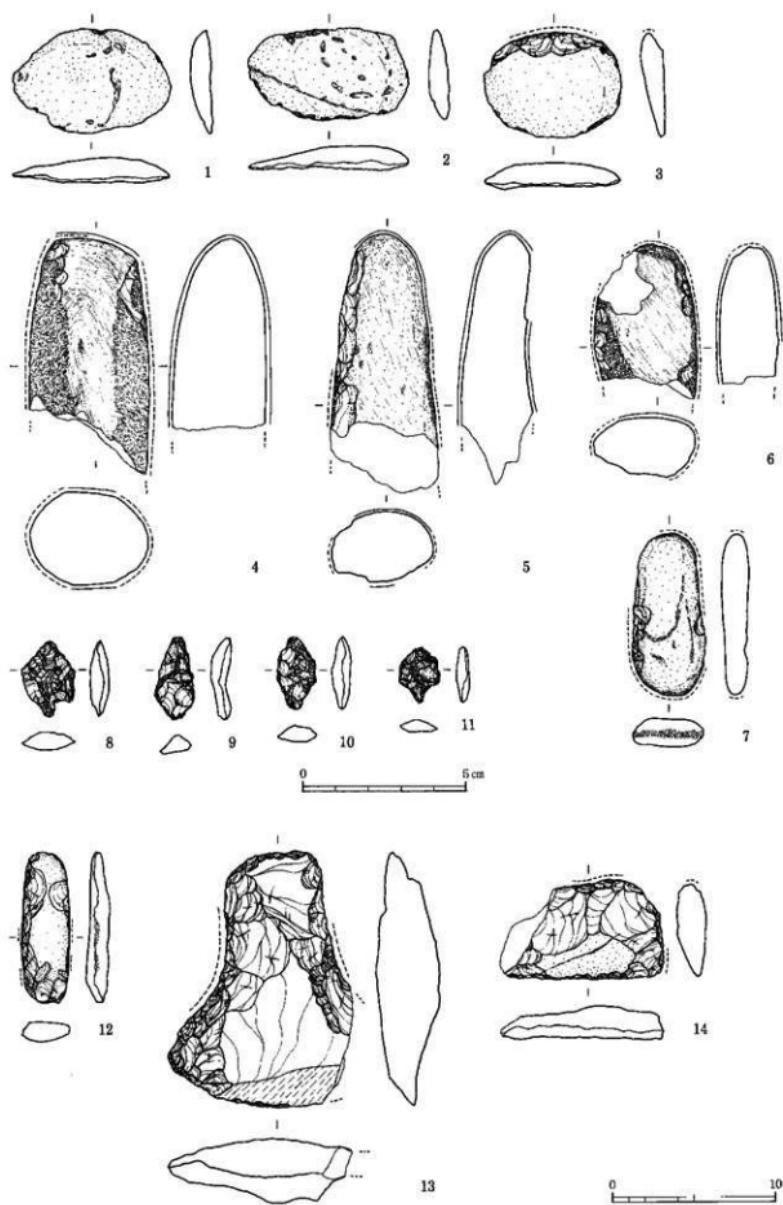
挿図35 SB09及び重複グリット出土石器その2



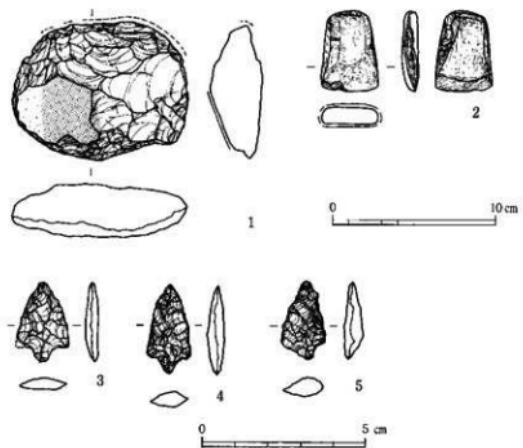
挿図36 BE35P4・BE35P7及び周辺グリット出土石器



挿図37 BE35P4・BE35P7及び周辺グリット、その他グリット出土石器



挿図38 その他グリット、包含層出土石器



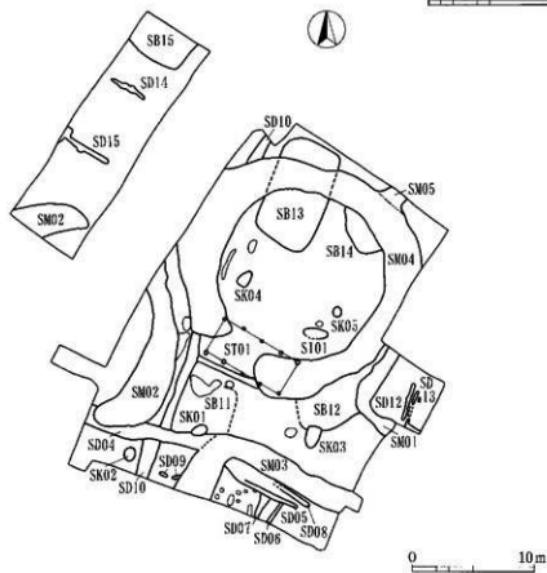
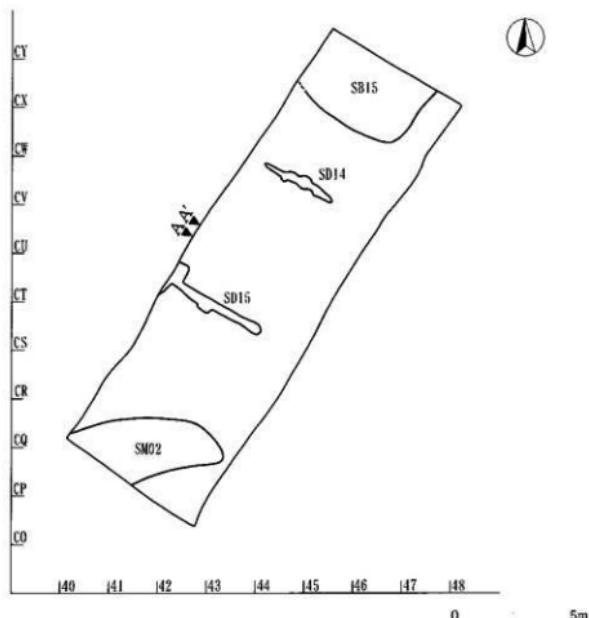
挿図39 包含層出土石器

図版番号	器種	遺構	出土位置	法面	石質	残存	備考	
33-13	打製石斧A	小柱穴等	BD35_P1	18.5 10.2 2.8	530 530 530	砂岩 砂岩 砂岩	完形	
33-14	打製石斧B	小柱穴等	BD35_P1	11.9 4.1 1.2	59 59 59	砂岩 砂岩 砂岩	完形	
33-15	磨石	小柱穴等	BD35_P1	10.6 9.0 4.8	745 745 745	?	完形	
33-16	块入打製石斧C	小柱穴等	BE36_P2	4.6 6.2 0.8	28 28 28	砂岩 砂岩 砂岩	完形	
33-17	打製石斧	小柱穴等	BD36_P1	2.6 0.9 0.5	1.2 1.2 1.2	黑曜石 黑曜石 黑曜石	完形	
33-18	打製石斧	小柱穴等	BG39_P2	2.1 1.0 0.5	0.9 0.9 0.9	黑曜石 黑曜石 黑曜石	完形	
-	打製石斧A	小柱穴等	BE36_P5	(10.2) (6.3)	2.4 (160)	砂岩 砂岩	基部残 刃部欠	
-	打製石斧A	小柱穴等	BG39_P7	(9.9) (6.6)	4.5 (500)	砂岩 砂岩	刃部欠	
-	打製石斧A	小柱穴等	BF39_P6	(13.9) (6.6)	3.3 (338)	砂岩 砂岩	刃部欠	
-	打製石斧A	小柱穴等	BD35_P1	18.5 10.2 2.8	530 530 530	砂岩 砂岩 砂岩	完形	
-	打製石斧A	小柱穴等	BE38_P2	2.6 (7.6)	3.9 (610)	砂岩 砂岩	刃部欠	
-	打製石斧B	小柱穴等	BC37_P1	(8.6) (5.7)	(2.5) (174)	砂岩 砂岩	上半部残 刃部欠	
-	打製石斧B	小柱穴等	BF38_P2	(10.3) (4.6)	1.8 (104)	砂岩 砂岩	刃部欠	
-	打製石斧	小柱穴等	BF38_P8	(2.3) (1.4)	0.6 (15)	黑曜石 黑曜石	完形	
36-1	打製石斧A	SB35_P4-BE35P7	BD35_P1	20.0 10.9 3.4	785 785 785	砂岩 砂岩 砂岩	完形	
36-2	打製石斧A	SB35P4-BE35P7	BD35_N3	12.2 6.1 3.1	508 508 508	砂岩 砂岩 砂岩	完形	
36-3	打製石斧A	SB35P4-BE35P7	BD35_N9	12.9 6.5 1.1	631 631 631	砂岩 砂岩 砂岩	左側面半部欠	
36-4	打製石斧B	SB35P4-BE35P7	BE35	11.7 4.1 1.1	66 66 66	綠色岩 綠色岩 綠色岩	完形	
36-5	打製石斧B	SB35P4-BE35P7	BE35	10.8 4.8 1.3	78 78 78	?	完形	
36-6	打製石斧B	SB35P4-BE35P7	BE34	(10.4) 4.4 1.2	(72) 42 42	砂岩 砂岩 砂岩	刃部欠	
36-7	模刃型石矛丁	SB35P4-BE35P7	BD36	4.2 9.1 0.9	42 42 42	砂岩 砂岩 砂岩	完形	
36-8	模刃型石矛丙	SB35P4-BE35P7	BE34	3.4 8.8 0.8	35 35 35	砂岩 砂岩 砂岩	完形	
36-9	模刃型石矛丙	SB35P4-BE35P7	BE34	3.7 7.7 0.8	28 28 28	砂岩 砂岩 砂岩	完形	
36-10	模刃型石矛丙	SB35P4-BE35P7	BE35	3.3 8.9 1.0	30 30 30	砂岩 砂岩 砂岩	完形	
36-11	模刃型石矛丙	SB35P4-BE35P7	BE35	3.1 6.6 0.6	18 18 18	綠色岩 綠色岩 綠色岩	完形	
36-12	块入打製石斧C	SB35P4-BE35P7	BE34	4.3 7.3 1.4	42 42 42	刮削器? 割?	完形	
36-13	模刃型石器	SB35P4-BE35P7	BE36	7.3 8.5 1.0	70 70 70	砂岩 砂岩 砂岩	火を受ける。友樹町も刃部 直平面刀、部分廢棄	
36-14	磨製石斧B	SB35P4-BE35P7	BF36	8.4 5.1 1.9	106 106 106	?	完形	
36-15	磨石	SB35P4-BE35P7	BE35	10.4 8.9 5.7	775 775 775	安山岩?	完形	
36-16	敲打器	SB35P4-BE35P7	BE34	12.2 5.3 4.4	388 388 388	砂岩 砂岩 砂岩	完形	
37-1	打製石劍	SB35P4-BE35P7	BD36	2.6 1.1 0.7	0.7 0.7 0.7	黑曜石 黑曜石 黑曜石	完形	
37-2	打製石劍	SB35P4-BE35P7	BD35	2.4 1.1 0.4	1.0 1.0 1.0	黑曜石 黑曜石 黑曜石	完形	
37-3	打製石劍	SB35P4-BE35P7	BE36	2.1 1.4 0.5	1.0 1.0 1.0	黑曜石 黑曜石 黑曜石	完形	
37-4	打製石劍	SB35P4-BE35P7	BD35	1.7 1.0 0.2	0.4 0.4 0.4	黑曜石 黑曜石 黑曜石	完形	
37-5	打製石劍	SB35P4-BE35P7	BE34	2.2 1.0 0.6	1.1 1.1 1.1	黑曜石 黑曜石 黑曜石	完形	
37-6	打製石劍	SB35P4-BE35P7	SB35_P4	1.5 0.8 0.4	1.2 1.2 1.2	黑曜石 黑曜石 黑曜石	完形	
37-7	打製石劍	SB35P4-BE35P7	BD36	(7.2) 3.3 1.0	28 28 28	砂岩 砂岩 砂岩	基部欠	
37-8	磨製石斧未完成品	SB35P4-BE35P7	BE34	6.0 2.6 0.6	16 16 16	砂岩 砂岩 砂岩	完形	
37-9	打製石劍	SB35P4-BE35P7	BE36	7.0 3.8 1.4	66 66 66	砂岩 砂岩 砂岩	完形	
-	打製石斧A	SB35P4-BE35P7	BE35	(14.4) (7.2) (2.9)	(198) (75) (575)	砂岩 砂岩 砂岩	基部残	
-	打製石斧A	SB35P4-BE35P7	BE35	(7.9) 8.4 4.1	(575)	砂岩 砂岩 砂岩	刃部欠	
-	打製石斧A	SB35P4-BE35P7	BE35	(15.1) (8.6) (2.3)	(230)	砂岩 砂岩 砂岩	基部残	
-	打製石斧A	SB35P4-BE35P7	BE35	(9.2) 6.4 (2.0)	(146)	砂岩 砂岩 砂岩	体部残	
-	打製石斧A	SB35P4-BE35P7	BE35	(10.7) 6.7 (3.0)	(274)	砂岩 砂岩 砂岩	刃部欠	
-	打製石斧A	SB35P4-BE35P7	BD35	(9.4) (6.5) (2.5)	(258)	砂岩 砂岩 砂岩	上半部残	
-	打製石斧B	SB35P4-BE35P7	BE35	(9.2) (5.3) (3.0)	(170)	砂岩 砂岩 砂岩	刃部欠	
-	打製石斧B	SB35P4-BE35P7	BD36	(9.4) 4.6 (2.2)	(114)	綠色岩 砂岩 砂岩	刃部欠	
-	模刃型石器	SB35P4-BE35P7	BE35	(3.7) 10.3 1.5	(120)	砂岩 砂岩 砂岩	刃部欠	
-	模刃型石器	SB35P4-BE35P7	BE35	(7.1) (6.0) 1.1	(37)	砂岩 砂岩 砂岩	左半部残	
-	模刃型石器	SB35P4-BE35P7	BF35	(3.5) (8.8) 0.9	40	綠色岩 綠色岩 砂岩	刃部欠	
-	打製石劍	SB35P4-BE35P7	BD34	(2.4) 1.3 0.5	(14)	黑曜石 黑曜石 先端部欠	完形	
-	打製石劍	SB35P4-BE35P7	BE35	(2.2) 1.3 0.4	(17)	黑曜石 黑曜石 先端部欠	完形	
-	打製石劍	SB35P4-BE35P7	BE35	(2.3) 1.5 0.5	(17)	黑曜石 黑曜石 先端部欠	完形	
-	打製石劍	SB35P4-BE35P7	BE36	(2.1) 0.9 0.6	(11)	黑曜石 黑曜石 先端部欠	上半部残	
-	打製石劍	SB35P4-BE35P7	BE34	1.1 0.5 0.5	(11)	黑曜石 黑曜石 先端部欠	完形	
-	打製石劍	SB35P4-BE35P7	BF35	(2.3) 1.5 0.6	(14)	黑曜石 黑曜石 先端部欠	完形	
34-1	打製石斧A	SB09	No.4	20.2 8.3 3.3	715 715 715	砂岩 砂岩 砂岩	完形	
34-2	打製石斧A	SB09	No.1	19.7 8.3 3.6	785 785 785	砂岩 砂岩 砂岩	刃部表面わずかに使用痕	
34-3	打製石斧A	SB09	No.6	(19.1) 8.4 4.1	(705)	砂岩 砂岩 砂岩	刃部表面使用痕	
34-4	打製石斧A	SB09	No.15	8.7 2.9 (444)	444	砂岩 砂岩 砂岩	基部欠	
34-5	打製石斧A	SB09	BD41	15.3 6.7 2.8	346	砂岩 砂岩 砂岩	完形	
34-6	模刃型石矛丁	SB09	BD42	4.7 12.9 1.3	79 79 79	砂岩 砂岩 砂岩	完形	
34-7	模刃型石矛丙	SB09	BD41	4.0 9.4 1.2	54	砂岩 砂岩 砂岩	完形	
34-8	模刃型石矛丙	SB09	BE41	3.8 8.1 0.9	31	砂岩 砂岩 砂岩	完形	
34-9	块入打製石斧C	SB09	BD40	4.5 6.1 1.2	36	砂岩 砂岩 砂岩	完形	
34-10	块入打製石斧C	SB09	BD41	4.0 5.4 1.0	26	砂岩 砂岩 砂岩	完形	
34-11	磨製石斧C	SB09	BD41	3.8 8.1 0.8	38	刮削片?	完形	
34-12	有肩屈状彎形石器	SB09	No.14	10.7 14.6 1.7	370	砂岩 砂岩 砂岩	刃部表面使用痕	
34-13	有肩屈状彎形石器	SB09	No.13	10.1 11.5 2.0	210	砂岩 砂岩 砂岩	刃部口状光沢	
34-14	模刃型石器	SB09	BF40	6.1 9.3 1.6	96	砂岩 砂岩 砂岩	完形	
34-15	模刃型石器	SB09	BE42	7.7 11.5 1.6	196	砂岩?	完形	
34-16	磨製石斧B	SB09	BE39	6.5 3.2 1.2	45	?	完形	
34-17	磨製石斧B	SB09	BD41	(3.6) 2.8 0.7	(14)?	?	基部欠	
35-1	磨製石斧未完成品	SB09	No.11	(13.2) (10.5) (5.7)	(515)	安山岩?	上半部残	
35-2	磨製石斧未完成品	SB09	No.11	(9.4) (7.5) (4.3)	(468)	綠色岩 綠色岩 砂岩	上半部残	
35-3	磨製石斧未完成品	SB09	P10	1.0 1.0 0.3	780	?	完形	
35-7	磨石	SB09	BD40	7.8 6.9 3.6	276	花崗岩 花崗岩 花崗岩	完形	
35-8	刮石	SB09	BD40	10.1 6.4 4.2	408	花崗岩 花崗岩 花崗岩	完形	
35-9	打製石錐	SB09	BE42	5.6 4.3 1.6	59	砂岩 砂岩 砂岩	完形	
35-10	打製石錐	SB09	BF41	5.4 1.7 0.7	38	ハマガニ安山岩 安山岩 安山岩	完形	
35-11	打製石錐	SB09	BE42	3.2 1.5 0.5	1.6	1.6 1.6 1.6	黒曜石 黒曜石 黒曜石	完形
35-12	打製石錐	SB09	BD40	2.2 1.5 0.6	1.3	黒曜石 黒曜石 黒曜石	完形	
35-13	打製石錐	SB09	BE40	1.5 1.5 0.3	0.7	黒曜石 黒曜石 黒曜石	完形	
35-14	打製石錐	SB09	BD40	1.5 1.0 0.3	0.4	黒曜石 黒曜石 黒曜石	完形	
35-15	石鉋?	SB09	BE42	4.3 3.6 1.1	15	チャート チャート 砂岩	完形	

第1表 第III次調査出土石器観察表その1

因版番号	器種	遺構	出土位置	出目	石質	残存	備考
-	打製石斧A	SB09	BD40	(8.6) (7.7)	3.7 (466)	砂妙岩	刃部欠
-	打製石斧A	SB09	BD42	(8.8)	8.5 (715)	砂妙岩	刃部欠
-	打製石斧A	SB09	BE41	(12.2)	8.1 (352)	砂妙岩	基部欠
-	打製石斧A	SB09	BE41	(12.9)	6.8 (178)	砂妙岩	基部残
-	打製石斧A	SB09	BE40	(10.8)	8.5 (494)	砂妙岩	下半部残
-	打製石斧A	SB09	BE40	(10.8)	7.1 (182)	砂妙岩	下半部残
-	打製石斧A	SB09	BE42	(8.0)	(2.8) (254)	砂妙岩	上半部残
-	打製石斧A	SB09	BF41	(10.4)	(9.2) (424)	砂妙岩	下半部残
-	打製石斧A	SB09	BC41	(13.5)	7.8 (312)	砂妙岩	刃部欠
-	打製石斧B	SB09	BD42	(9.3)	(5.5) (2.4)	砂妙岩	上半部残
-	打製石斧B	SB09	BD42	(8.9)	5.6 (20)	砂妙岩	刃部欠
-	打製石斧B	SB09	BF41	(10.0)	(5.5) (2.7)	砂妙岩	上半部残
-	打製石斧B	SB09	BF41	(8.3)	(6.0) (1.8)	砂妙岩	上半部残
-	打製石斧B	SB09	BF41	(7.8)	(6.2) (2.1)	砂妙岩	上半部残
-	打製石鐵	SB09	BD41	(2.5)	1.7 (4.2)	黒曜石	茎部欠
-	打製石鐵	SB09	BD41	(3.1)	(2.2) (0.7)	黒曜石	上半部残
-	打製石鐵	SB09	BD40	(1.4)	(1.5) (0.7)	黒曜石	先端部-茎先端部欠
-	打製石鐵	SB09	BD42	(2.1)	1.1 (0.4)	黒曜石	茎部欠
-	打製石鐵	SB09	BD42	(2.0)	0.9 (0.4)	黒曜石	先端部-茎先端部欠
-	打製石鐵	SB09	BE42	(2.2)	1.3 (0.5)	黒曜石	茎部欠
-	打製石鐵	SB09	BE41	(2.4)	1.5 (0.6)	黒曜石	茎部欠
-	打製石鐵	SB09	BE40	(2.1)	1.6 (0.4)	黒曜石	先端部-茎先端部欠
-	打製石鐵	SB09	BE39	(2.5)	1.2 (0.5)	黒曜石	茎部欠
-	打製石鐵	SB09	BC41	(1.8)	1.4 (0.5)	黒曜石	茎基部欠
-	打製石鐵	SB09	BD41	(2.0)	1.1 (0.5)	黒曜石	先端部欠
-	打製石鐵	SB09	Nd12	(12.4)	(7.8) (3.5)	砂妙岩	上半部残
-	打製石鐵	SB09	Nd8	(15.0)	(8.8) (3.6)	砂妙岩	上半部残
-	打製石鐵	SB09	BD41	(2.3)	1.8 (0.7)	黒曜石	上半部残
-	打製石鐵	SB09	床面	(2.1)	1.5 (0.3)	黒曜石	茎部欠
37-10	打製石斧A	その他のグリット	BE33	21.4	7.6 (4.3)	795砂妙岩	完形
37-11	打製石斧A	その他のグリット	BG39_№1	17.4	7.9 (2.6)	341砂妙岩	完形
37-12	打製石斧A	その他のグリット	BF37	17.4	3.7 (2.5)	198緑色岩	元形
37-13	打製石斧A	その他のグリット	BF39	12.0	5.4 (2.1)	162緑色岩	元形
37-14	打製石斧B	その他のグリット	BD39	10.4	4.4 (1.5)	166緑色岩	元形
37-15	打製石斧B	その他のグリット	BD40	10.0	4.3 (1.3)	137緑色岩	元形
37-16	打製石斧B	その他のグリット	BD39	9.3	4.5 (1.4)	84緑色岩	元形
37-17	打製石斧B	その他のグリット	BD39	9.0	4.5 (1.5)	90緑色岩	完形
37-18	打製石斧B	その他のグリット	BD31	6.3	3.3 (1.1)	221砂妙岩	完形
37-19	打製石斧B	その他のグリット	BD40	4.8	7.3 (0.9)	34砂妙岩	完形
37-20	有肩骨突彫石器	その他のグリット	BD33	11.9 (8.3)	1.6 (1.6)	130砂妙岩	左半部残
37-21	有柄石斧	その他のグリット	BD33	9.7	12.5 (2.2)	232砂妙岩	完形
38-1	横刃型石剣	その他のグリット	BD38	6.4	9.6 (1.3)	83砂妙岩	完形
38-2	横刃型石剣	その他のグリット	BE38	5.6	9.8 (1.3)	83砂妙岩	完形
38-3	横刃型石剣	その他のグリット	BG37	6.4	8.5 (1.2)	85砂妙岩	完形
38-4	磨製石斧未完成品	その他のグリット	BG36	(14.3)	(7.3) (5.8)	(910)緑色岩	上半部残
38-5	磨製石斧未完成品	その他のグリット	BD37	(15.8)	(6.6) (4.3)	(575)緑色岩	刃部側欠
38-6	磨製石斧未完成品	その他のグリット	BE37	(9.6)	(6.2) (3.6)	(336)緑色岩	上半部残
38-7	敲打斧	その他のグリット	BG37	9.9	4.5 (1.5)	114砂妙岩	完形
38-8	打製石鐵	その他のグリット	BE33	2.3	1.6 (0.5)	161黒曜石	完形
38-9	打製石鐵	その他のグリット	BF37	2.4	1.2 (0.4)	131黒曜石	完形
38-10	打製石鐵	その他のグリット	BC37	2.2	1.2 (0.5)	121黒曜石	完形
38-11	打製石鐵	その他のグリット	BE38	1.6	1.2 (0.4)	0.71黒曜石	完形
-	打製石斧A	その他のグリット	BB39	(8.1)	8.4 (3.5)	(336)砂妙岩	下半部残
-	打製石斧A	その他のグリット	BD37	(11.6)	7.0 (2.0)	145砂妙岩	刃部欠
-	打製石斧A	その他のグリット	BD39	(1.6)	7.3 (2.0)	(465)砂妙岩	左半部欠
-	打製石斧B	その他のグリット	BD40	(8.6)	(4.0) (1.3)	(411)砂妙岩	刃部欠
-	打製石斧B	その他のグリット	BD33	(11.0)	(4.3) (2.1)	(126)砂妙岩	左半部欠
-	横刃型石劍丁	その他のグリット	BD39	3.7	(3.9) (0.9)	(15)砂妙岩	左半部残
-	打製石鐵	その他のグリット	BD41	(3.0)	1.3 (0.9)	(2.5)黒曜石	先端部欠
-	打製石鐵	その他のグリット	BC36	(1.3)	(1.4) (0.5)	(0.8)黒曜石	上半部残
-	打製石斧A	その他のグリット	BD33	(1.0)	(4.3) (2.1)	(126)砂妙岩	左半部欠
-	打製石斧A	その他のグリット	BD39	(1.3)	(1.3) (0.5)	131黒曜石	完形
-	打製石斧A	トレンチ	Aトレンチ	(11.4)	(10.8) (2.9)	(408)砂妙岩	下半部残
-	打製石斧A	トレンチ	Aトレンチ	(11.8)	11.9 (2.6)	(408)砂妙岩	下半部残
-	打製石斧A	トレンチ	Cトレンチ	(14.2)	(7.3) (2.9)	(264)砂妙岩	刃部欠
-	打製石斧A	トレンチ	Cトレンチ	(10.1)	(10.1) (4.3)	(1090)砂妙岩	刃部欠
-	打製石鐵	トレンチ	Cトレンチ	(2.4)	1.5 (0.7)	(1.6)黒曜石	先端部欠
-	打製石鐵	トレンチ	Aトレンチ	(1.7)	1.1 (0.3)	(0.7)黒曜石	茎部欠
38-12	打製石斧B	包含層	9.2	2.9 (1.3)	521緑色岩	完形	
38-13	有肩骨突彫石器	包含層等	15.7	(11.4)	3.9 (0.6)	605砂妙岩	右刃部欠
38-14	横刃型石剣	包含層等	6.1	10.0 (2.1)	128砂妙岩	完形	
39-1	横刃型石剣	包含層等	9.5	10.6 (3.4)	346砂妙岩	完形	
39-2	磨製石斧B	包含層等	4.9	3.4 (0.9)	29? 細粒岩	扁平平刃	
39-3	打製石斧	包含層等	2.3	1.3 (0.5)	131黒曜石	完形	
39-4	打製石斧	包含層等	2.7	1.3 (0.5)	151黒曜石	完形	
39-5	打製石斧	包含層等	2.6	2.4 (0.9)	2.6 細粒岩	完形	
-	打製石斧A	包含層等	(6.8)	(8.4) (3.6)	(368)砂妙岩	左半部残	
-	打製石斧A	包含層等	(10.7)	(8.5) (3.4)	(348)砂妙岩	下半部残	
-	打製石斧A	包含層等	(11.8)	(8.9) (4.4)	(410)砂妙岩	下半部残	
-	打製石斧A	包含層等	(11.0)	(9.0) (1.6)	(248)砂妙岩	基部欠	
-	打製石斧A	包含層等	(12.2)	(6.2) (3.5)	(282)砂妙岩	刃部欠	
-	打製石斧B	包含層等	(11.2)	(4.6) (1.8)	(88)砂妙岩	基部欠	
-	打製石斧B	包含層等	(9.3)	(3.8) (1.5)	(65)緑色岩	基部欠	
-	横刃型石剣	包含層等	7.2	10.1 (1.1)	(104)緑色岩	左刃部欠	
-	打製石鐵	包含層等	(2.3)	1.3 (0.5)	(1.3)黒曜石	茎部欠	
-	打製石鐵	包含層等	(1.7)	1.4 (0.4)	0.81黒曜石	先端部欠	
-	打製石鐵	包含層等	(2.3)	0.9 (0.4)	(0.8)黒曜石	先端部欠	
-	打製石鐵	包含層等	(1.8)	(1.4) (0.4)	(1.1)黒曜石	先端部-茎先端部欠	

第2表 第III次調査出土石器観察表その2



挿図40 第V次調査造構全体図及び第IV次・第V次調査造構全体図 (1:200・1:400)

第IV章 第V次調査結果

第1節 調査区の設定

発掘調査位置は、平成16年度から飯田教育委員会が採用した世界測地系を用いた飯田市新埋蔵文化財基準メッシュ図による（飯田市教委2009）区画MC85-7-40に位置する。

新井地区防災貯水槽が設置される箇所は、寺所遺跡の北東端部で、第IV次調査箇所から6m北西側の隣接地となる。東側の第IV次調査区を挟んで30m程で天竜川氾濫原への段丘崖となり、その氾濫原に飯田松川の自然堤防が形成されており、そこが新井遺跡の範囲となる。新井地区防災貯水槽設置箇所全体を拡幅して調査区とした。

調査した遺構は竪穴建物1軒・墳丘墓1基・溝2条で、調査面積は総計で126m²となる。

第2節 基本層序

調査区の基本層序については、北西壁のA-A'で示した箇所を選定して挿図41で示した。調査前の当該地は新井地区コミュニティー消防センターの駐車場となっており、コンクリート舗装下の碎石が25cm程度入れられていた。地表面からの土層は以下による。

I層：5Y5/1 灰重埴土 水田耕土

A 401.00 A'

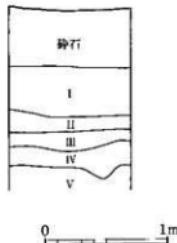
II層：10YR3/2 にぶい黄褐砂質壤土 旧水田耕土

III層：5YR3/4 晴赤褐砂質壤土 旧水田耕土床土

IV層：10YR3/1 黒褐砂質壤土

V層：2.5Y5/4 黄褐砂土 地山

遺構確認面はV層上面で、比較的容易に検出できた。なお、隣接地の第4次調査の土層と比較すると、I層=1層、II・III層=2層、IV層=3層、V層=4層となる。2層の水田耕土の下に黒褐色土があり、その下が地山で遺構確認面となり、基本的な土層の違いはない。



挿図41 基本層序 (1:40)

第3節 遺構と遺物

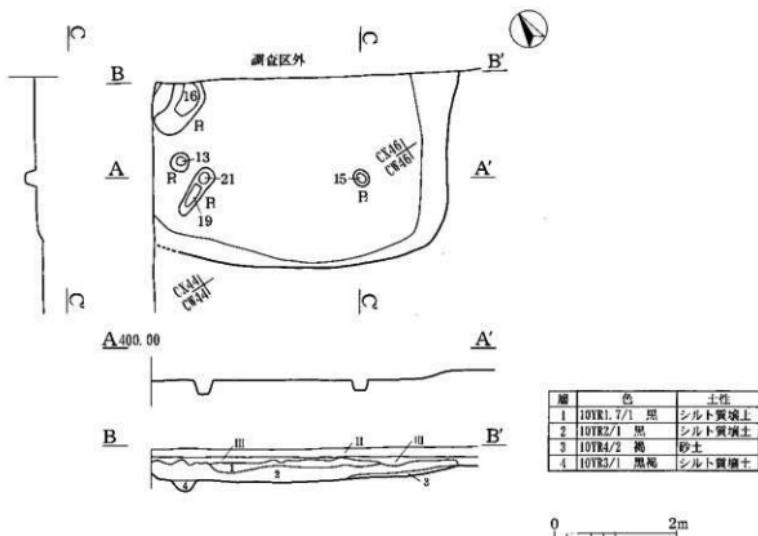
(1) 竪穴建物

① SB15（挿図42・45～48）

C X 46を中心にして検出し、北東・北西側が調査区外となり、北東・南西壁と床面の一部を調査した。北東・南西方向の長さが5.6mと推定される隅丸長方形の竪穴建物である。主軸方向は隣接地の調査からN35°Eと推定される。壁高は7～14cmを測り、きわめて緩やかな壁面をなす。床面はほぼ平坦で、全体が砂層であるために軟らかくきわめて不良である。主柱穴はP1・P2で、そのほかにP3・P4があるが、その役割は不明である。

出土遺物には弥生土器壺(45-1~32, 46-1~31)・甕(46-32~39, 47-1~33)・鉢(47-34), 石器(48-1~13)がある。

出土遺物から弥生時代中期後葉に位置づけられる。



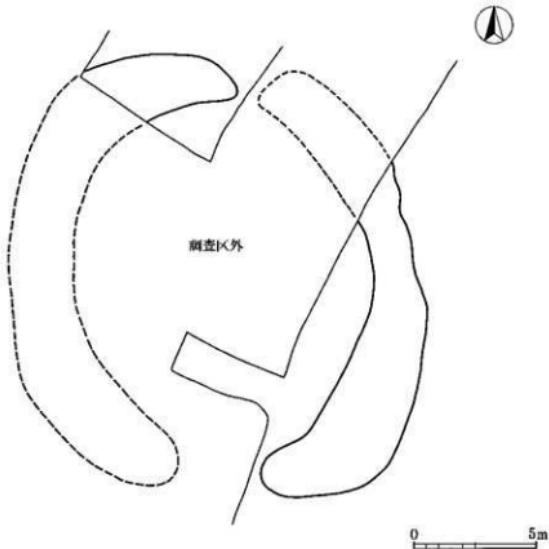
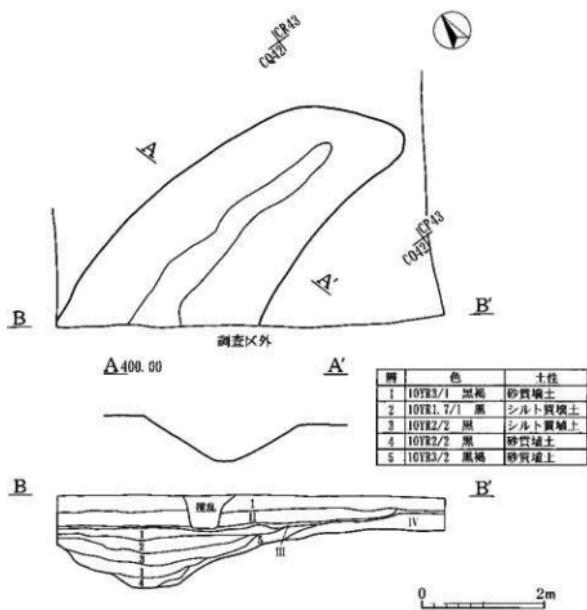
挿図42 S B 15 (1 : 80)

(2) 墳丘墓

① SM02 (挿図43・47・48)

C P 41付近で検出し、北東・南西側が調査区外となり、周溝の一部を調査した。周溝は幅2.8~1.9m・深さ50~76cmを測り、逆台形の断面形をなす。北東側で溝が途切れて陸橋部をなすが、その幅は東側用地外にかかるために不明である。土層は南西側用地外壁の全面を示した。周溝内はレンズ状の堆積をなし、自然に埋没したものと判断される。基本土層のIV層が周溝へ緩く落ち込んでおり、IV層上に墳丘の盛土があったと考えられる。

第IV次調査で検出した墳丘墓SM02の北側周溝の一部を調査したものである。いずれも周溝の一部の検出にとどまっており、大半が調査区外に存在する。しかし、2箇所の陸橋部が検出されており、全体形を推測することは可能で、挿図43によってそれを示した。北側と南側に陸橋部をもち、周溝の状況からみて南側の陸橋部は広く、北側の陸橋部は狭くなると推定される。第IV次調査の東側の周溝の状況により、西側の周溝を推定して南北方向にやや長い円形の墳丘墓を把握した。墳丘の内径は15.0×12.3m、周溝を含めた外径は17.5×17.0mを測り、主軸方向はN 6° Eを示す。なお、主体部は未調査箇所にあ



挿図43 SM02及び推定復元図 (1:80・1:200)

り、駐車場の工事状況からみて残っているものと考えられる。

出土遺物は縄文時代早期後葉の押型文土器の高山寺式土器片(47-35)、弥生時代中期後葉の壺(47-36・37)・甕(47-38~41)、石器(48-14~16)があり、いずれも先行する時期からの混入資料である。

第IV次調査の出土遺物から、古墳時代中期後葉に位置づけられる。

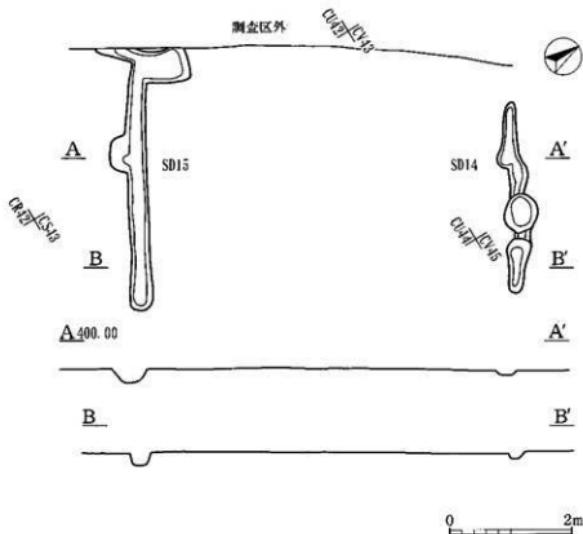
(3) 溝

① SD14 (挿図44)

CV44を中心にして検出し、調査延長は3.1mを測り、両側に延長しない。幅は24~54cm・深さ2~26cmを測り、長軸方向はN60°Wを示す。平面形は一定ではなく、途中で楕円形の土坑状に膨らむ箇所や底面の深さが異なって幅が広い箇所や南側にわずかに膨らむ箇所が認められた。断面形は逆台形をなす。

② SD15 (挿図44)

CS43付近で検出し、調査延長は4.3mを測る。幅30~58cm・深さ9~21cmを測り、長軸方向はN58°Wを示す。南東側の溝は途中でわずかに南西側に膨らみ、北西側がわずかに調査区外にかかる。その箇所で溝が両側に直角に曲がり、その両端が途切れる。この箇所は南東側に64cm、北東側に76cm延長する。



挿図44 SD14・SD15 (1: 80)

第IV次調査で匂溝址とした溝址（SD05・06・07・08・09・12・13）が調査されている。SD14・SD15はほぼ長軸方向が同一であり、遺構の状況も類似しており、同様に匂溝址である可能性が高い。

（4）遺物

土器・石器があり、大半が弥生時代中期後葉の竪穴建物SB15から出土した。土器は図化資料が少なくてほとんどが拓影資料で、全体の様相を示すものではない。

① 土器

47-36～41以外はすべてSB15から出土した土器で、一括性は高いと判断される。

壺は細い頸部に櫛描横線文とヘラ描波状文、胴上部に櫛描横線文・波状文とヘラ描横線文が施文される（45-1）。文様が施文されて拓影で示したほとんどの個体が胴上部の破片で、櫛描横線文に中を縦のヘラ描直線文で充填した連続山形文が組み合わされる。櫛描横線文の上下にヘラ描列点文が施文されるものも多い。底部は木葉痕が残るものがある（46-26～28）。

甕は口縁部が短く外反し、頸部が緩く屈曲する（46-32～35）。図化した個体の胴部は無文であるが、拓影で示した個体の大半は浅い櫛描条線文が単方向に施文される（47-1～23）。羽状の条線文（47-24・25・41）、縄文（47-26・27）、櫛描波状文（47-28・29・38）が施文されるものがある。底部には木葉痕が認められる（47-30～32）。

鉢（47-34）は体部がわずかに内湾して立ち上がり、外面にハケ調整と赤色塗彩の痕跡が残り、外面が赤色塗彩されたものと考えられる。

以上が今次調査で出土した土器の内容であるが、第IV次調査の出土土器と相違はなく同時期と判断される。櫛描文が文様の主体となり、弥生時代中期後葉の北原式土器の範疇に含まれ、その古い様相を示すといえる。

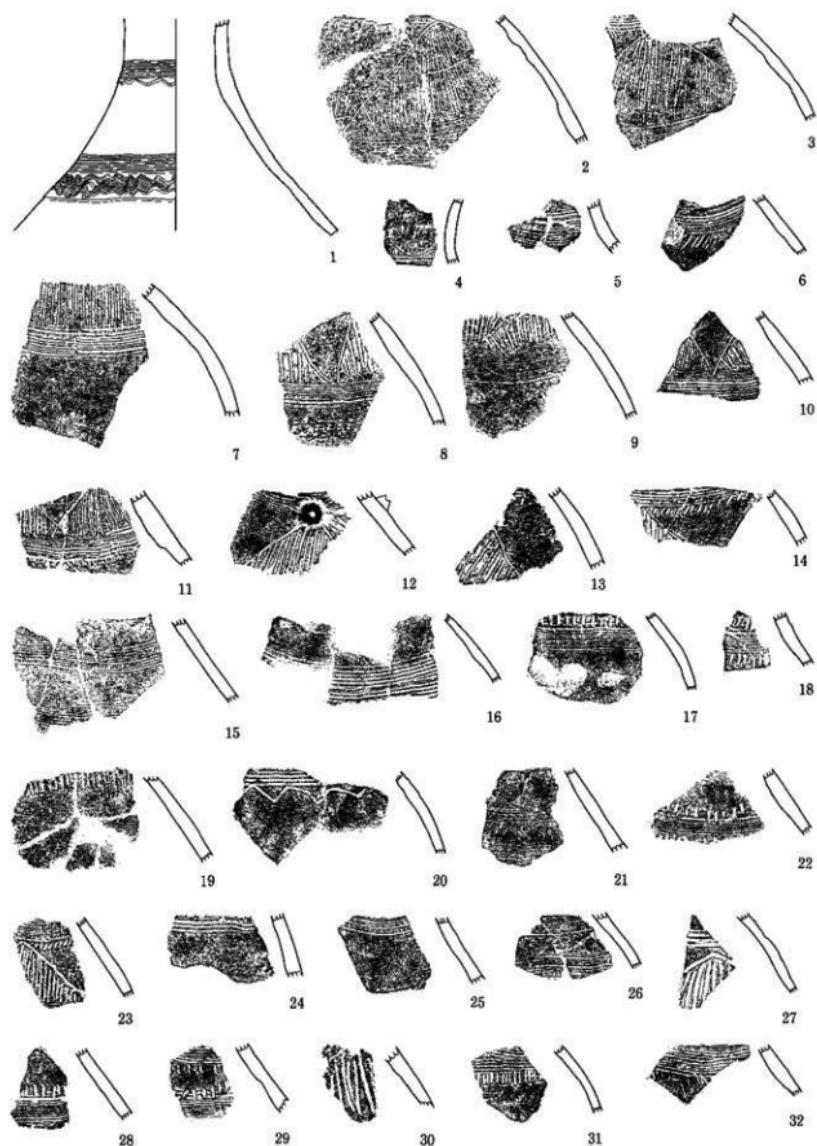
② 石器

石器については第4節（3）で示した分類を踏襲する。

48-1～13がSB15、48-14～16がSM02から出土した石器で、後者についても弥生時代中期後葉からの混入資料と判断される。

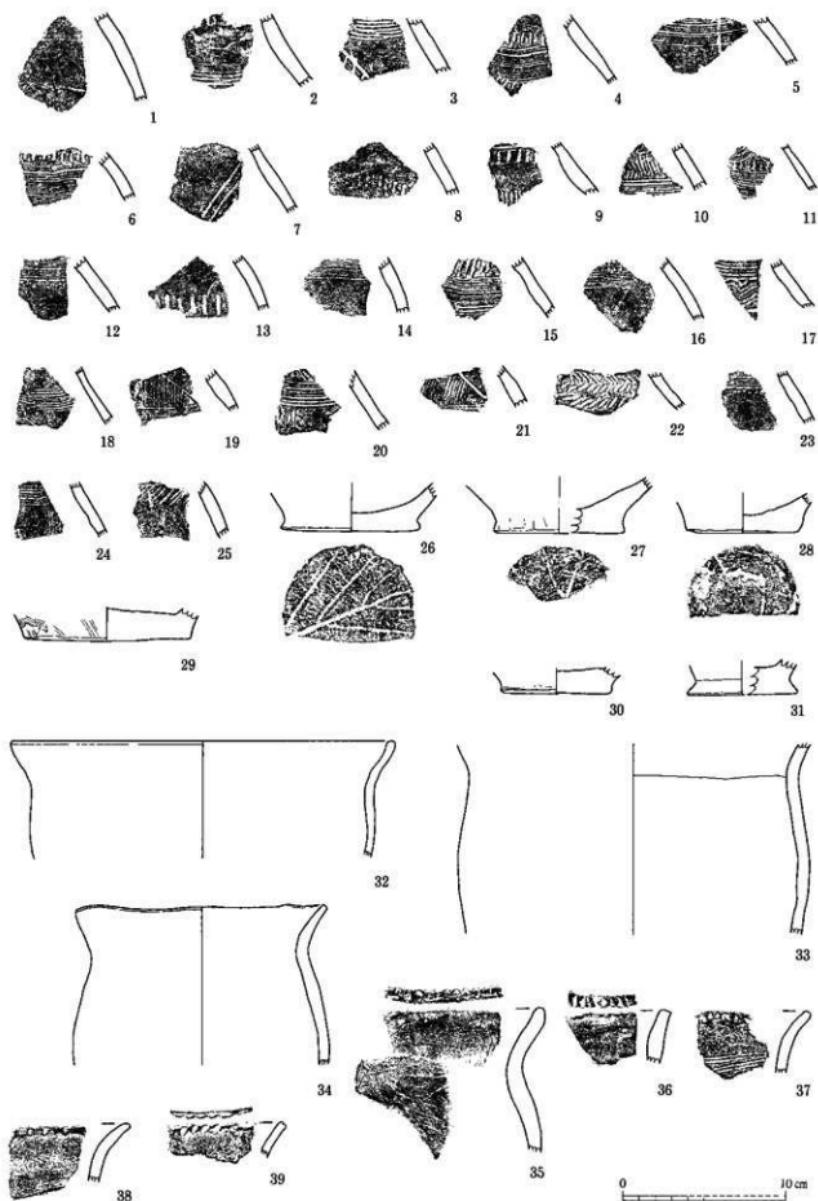
SB15からは打製石斧A（48-1～3）・打製石斧B（48-4・5）・横刃型石庖丁（48-6・7）・磨製石斧B（48-8）・磨製石斧未成品（48-9）・砥石（48-10）・磨製石鎌未成品（48-11）・打製石槍（48-12）・打製石鎌（48-13）が、SM02からは打製石斧B（48-14）・横刃型石庖丁（48-15）・横刃型石器（48-16）が出土した。

竪穴建物1軒と墳丘墓周溝の混入資料ではあるが、耕起具・収穫具・工具・調理具・狩猟具が揃っており、弥生時代中期中葉で成立した弥生的な石器組成がそのまま続いたといえる。なお、打製石鎌は中期中葉まで残存するが有茎鎌が主体であり、縄文時代からの混入の可能性が高い。



0 10 cm

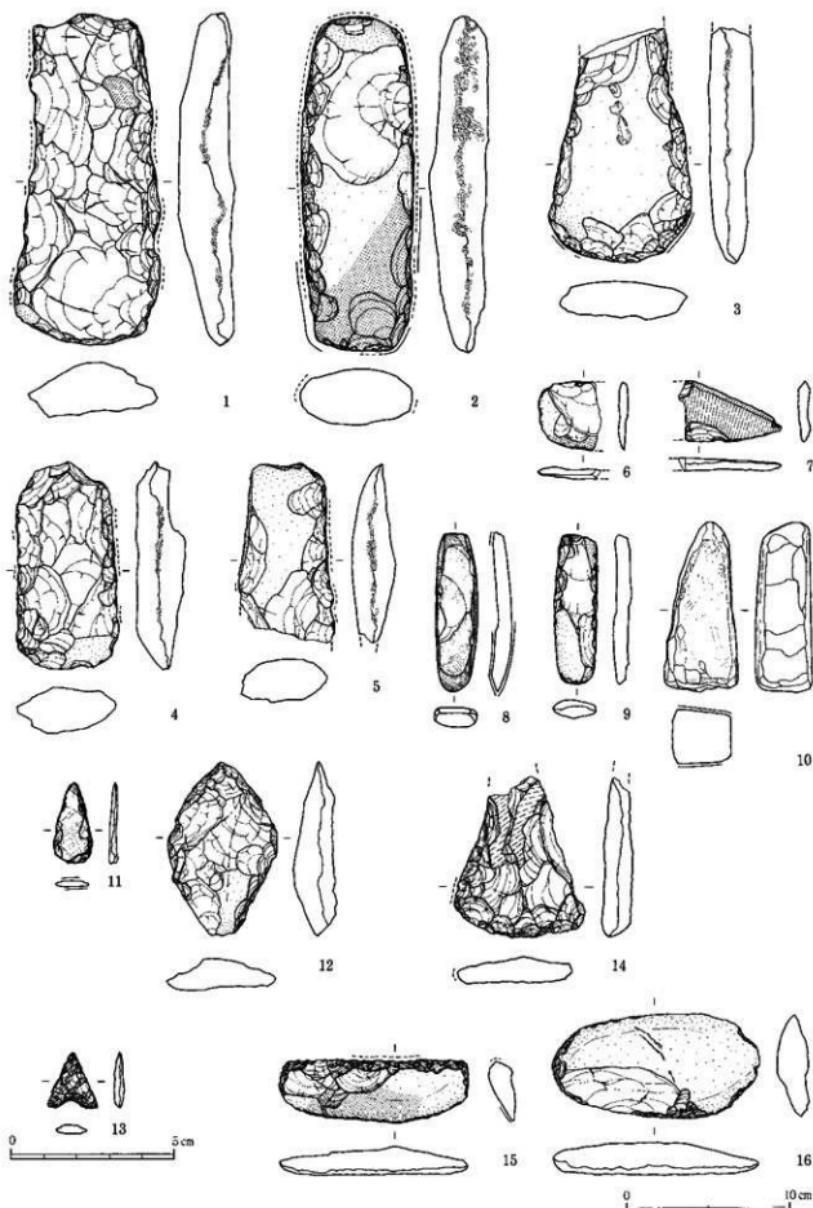
挿図45 SB15出土土器その1



挿図46 SB15出土土器その2



挿図47 SB15 · SM02出土土器



挿図48 SB15・SM02出土石器

図版番号	器種	遺構	法量				石質	残存	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
48-1	打製石斧A	SB15	20.2	8.8	3.3	665	硬砂岩	完形	
48-2	打製石斧A	SB15	20.3	6.8	3.4	810	輝緑凝灰岩	完形	刃部表面使用痕
48-3	打製石斧A	SB15	(14.4)	8.7	2.7	(376)	硬砂岩	基部欠	刃部両面使用痕
48-4	打製石斧B	SB15	12.6	6.2	3.0	254	硬砂岩	完形	
48-5	打製石斧B	SB15	(11.0)	(5.9)	(2.6)	(178)	硬砂岩	刃部欠	
-	打製石斧B	SB15	(9.4)	(4.1)	(1.9)	(70)	硬砂岩	右半部欠	節理で斜めに割れる
-	打製石斧B	SB15	(7.1)	(5.1)	(1.5)	(69)	緑色岩	上半部残	
48-6	横刃型石庖丁	SB15	(4.3)	(3.8)	(0.5)	(12)	硬砂岩	左半部残	
48-7	横刃型石庖丁	SB15	(3.6)	(6.2)	(0.6)	(15) ?	硬砂岩	右半部残	
48-8	磨製石斧B	SB15	9.6	4.0	1.1	46 ?	完形		ノミ形
48-9	磨製石斧未成品	SB15	9.1	2.5	0.9	33	緑色岩	完形	ノミ形
48-10	砥石	SB15	10.4	4.4	3.3	242	砂岩	完形	
48-11	磨製石鏡未成品	SB15	4.9	2.3	0.6	6 ?	完形		
-	磨製石鏡未成品	SB15	(1.4)	(2.1)	(0.2)	1 ?	基部残		研磨過程で破損
48-13	打製石鏃	SB15	1.6	1.5	0.3	0.6	黒曜石	完形	
48-12	打製石櫛	SB15	10.6	6.6	2.5	138	硬砂岩	完形	
-	打製石斧A	SM02	(12.7)	(6.7)	(3.8)	388	硬砂岩	刃部欠	
-	打製石斧A	SM02	(7.9)	(5.8)	(2.6)	122	緑色岩	刃部・基部欠	
48-14	打製石斧B	SM02	(9.8)	8.0	(1.8)	120	硬砂岩	基部欠	
-	横刃型石庖丁	SM02	4.0	(5.5)	(0.8)	(20)	硬砂岩	右半部残	火を受ける
48-15	横刃型石庖丁	SM02	3.9	11.6	1.7	77	硬砂岩	完形	
48-16	横刃型石器	SM02	6.4	12.6	1.9	170	硬砂岩	完形	
-	凹石	ZZZ	9.8	8.0	3.2	408 ?	完形		

第3表 第V次調査出土石器観察表

第V章　まとめ

第III次・第V次調査で検出された遺構・遺物については、第III・IV章で述べたとおりである。調査で得られた成果・課題について時期ごとに指摘してまとめとする。

第1節　弥生時代

(1)　土器・石器について

①　弥生時代中期中葉の土器について

第III次調査でいまひとつ実態が不明であったいわゆる「寺所式土器」が大量に出土し、土器の分類と概要については第IV章で示した。なお、以下の記述はいわゆるを省略して「寺所式土器」とする。すでに述べたように資料的な限界は認められるが、その特徴を抽出して関連する資料と比較することで編年的位置を考察する。これまでの研究成果を踏まえれば、寺所遺跡第III次調査で出土した土器は、一部に弥生時代中期前葉・中期後葉に位置づく資料が認められるが、残りについてはほぼ同一時期の所産として差し支えないと判断される。

壺aの大半は東遠江の嶺田式土器の搬入品である。壺a1は文様構成や胎土から嶺田式土器そのものであり、壺a2は東海から関東に広く分布する平沢式土器であり（植木2017）、いずれも胎土から東遠江からの搬入品である。壺bは文様構成や黒っぽい灰色を呈する色調から三河の瓜郷式土器の搬入品と把握される。壺cの大半は壺aと同様に胎土から東遠江の嶺田式土器の搬入品といえる。壺dについては、そのほとんどが条痕文系土器の岩滑式土器・続水神平式土器・古井堤式土器・丸子式土器と把握され、弥生時代中期前葉に位置づけられる。また、弥生時代中期後葉の北原式土器がわずかに出土した。甕aについては胎土から地元で作られた在地品である。以上から、「寺所式土器」は、遠江からの搬入品である壺a・c・三河からの搬入品である壺b、地元で作られた在地品の甕aによって構成され、その主体となるのは壺a・甕aと把握される。なお、甕bについては一定量組成するが、搬入品か在地品かの検討も十分できていない。あくまでも「寺所式土器」に組成すると現状で把握しておく。

阿島式土器については井戸下遺跡で分類されており、井戸下分類壺a・壺b・甕aは寺所分類と同じ、壺cは寺所分類の壺dに該当する。寺所分類の甕b・壺cは井戸下分類にはない。ただし、寺所分類甕cについては阿島遺跡の小型壺に相当する。

阿島五反田遺跡及び井戸下遺跡の阿島式土器については、市澤英利氏が分析している（市澤2017）。それによると、壺形土器は長頸壺（壺a）が主で、赤彩されないものと赤彩されるものがある。前者は太沈線文・沈線文・繩文・刺突文等が施文されて文様には重三角文・連弧文・重円文・重四角文等、後者は太沈線文・沈線文・繩文・押引文・押圧文等が施文されて文様には紡錘形連弧文・連続爪形文・重円文・重三角文等がある。いずれも胴部下半は条痕文施文される。櫛状工具やヘラ状工具で施文された細頸壺・太頸壺が組成する。受口壺はほとんどなく、小形壺が少数組成する。甕（甕a）は口縁部が外反して最大径となり、丸みのある胴部で平底となる。口唇部が面取りされて角状に仕上げられ、下端に刻目が施文される。口縁部直下から胴部斜位や横位で浅い条痕文が主に施文され、短線文や継縫の条痕文のものがある。

「寺所式土器」については、阿島式土器と比較して以下の特徴が指摘できる。壺はaが主体となるが、赤彩されるものがきわめて少ない。壺aの形態は口縁部が短く外反し、文様に紡錘形連弧文・連続爪形文がみられない。壺a 2とした平沢型壺が一定量組成し、小形壺の壺cもわずかにみられる。なお、壺a・cの一部に在地品があるが、大半は東遠江・三河からの搬入品である。阿島式土器の甕aは施文原体が櫛状工具によるa 2が主体なのに対し、甕aの施文原体が半截竹管のa 1が多く、櫛状工具によるa 2が少ない。阿島式土器には存在しない甕bが組成し、刻み目突帶文のないb 2が多い。なお、既存の「寺所式土器」とされた資料と今次調査の出土資料の様相に大きな相違はなく、同時期と判断される。

阿島式土器との相違は時期差によるものと考えられる。阿島式土器の長頸壺を特徴づける連続爪形文は、寺所式土器壺aにみられる刺突文から発展したと把握される。平沢式土器の壺a 2は阿島式土器にも少量含まれてはいるが、「寺所式土器」に多い傾向は指摘できる。平沢式土器が弥生時代中期前葉から中葉にかけて時間幅があるとはいえる、中葉でも古い要素を示す土器といえる。甕aの施文具は、阿島式土器の新しい段階と把握された井戸下遺跡では櫛状工具が主体となり、前期後葉の茹谷原遺跡の甕は全て半截竹管による施文となる。こうしてみると、中期前葉から中葉にかけて甕の主体的な施文具が半截竹管から櫛状工具に徐々に変換していくものと把握される。半截竹管による条痕文が主体となる寺所式土器はこれも古い要素を示すと考えられる。「寺所式土器」の特徴となる甕bについては、阿島式土器にはまったく組成せず、「寺所式土器」にのみみられる器形といえる。このように、「寺所式土器」に古い要素が多く含まれており、阿島式土器に先行する時期に位置づくと把握される。

東遠江・三河と比較してみる。壺aについては東遠江の嶺田式土器の搬入品がほとんどを占めることが分かっており、壺bは三河の瓜郷式土器の搬入品である。嶺田式土器は甲群・乙群に分類され（鈴木敏則2017）、後者が連続爪形文や赤彩等の特徴から從来の嶺田式土器に典型的とされたものであり、阿島式土器の細頸壺と共に通する。甲群は横位の区画沈線と繩文を多用する細頸壺で口縁部が短く外反するとして、「寺所式土器」の壺aと酷似する。甲群・乙群は嶺田式土器の新旧を示すもので、甲群が寺所式土器、乙群が阿島式土器と並行すると考えられる。壺bについては阿島五反田遺跡出土品が瓜郷式Ⅱ期に比定されている（鈴木とよ江2017）。寺所遺跡出土品については破片資料が多くて詳細は不明であるが、瓜郷式Ⅰ期が主体になると考えられる。こうしたことにより、「寺所式土器」は嶺田式土器の甲類、瓜郷式土器Ⅰ期と並行すると把握できる。

從来の寺所式土器は、中期前葉の続水神平土器や庄の畑式土器と並行すると把握されていた（佐藤1982）。わずかにこの時期の資料が含まれてはいるが、寺所式土器から除外して考える必要がある。同様な例として、阿島五反田遺跡からも中期前葉の資料が出土しており、阿島式土器から除外している（喬木村教委2013）。壺aの文様構成や甕bの存否等の違いはあるが、「寺所式土器」と阿島式土器はきわめて類似しており、大きくみれば阿島式土器の中の新旧とも考えられる。しかし、「寺所式土器」との型式名も広く認知されており、前記の様に把握すると混乱を助長することになりかねない。よって、「寺所式土器」は阿島式土器に先行し、嶺田式土器・瓜郷式土器の古い段階に並行し中期中葉に位置づくと整理される。

これまでのところ、「寺所式土器」は寺所遺跡以外から出土したものは確認できない。唯一、安曇野市緑ヶ丘遺跡は壺a・甕bに類似する資料が出土しており、同時期と把握される。ただし、主体的な甕については相違しており、同一型式とは把握できない。これまで「寺所式土器」として検討してきたが、

土器様相としての内容や時期は明らかにできたと考えられる。飯田・下伊那において、寺所遺跡以外の遺跡で「寺所式土器」のまとまった資料が得られることによって、はじめて空間的な広がりがあると把握される。天竜川の氾濫原に面する低位段丘上のどこかに概期の資料が残されている可能性はある。そうした遺跡が調査されることによって、「寺所式土器」としての土器型式が成立するかの検討が可能になると考える。

② 弥生時代中期中葉の石器について

一覧表で示した点数が170点となり、「寺所式土器」に伴う石器の組成が明らかとなったのも大きな成果といえる。耕起具は打製石斧A・B・収穫具の横刃型石庖丁・有肩扁状形石器・横刃型石器・工具の磨製石斧B・調理具の敲打器・狩猟具・武器の打製石鎌が主要器種となる。阿島式土器段階の阿島五反田遺跡や井戸下遺跡での石器組成と大きく異なることはない。

縄文時代晩期末葉から弥生時代前期では、打製石斧A・打製石斧B・横刃型石器・磨製石斧C・打製石鎌が主要器種となる(山下2017)。「寺所式土器」の段階で、横刃型石庖丁・有肩扁状形石器・磨製石斧Bが出現すると把握される。収穫具の有肩扁状形石器と横刃型石庖丁は、大型直線刃石器（有肩扁状形石器）と石庖丁が稲作の二度刈り用のセットとして西方から伝わったと考えられている（斎野2002・原田2017）。磨製石斧Bは扁平片刃石斧・扁平両刃石斧・ノミ形石器で4点が出土し、木器加工用のものである。問題となるのは磨製石斧Aで、敲打調整等がされる未成品のみの出土のため、本器種が組成に含まれるか判断できない。しかし、磨製石斧で扁平片刃石斧とセットになるのは太形蛤刃石斧であり、大陸系磨製石斧として把握される。第Ⅱ次調査では敲打調整されて刃部等を磨いて作出する太形蛤刃石斧が2点出土しており（佐藤1982）、第Ⅲ次調査の未成品も同様な形態となる可能性が高い。大陸系磨製石斧は弥生時代中期後葉では確認されており（桜井1986）、井戸下遺跡でその存在が推定されていたが（飯田市教委2001b）、中期中葉まで出現がさかのばるかは確定できていなかった。しかし、今次調査の様相から磨製石斧Bは「寺所式土器」に伴うと断定でき、その出現時期を中期中葉に確定できた。大陸系磨製石斧は水田稲作の技術とともに朝鮮半島から北九州に渡来し、西から東に伝わった石器である。稲作の二度刈り用セットとともに、水田稲作に密接に係わる石器として位置づけられる。

飯田・下伊那の石器については、全国的には消滅する弥生時代後期まで盛んにつかわれていることが大きな特徴として把握されてきた。こうしたいわば弥生的な石器のセットが成立するのが、弥生時代中期中葉と考えられる。水田稲作の技術とともに伝來した石器を取り入れ、縄文時代から続く打製石器の技術と融合させて、当地方の風土にあわせて使い続けたものといえる。

（2）集落について

① 弥生時代中期の集落について

第Ⅲ次調査では堅穴建物の可能性が高い遺構が1箇所で調査され、そのほかに遺物集中箇所も確認された。(1)で示したように、第Ⅲ次調査は弥生時代中期中葉の寺所式段階の資料が主体となる。第Ⅴ次調査では中期後葉の堅穴建物1棟が調査され、第Ⅳ次調査分も含めると5棟の堅穴建物が確認されたこととなり、該期集落の一部が明らかとなった。土器の様相をみると時期差はなく重複もしていないので、それぞれの堅穴建物が同時存在したと想定される。調査範囲が限られたため集落域の全体像は不明であるが、第Ⅳ次調査で推定したように大規模集落にはならないものと考えられる。

弥生時代中期中葉の寺所式・阿島式段階は、寺所遺跡（第Ⅰ～Ⅲ次調査）・阿島遺跡は天竜川の氾濫原に面する低位段丘上に立地し、井戸下遺跡は天竜川の氾濫原内の微高地上に立地する。寺所遺跡や阿島遺跡では明確な竪穴建物は調査されていないが、井戸下遺跡では複数の竪穴建物が検出されており、一定の集落を構成していたものと考えられる。これより前段階の中期前葉の資料は飯田盆地周辺ではほとんどなく、伊那山地を超えた南東側の遠山谷の飯田市南信濃尾の島館遺跡や上伊那の駒ヶ根市大城林遺跡から確認されている。前者は竪穴建物3棟で構成される小集落が調査され、後者は木棺墓と土器棺墓が混在する墓域が検出された。このように、天竜川に近い箇所を居住域とする弥生時代中期中葉に大きな画期が認められる。

第Ⅲ次調査の寺所遺跡の調査箇所は、天竜川の氾濫原に面する低位段丘上に立地し、西側の段丘崖下には湿地帯が広がっている。第Ⅰ次調査では、湿地帯と乾燥地帯の境界箇所を調査している。天竜川の氾濫原もしくは段丘崖下の湿地帯の水利が容易に得やすい場所を選んで、本格的な灌漑稻作を開始したとのと把握される。灌漑稻作の技術は、土器様相等からみて東遠江を主体とする東海から波及したものと把握される（鈴木敏則2017）。

寺所遺跡（第Ⅳ・Ⅴ次調査）の調査位置は天竜川の低位段丘上ではあるが、飯田松川の影響を受けている自然堤防上で天竜川の氾濫原からやや離れており、前記寺所遺跡の立地と微妙に異なっている。段丘崖下の湿地帯は狭く、天竜川の氾濫原は飯田松川の氾濫の影響を受けやすい。時期は一段階新しくなる中期後半の北原式の古段階に位置づき、北原式の中段階では、北原遺跡や恒川遺跡群のように、低位段丘上でも天竜川からやや離れた場所に移動する。こうした箇所は周辺に水田適地が広がってはおらず、乾燥した台地も多い箇所となる。稻作ばかりでなく畑作を含めた複合的な農耕がおこなわれたと把握され、それが弥生時代後葉以降の当方の農耕の特徴と把握されている（山下2000）。同一段丘面とはいえ、水田稻作を取り入れた後、当方の風土及びそれまでの雑穀による畑作を加味した複合農耕の適地に集落が移動したと考えられる。

② 弥生時代後期の集落について

弥生時代後期では第Ⅲ次調査で竪穴建物が2棟調査された。SB10の時期が確定できていないが、2棟が同時存在した可能性は指摘できる。調査区が限定されて集落規模等を推測することは困難であるが、後期とおした大規模集落が展開していたとは考えられない。調査地周辺には、弥生時代後葉～終末の比較的小規模な集落が広がっていると推測される。

第2節 古墳時代・平安時代

（1）古墳時代中期後葉の集落・墓域について

第Ⅲ次調査で中期後葉の竪穴建物1棟が調査された。調査範囲が限定され、集落の広がりや規模を推定することは困難である。当方の古墳時代集落の動向をみると、中期中葉に大きな画期があり、この時期以降に営まれる集落が激増する。当方の古墳の構造が中期中葉から一齊に築造され始めることと運動していると考えられている（山下2003）。こうした集落の一つとも想定される。

第Ⅳ次調査で確認されたSM02の北西側周溝の一部を検出し、該期の墓域であることが追認された。馬匹の埋葬は今次調査では確認されなかったが、第Ⅳ次調査で確認されたように、4基の墳丘墓に4頭分の埋葬があり、馬匹生産集団の墓域であると断定できる。

第Ⅲ次調査の竪穴建物と第Ⅳ次・第Ⅴ次調査の墳丘墓はほぼ同時期と考えられる。両者の調査地点間は500m程離れているが、第Ⅳ次・第Ⅴ次調査地点周辺が墓域となり、第Ⅲ次調査地点周辺がその集落域と想定することも可能となる。

(2) 平安時代の集落について

第Ⅲ次調査で平安時代の竪穴建物1棟が調査された。第Ⅰ次調査でも平安時代の竪穴建物1棟が検出されているが、遺物の提示がないので詳細な時期は不明である。第Ⅰ次調査地点と第Ⅲ次調査地点は多少離れているが、同じ集落と把握することも可能である。

第Ⅲ次調査と第Ⅴ次調査で得られた成果を、第Ⅰ次・第Ⅱ次・第Ⅲ次調査分を含めて考察した。特に、弥生時代中期の「寺所式土器」の土器様相が明らかとなり、その編年位置を示すことができたことは大きな成果と考える。周辺地域は宅地化が進んでいるとはいえ、寺所遺跡の多くは地下に保存されている。今後とも、地道な埋蔵文化財包蔵地の保護活動を実施することにより、地域の歴史を明らかにしていく必要がある。

最後になりましたが、調査や整理作業の実施にあたって多大なるご高配・ご協力を頂きました関係者の皆様方に対して感謝を申し上げますとともに、本書刊行が大幅に遅れたことに対してお詫び申し上げます。

引用・参考文献

- 飯田市教育委員会 1971 『妙前大塚（3号）古墳』
- 飯田市教育委員会 1972 『南の原遺跡』
- 飯田市教育委員会 1974 『南の原遺跡』
- 飯田市教育委員会 1976 『清水遺跡』
- 飯田市教育委員会 1978 『毛賀御射山遺跡』
- 飯田市教育委員会 1991 a 『清水遺跡』
- 飯田市教育委員会 1991 b 『城遺跡』
- 飯田市教育委員会 1992 a 『八幡原遺跡』
- 飯田市教育委員会 1992 b 『八幡原遺跡 物見塚古墳』
- 飯田市教育委員会 1993 a 『田圃遺跡』
- 飯田市教育委員会 1993 b 『久井遺跡』
- 飯田市教育委員会 1996 『北の原遺跡 遺構編』
- 飯田市教育委員会 1999 a 『寺所遺跡』
- 飯田市教育委員会 1999 b 『田圃遺跡 II』
- 飯田市教育委員会 2001 a 『妙前遺跡』
- 飯田市教育委員会 2001 b 『井戸下遺跡』
- 飯田市教育委員会 2005 『橘山窯跡』
- 飯田市教育委員会 2007 『飯田における古墳の出現と展開』
- 飯田市教育委員会 2009 『切石遺跡群』
- 飯田市教育委員会 2012 『飯田古墳群』
- 飯田市教育委員会 2013 『飯田古墳群 論考編』
- 喬木村教育委員会 2011 『阿島五反田遺跡』
- 喬木村教育委員会 2013 『阿島五反田遺跡 II』
- 石川日出志 2017 「東日本農耕社会の成立」『三遠南信周辺における中期弥生土器と交流—稻作導入期の社会—』報告編 地域と考古学の会
- 石黒 立人 2017 「貝田町土器とその前後」『三遠南信周辺における中期弥生土器と交流—稻作導入期の社会—』報告編 地域と考古学の会
- 市澤 英利 1991 「下伊那の弥生土器」『下伊那史』第一巻 下伊那誌編纂會
- 市澤 英利 2017 「阿島式土器とその前後」『三遠南信周辺における中期弥生土器と交流—稻作導入期の社会—』報告編 地域と考古学の会
- 植木 雅博 2017 「三遠南信の平沢式土器」『三遠南信周辺における中期弥生土器と交流—稻作導入期の社会—』資料編 地域と考古学の会
- 神村 透 1967 a 「豊丘村林里遺跡」『長野県考古学会誌』4号 長野県考古学会
- 神村 透 1967 b 「寺所遺跡とその他の遺跡」『長野県考古学会誌』4号 長野県考古学会

- 小泉 祐紀 2017 「駿河中期中葉とその前後の土器」『三遠南信周辺における中期弥生土器と交流—稻作導入期の社会—』報告編 地域と考古学の会
- 桜井 弘人 1986 「石製農耕具について」『恒川遺跡群』飯田市教育委員会
- 藤森栄一他 1966 「岡谷市庄の畠遺跡」『松本諏訪地区新産業都市地域内埋蔵文化財緊急分布調査報告』
- 佐藤魁信・宮沢恒之 1967 「喬木村阿島遺跡」『長野県考古学会誌』4号 長野県考古学会
- 佐藤 魁信 1982 「寺所遺跡と寺所式土器」『中部高地の考古学』II 長野県考古学会
- 設楽博己他 2017 『弥生時代人物造形品の研究』 同成社
下伊那地質誌編纂委員会 1976 『下伊那の地質解説』
下伊那誌編纂會 1991 『下伊那史』第一卷
- 鈴木とよ江 2017 「瓜郷土器とその前後」『三遠南信周辺における中期弥生土器と交流—稻作導入期の社会—』報告編 地域と考古学の会
- 鈴木 敏則 2017 「嶺田土器とその前後」『三遠南信周辺における中期弥生土器と交流—稻作導入期の社会—』報告編 地域と考古学の会
- 山下 誠一 2000 「飯田盆地における弥生集落の動向—発掘調査された竪穴住居址を基にして—」『飯田市美術博物館研究紀要』第10号
- 山下 誠一 2003 「飯田盆地における古墳時代前・中期集落の動向—発掘調査された竪穴住居址を基にして—」『飯田市美術博物館研究紀要』第13号
- 山下 誠一 2005 「飯田盆地における弥生時代の石器—組成の変化とその消長について—」『飯田市美術博物館研究紀要』第15号



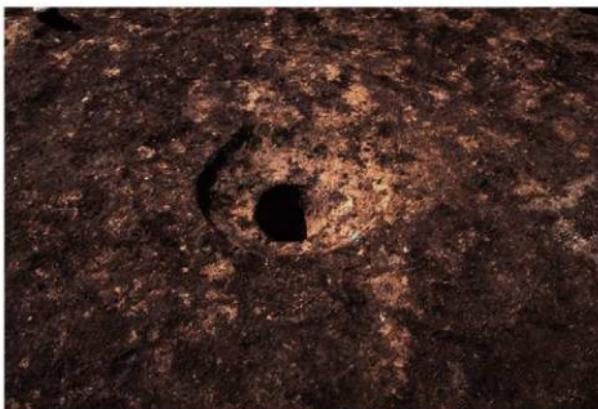
SB07遺物出土状態（部分）



SB07・SB08



SB09



SB09炉址



SB09遺物出土状態



SB10



SB10遺物出土状態（部分）



土坑・小柱穴等（中央部）



土坑・小柱穴等（南西部）



BE35P4・BE35P7



調査区全景（北西から）



調査区全景（南東から）



調査区全景（北東から）



SB07



SB08



SB10



BE35P4・BE35P7及び周辺グリット出土壺 a 1



BE35P4・BE35P7及び周辺グリット出土壺 a 2



BE35P4・BE35P7及び周辺グリット出土壺 a 2



BE35P4・BE35P7及び周辺グリット出土壺 b



BE35P4・BE35P7及び周辺グリット出土壺 c



BE35P4・BE35P7及び周辺グリット出土壺 a 1



BE35P4・BE35P7及び周辺グリット出土壺 a 2



BE35P4・BE35P7及び周辺グリット出土壺 b



SB09及び重複グリット出土壺 a 1



SB09及び重複グリット出土壺 a 1



SB09及び重複グリット出土壺 a 2



SB09及び重複グリット出土壺 b



SB09及び重複グリット出土壺 c



SB09及び重複グリット出土壺 d



SB09及び重複グリット出土壺 a 1



SB09及び重複グリット出土壺 a 1



SB09及び重複グリット出土壺 a 1



SB09及び重複グリット出土壺 a 2



SB09及び重複グリット出土壺 a 2



SB09及び重複グリット出土壺 b 1



SB09及び重複グリット出土壺 b 2



SB09及び重複グリット出土人面付土器（正面）



SB09及び重複グリット出土人面付土器（裏面）



その他グリット等出土壺 a 1



その他グリット等出土壺 a 2



その他グリット等出土壺 b



その他グリット等出土壺 a 1



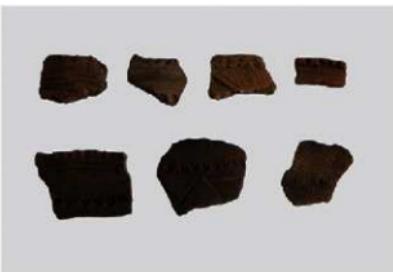
その他グリット等出土壺 a 1



その他グリット等出土壺 a 2



その他グリット等出土壺 b 1



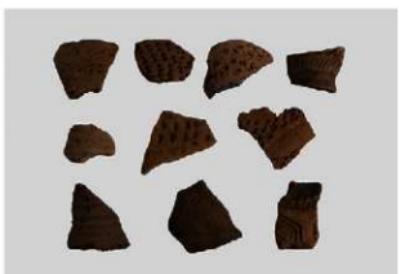
その他グリット等出土壺 b 2



C トレンチ出土壺 a



C トレンチ出土壺 b 2



包含層等出土壺 a 1



包含層等出土壺 a 2



包含層等出土壺 b 1



包含層等出土壺 b 2



BE35P4・BE35P7及び周辺
グリット出土石器



SB09及び重複グリット
出土石器



その他グリット等出土石器



SB15全景（南西から）



SM02全景（北東から）





調査区全景（北から）



調査区全景（南から）



SB15出土壺



SB15出土壺



SB15出土壺



SB15出土集



SB15出土石器



SM02出土石器

報告書抄録

ふりがな	てらどこ						
書名	寺所遺跡						
副書名							
卷次							
編著者名	山下 誠一						
編集機関	長野県飯田市教育委員会						
所在地	〒395-8501 長野県飯田市大久保町2534番地 Tel. 0265-22-4511 FAX 0265-22-7969						
発行年月日	2019年3月29日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 。' "	東経 。' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
てらどこ 寺所遺跡	いいだし 飯田市 まつね てらどこ 松尾 寺所 5748	20205 188	35° 29' 53"	137° 51' 10"	1993/09/09 ～ 1993/10/01	150m ²	寺所地区 コミュニティーエ 火災センターに伴 う発掘調査
てらどこ 寺所遺跡	いいだし 飯田市 まつね あらい 松尾 新井 6133-1	20205 188	35° 30' 6"	137° 51' 22"	1993/10/27 ～ 2010/10/27	126m ²	防火貯水槽設置に 伴う発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
寺所遺跡	集落跡	弥生時代 古墳時代 平安時代	竪穴建物 中期中葉遺物包含層 竪穴建物 竪穴建物	弥生土器・ 石器 土師器・ 須恵器	第Ⅲ次調査		
寺所遺跡	集落跡 その他の墓	縄文時代 弥生時代 古墳時代	竪穴建物 溝塀 墳丘墓	縄文土器 弥生土器・ 石器 土師器	第V次調査		
要約	<ul style="list-style-type: none"> ・第Ⅲ次調査と第V次調査について収録した。 ・第Ⅲ次調査では、弥生時代中期中葉に位置づく多量の土器が出土し、その内容が明らかとなった。また概期の石器組成についても明確となった。弥生時代後期・古墳時代中期・平安時代の竪穴建物を調査し、周辺には概期集落が広がることが把握できた。 ・第V次調査では、弥生時代中期後葉の竪穴建物と古墳時代中期後葉の墳丘墓を調査した。隣接地の第IV次調査結果と照らして、弥生時代中期後葉でも古い時期の集落が広がり、古墳時代中期後葉の馬匹生産集団の墓域であることが再確認できた。 						

寺 所 遺 跡

平成31年3月発行

編集・発行 長野県飯田市大久保町2534番地
飯田市教育委員会
印 刷 龍共印刷株式会社
